県道本・加布里線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

本田孝田遺跡・東スス町遺跡

前原市文化財調査報告書

第 49 集

1993

前原市教育委員会

県道本・加布里線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

本田孝田遺跡・東スス町遺跡

前原市文化財調査報告書

第 49 集

序

前原市の西部、大字本から加布里にいたる県道本・加布里線は、長野川西岸を丘陵裾に沿って走る昔ながらの小規模な道路でありました。この道路も近年の交通事情の変化に伴う通行量の増加から拡幅の必要性が生じ、一部路線を変更し拡幅改良されることとなりました。

本書はこの改良工事に先立ち実施した本田孝田遺跡、東スス町遺跡の発掘調査報告書であります。

本書が文化財愛護思想の普及・啓蒙ならびに郷土の古代史解明の一助となれば幸いに存じます。

末筆となりましたが文化財保護に御理解を頂き、発掘調査に御協力頂きました福岡県前原土木事務所に心より感謝申し上げます。

平成5年3月31日

前原市教育委員会

教育長　樗　木　昭　生

例　　言

1．本書は県道本・加布里線改良工事に先立ち平成３年度に実施した、本田孝田遺跡、東スス町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は福岡県前原土木事務所から委託を受け、前原市教育委員会が行なった。

3．発掘調査および整理作業は本田孝田遺跡を角　浩行が、東スス町遺跡を林　覚が担当した。

4．本書に掲載した平板測量図および遺構実測図の作成は、林・岡部裕俊・角（前原市教育委員会）、河村裕一郎（志摩町教育委員会）、岡田りつ子、柏田睦子、和多治子が行なった。

5．本書に掲載した遺物実測図の作成は角、岡部が行なった。

6．本書に掲載した図面の製図は林、角、末益真奈美、楢崎尚子、中原晴香が行なった。

7．本書に掲載した遺構写真の撮影は林、角が行ない、空中写真の撮影は㈲空中写真企画が行なった。

8．本書に掲載した遺物写真の撮影は岡紀久夫が行なった。

9．本書で示した方位は磁北である。

10．本田孝田遺跡から出土した土器の一部については奥田　尚氏に砂礫の観察を依頼し玉稿をいただいた。

11．本書の執筆はⅣを林が、Ⅰ～Ⅲを角が行なった。

12．本書の編集は林と協議のうえ角が行なった。なお、編集にあたり柴田由美子、末益、楢崎、中原の助力を受けた。

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 6
　1．調査にいたる経過 …… 6
　2．調査の組織 …… 6
Ⅱ．位置と環境 …… 7
Ⅲ．本田孝田遺跡の調査 …… 9
　1．遺跡の概要 …… 9
　2．遺構と遺物 …… 9
　　(1)大　溝 …… 9
　　(2)土　坑 …… 41
　　(3)ピット …… 42
　3．まとめ …… 42
Ⅳ．東スス町遺跡の調査 …… 49
　1．遺跡の概要 …… 49
　2．遺構と遺物 …… 49
Ⅴ．付　論 …… 51

挿 図 目 次

Fig.1　本田孝田遺跡、東スス町遺跡の位置と周辺の遺跡（1／50,000） …… 8
Fig.2　遺跡周辺の地形（1／5,000） …… 10
Fig.3　調査区全体図（1／200） …… 11
Fig.4　大溝土層断面実測図（1／80） …… 12
Fig.5　第3層土器出土状況（1／200） …… 12
Fig.6　青銅製鋤先出土状況（1／20） …… 12
Fig.7　土器群⑤実測図（1／40） …… 12
Fig.8　第3層出土土器実測図Ⅰ（1／4） …… 13
Fig.9　第3層出土土器実測図Ⅱ（1／4） …… 14
Fig.10　第3層出土土器実測図Ⅲ（1／4） …… 15
Fig.11　第3層出土土器実測図Ⅳ（1／4） …… 16
Fig.12　第3層出土土器実測図Ⅴ（1／4） …… 17

Fig.13　第3層出土土器実測図Ⅵ（1／4）…… 18
Fig.14　第3層出土土器実測図Ⅶ（1／4）…… 19
Fig.15　第3層出土土器実測図Ⅷ（1／4）…… 20
Fig.16　第3層出土土器実測図Ⅸ（1／4）…… 21
Fig.17　第3層出土土器実測図Ⅹ（1／4）…… 22
Fig.18　第3層出土土器実測図 Ⅺ（1／4）…… 23
Fig.19　第2層土器出土状況（1／200）…… 26
Fig.20　土器群③実測図（1／80）…… 26
Fig.21　土器群④実測図（1／80）…… 26
Fig.22　第2層出土土器実測図Ⅰ（1／4）…… 27
Fig.23　第2層出土土器実測図Ⅱ（1／4）…… 28
Fig.24　第2層出土土器実測図Ⅲ（1／4）…… 29
Fig.25　第2層出土土器実測図Ⅳ（1／4）…… 30
Fig.26　第2層出土土器実測図Ⅴ（1／4）…… 31
Fig.27　第2層出土土器実測図Ⅵ（1／4）…… 32
Fig.28　第2層出土土器実測図Ⅶ（1／4）…… 33
Fig.29　第2層出土土器実測図Ⅷ（1／4）…… 34
Fig.30　第1層土器出土状況（1／300）…… 36
Fig.31　土器群①、②実測図（1／80）…… 36
Fig.32　第1層出土土器実測図Ⅰ（1／4）…… 37
Fig.33　第1層出土土器実測図Ⅱ（1／4）…… 38
Fig.34　第1層出土土器実測図Ⅲ（1／4）…… 39
Fig.35　その他の出土遺物実測図（1／2）…… 40
Fig.36　土坑①実測図（1／40）…… 41
Fig.37　調査区全体図（1／200）…… 50

図　版　目　次

PL. 1－a　本田孝田遺跡全景（上から）
　　b　ピット・土坑（上から）
PL. 2－a　大溝第1層土器群①検出状況（全景・南西から）
　　b　同　　上　（土器7、8・北西から）

ＰＬ．３－ａ　大溝第２層土器群③検出状況（全景・北西から）
　　ｂ　同上土器群④－ａ検出状況（北東から）
ＰＬ．４－ａ　大溝第３層土器群⑤検出状況（北東から）
　　ｂ　青銅製鋤先出土状況（南東から）
ＰＬ．５　出土遺物Ⅰ（第３層出土）
ＰＬ．６　出土遺物Ⅱ（第３層出土）
ＰＬ．７　出土遺物Ⅲ（第３層出土）
ＰＬ．８　出土遺物Ⅳ（第３層出土）
ＰＬ．９　出土遺物Ⅴ（第３層出土）
ＰＬ．10　出土遺物Ⅵ（第２層出土）
ＰＬ．11　出土遺物Ⅶ（第２層出土）
ＰＬ．12　出土遺物Ⅷ（第２層出土）
ＰＬ．13　出土遺物Ⅸ（第１層出土）
ＰＬ．14　出土遺物Ⅹ（第１層他出土）
ＰＬ．15－ａ　東ススキ町遺跡全景（上から）
　　ｂ　北部遺構検出状況（上から）
　　ｃ　南部遺構検出状況（上から）

表　目　次

Tab.１　出土土器観察表
Tab.Ⅰ　土器の表面に見られる砂礫種
Tab.Ⅱ　博多を中心とした河川の砂礫

Ⅰ．はじめに

1．調査にいたる経過

平成２年夏、福岡県前原土木事務所から県道本・加布里線改良工事に伴い路線内の埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。これをうけた前原町教育委員会は予定路線内に本田孝田遺跡、東スス町遺跡の２ヵ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する旨を回答し、発掘調査についての協議を行った。協議の席で当教育委員会は、近年予定路線の隣接地で実施している長野川流域ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財調査の結果から遺構の存在が確実であることを伝えた。これに対して土木事務所から路線の変更は不可能であるとの回答と、発掘調査を実施してもらいたいとの要請を受けた。そこで発掘調査も止むを得ないと判断し、平成３年度に発掘調査を実施し報告書を作成することで合意した。

ところが発掘調査を開始してみると当初の予想を上回る多量の遺物が出土したため平成３年度内の報告書作成は困難となり、協議の結果整理作業は平成４年度に実施することとした。

発掘調査は平成３年６月18日に開始し、10月４日に無事終了した。整理作業は平成４年10月１日に開始し、平成５年３月31日に終了した。

2．調査の組織

本田孝田遺跡、東スス町遺跡の発掘調査および整理作業は以下の体制で行なった。なお前原町は平成４年１０月１日に市制施行し、前原市となっている。

	発掘調査（平成３年度）		整理作業（平成４年度）	
	前原町教育委員会		前原市教育委員会	
総括	教育長	樗木昭生	教育長	樗木昭生
	文化課長	加幡怡都城	教育部長（文化課長兼務）	菊竹利嗣（平成4年4月～11月）
	文化課文化財係長	吉村耕治	文化課長	清水義弘（平成4年12月～）
			文化課文化財係長	川村　博
庶務	同　文化振興係長	中園俊二	同　文化振興係長	吉村耕治
調査・整理	同　文化財係主事	林　　覚	同　文化財係主事	林　　覚
		角　浩行		角　浩行

なお、末筆ではありますが砂礫の観察について玉稿をいただいた奥田　尚氏、休日を利用し遺構実測をお手伝いいただいた志摩町教育委員会の河村裕一郎氏、調査及び整理作業員として御協力いただいた方々には心より感謝申し上げます。

Ⅱ．位置と環境

本田孝田遺跡、東スス町遺跡はいずれも前原市の西部を北に流れる長野川の中流左岸の段丘上に位置している。標高はそれぞれ17ｍと12ｍを測る。本市西部は佐賀県と境を隔てる雷山山系から北に派生する標高50～100ｍの丘陵地帯が広がっており、わずかに長野川流域にまとまった平野が形成されている。この平野も両側に丘陵が迫り川を中央に幅500ｍ、長さ４kmの狭小な平野となっている。現在長野川流域の平野部は隅々まで水田化されているが、近世に至るまでこの川はかなり流路を変えていたようで、水田可耕地はかなり限定されていたものと考えられる。しかしながらこのような地理的条件にも関わらずかなりの遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡を概観してみると、前期の遺跡はやや希薄で現在のところ上流に近い長野、飯原で確認されているのみである。長野宮ノ前遺跡(岡部 1989)では、縄文時代晩期から弥生時代前期初頭にかけての支石墓、木棺墓、土壙墓が検出されており、２号墓、８号墓には朱が塗布されていた。飯原門口遺跡からは前期末の住居跡、甕棺が検出されている。

中期になると遺跡は下流側にみられ、東下田遺跡、東太田遺跡からは住居跡、甕棺墓等が検出されている。両遺跡を包括する東遺跡群は長野川流域の中心的な集落であると考えられる。

後期になると遺跡は流域全体に広がり、東下田遺跡、東太田遺跡では中期から引き続き集落が営まれている。また、東高田遺跡(岡部 1990)、本田孝田遺跡に集落が出現し、川を挟んだ東五反田遺跡にも集落が営まれる。飯原門口遺跡からも住居跡が検出されている。東二塚遺跡からは甕棺からガラス釧、玉類が出土したことが知られている(原田 1974)。本田孝田遺跡からも小児用甕棺からガラス玉が出土している。その他墳墓遺構として特筆すべきものに東五反田遺跡の方形周溝墓が挙げられる。甕棺を主体部としており、弥生終末のものである。

古墳時代では前期古墳として有名な一貴山銚子塚古墳(小林他 1952)が存在する。糸島最大の前方後円墳で全長103ｍを測り、主体部の竪穴式石室からは10面の鏡が出土している。中期の釜塚古墳(石山 1981)は墳丘径56ｍ、周溝を含めた径は72ｍにも達する大型の円墳である。その他小規模ではあるが前方後円墳が多く存在している。

長野川流域における弥生後期から古墳時代にかけての遺跡の発展は目覚ましく、このことは当時この地域がなんらかの重要性を帯びていたことの証であろうと思われる。

（引用文献）

石山　勲 1981 『釜塚』前原町教育委員会

岡部裕俊編 1989 『長野川流域の遺跡群Ⅰ』前原町教育委員会

岡部裕俊 1990 『長野川流域の遺跡群Ⅱ』前原町教育委員会

小林行雄・有光教一・森貞次郎編 1952 『一貴山銚子塚古墳の調査報告』福岡県教育委員会

原田大六監修 1974 『前原町文化財地名表』前原町教育委員会

1本田孝田遺跡　2東スス町遺跡　3長野宮ノ前遺跡　4飯原門口遺跡　5東下田遺跡
6東太田遺跡　7東五反田遺跡　8東高田遺跡　9東二塚遺跡　10蔵持古屋敷遺跡
11上鐘子遺跡　12伏龍遺跡　13篠原新建遺跡　14寺浦遺跡　15上町向原遺跡
16浦志遺跡　17平原遺跡　18石崎曲り田遺跡　19一貴山銚子塚古墳　20釜塚古墳
21志登支石墓群　22御道具山古墳　23泊大塚古墳
A東遺跡群　B大浦遺跡群　C荻浦遺跡群

Fig. 1　本田孝田遺跡、東スス町遺跡の位置と周辺の遺跡（1/ 50,000）

Ⅲ．本田孝田遺跡の調査

1．遺跡の概要

調査地点はほ場整備事業に伴う調査の結果に基づき、工事区間の最も南側の県道前原富士線に接続する所とした。所在地は福岡県前原市大字本1673番地である。

遺跡は長野川左岸の標高17m程の段丘上に位置する。以前弥生土器が採集されたともあるようで、平成2年度に実施したほ場整備事業に伴う調査（1次調査）では弥生後期の住居跡(？)1、甕棺2が検出されている。甕棺は小児用であるが内面には赤色顔料が塗られており、ガラス玉が出土している。このことより住居跡等の遺構が検出されるものと予想されたが、調査を開始すると弥生後期～古墳前期の大量の遺物を包含する大溝(自然の谷？)が検出された。調査区は長さ40m、幅12mで大溝はその全体にわたり存在した。結果的には大溝に幅12mのトレンチを設定したような調査となった。大溝の南東側は削平を受けているためか全く遺構が検出されなかったが、北西側には土坑、ピット群が存在した。大溝からの出土遺物はそのほとんどが土器で、若干の石器、木器等がある。量的にはパンコンテナー約300箱であり、特筆すべき遺物として青銅製鋤先、漆器がある。

2．遺構と遺物

(1)大　溝

B～Hグリッドにかけて検出した。幅24m、深さ1.15mが遺存する。自然の谷(流路)と考えられ、地形からすると流れの方向は南西から北東に向く。溝底はほぼ平坦であるがC～Dグリッドにかけてやや深い部分がある。溝の断面はやや開きぎみの台形を呈する。埋土は3層に分けられ、第1層は黒褐色土層で厚さ20cm程で北西側では薄くなり消滅している。第2層は暗黄灰褐色土層で厚さ50～20cm程である。第3層は暗黒灰褐色土層で厚さ60～30cm程である。各層ともに大量の土器を出土する遺物包含層である。底面には薄い砂質土の堆積がみられ流水があったものと考えられる。また一部には湿地性植物の腐食土層の堆積もみられた。湧水はほとんど無くわずかにしみ出てくる程度であったが、これは溝埋土各層が粘質で非透水性の土質であったためであろう。しかし底面からは若干の湧水がみられ、一晩で溝底から約30cmの水位となっていた。

埋土中からは多量の土器を中心とした遺物が出土しているが、本書では主に土器について報告している。その他の遺物について概略を紹介すると、石器については石庖丁、打製石斧、紡錘車、石錘、砥石、火鑽臼(？)等が、木器については広鍬、木製円盤、棒状木器、板状木器が、土製品については紡錘車、土錘等が出土している。また、手捏ね土器、ミニチュア土器等も出土している。

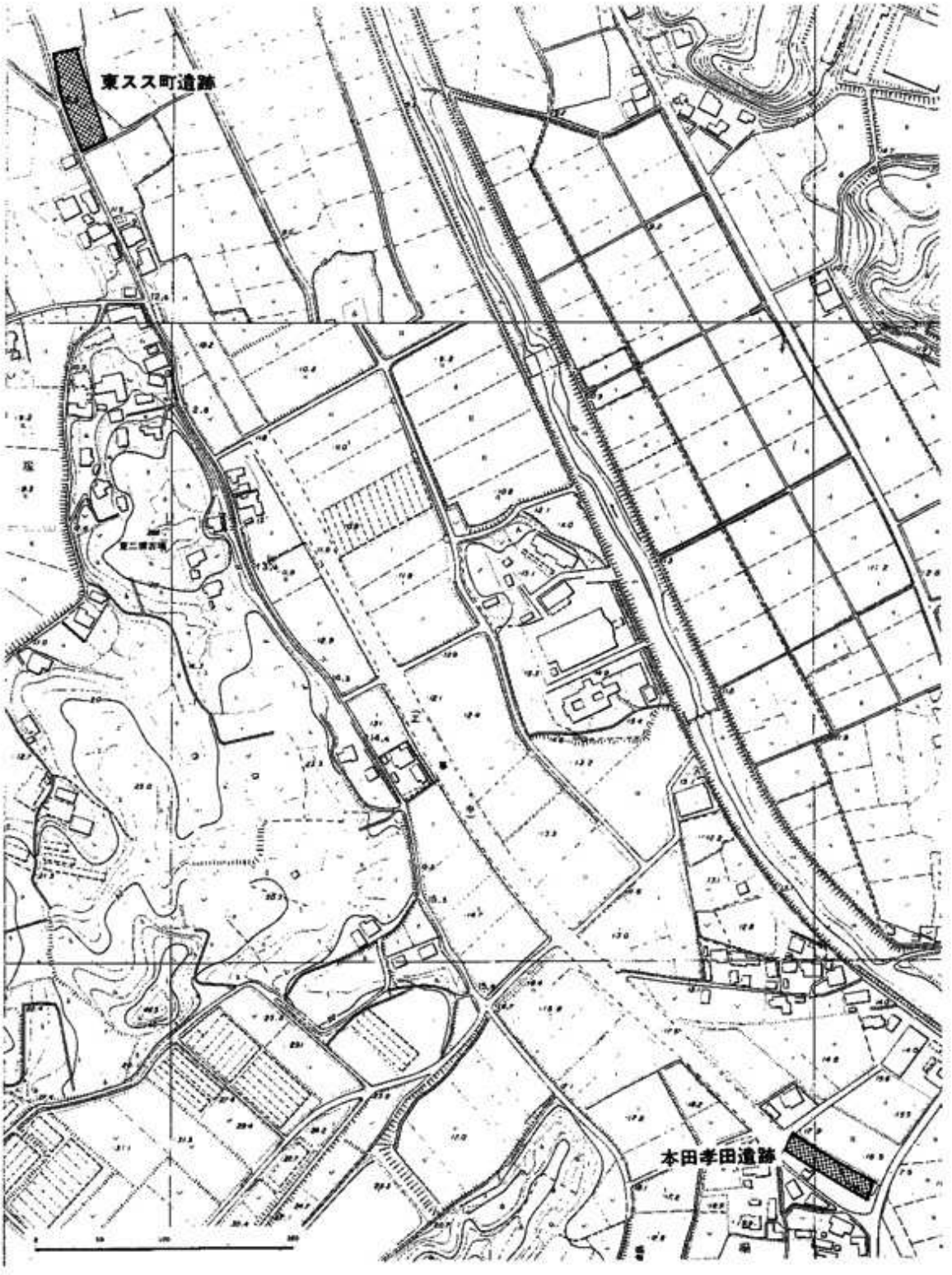


Fig. 2　遺跡周辺の地形（1/ 5,000）

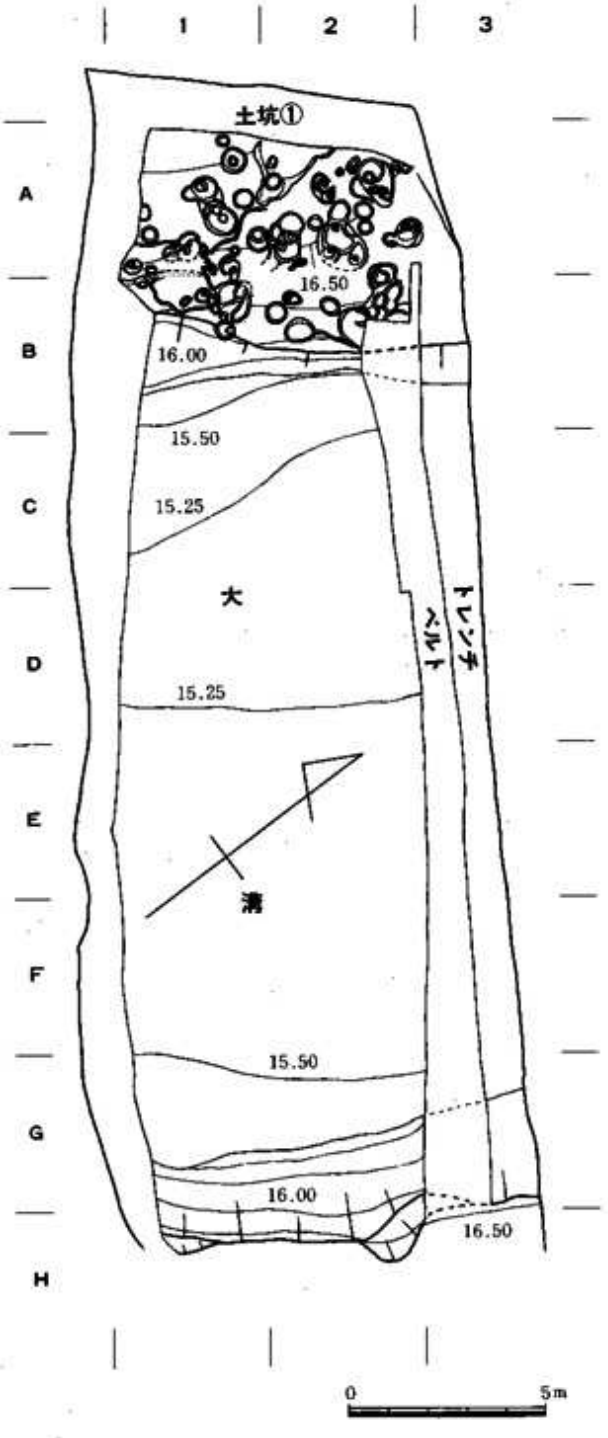


Fig. 3　調査区全体図（1/ 200）

i）第３層土器出土状況

（Ｆｉｇ．５～７）

Ｇ、Ｈグリッドからは溝底およびそれに近い位置から、比較的完形に近い土器が多く出土している。Ｃ－２グリッドからは完形品を含む土器群⑤が検出されているが、こちらは溝底から30cm程浮いている。またその周囲からも比較的完形に近い土器が若干出土している。Ｃ－１グリッドからは青銅製鋤先が出土している。

ii）第３層出土土器

（Ｆｉｇ．８～18）

甕（Ｆｉｇ．８～11）　１～16は中型の甕である。１～６は鋤形口縁を持ち、胴部中程からすぼまる器形である。器高30cm前後、口径28cm前後で胴部最大径は口縁径を越えない。調整は外面がナデのもの（１、３）、ハケで口縁下部をナデ消すもの（２、４～６）がある。口縁下部に低い突帯状の隆起をもつもの（４、５）、段をもつもの（１、２）がある。いずれも外面にススが付着し、底部内面に炭化物のコゲ付きのみられるものもある。７は口縁がＬ字状を呈しやや内傾する。器高約26cmとやや小型である。調整は内外面ともにハケであり、底部付近に細かいヨコハケを施す。粗雑な感じの作りである。８～15は「く」の字口縁の甕で胴長のもの（９、11、12）、丸味をもつもの（８）がある。底部はいずれも平底である。器高は34cm前後のもの（９、11）が多いようであ

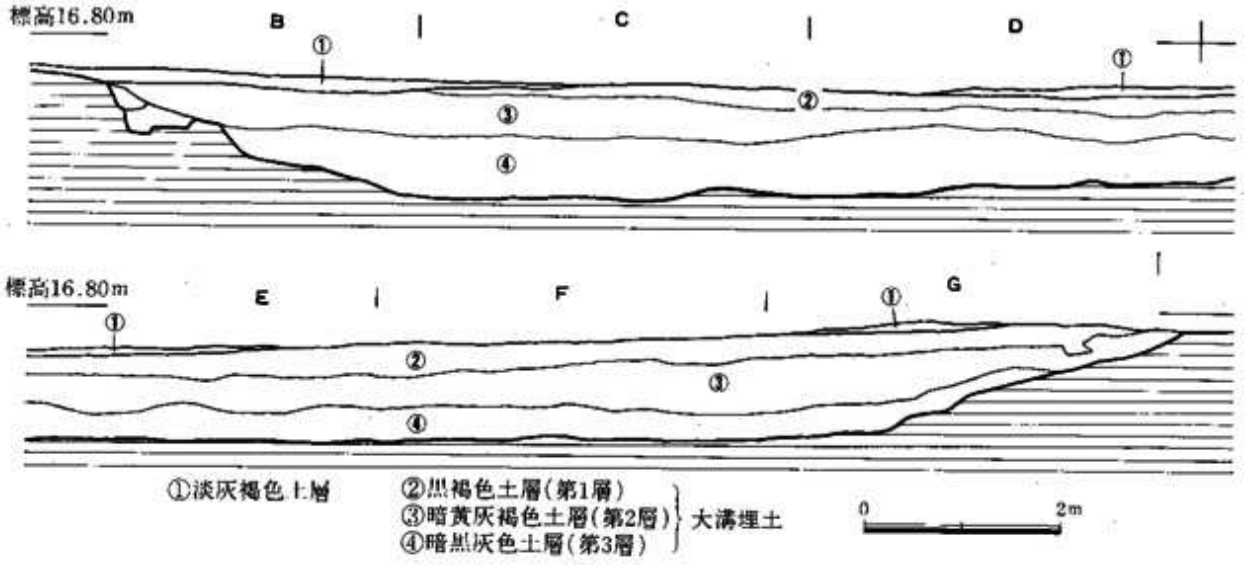


Fig. 4　大溝土層断面実測図（1/80）

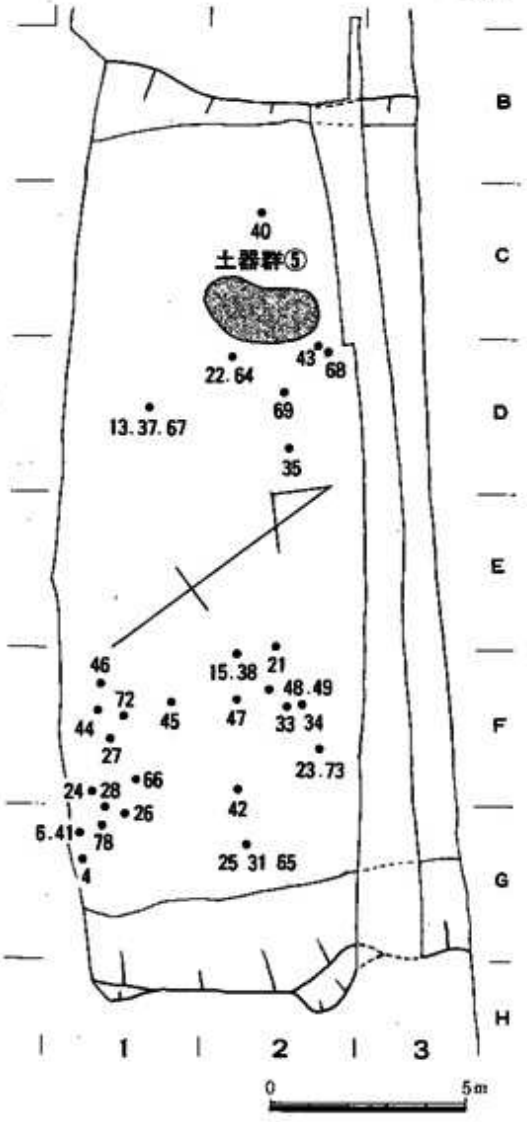


Fig. 5　第3層土器出土状況（1/200）

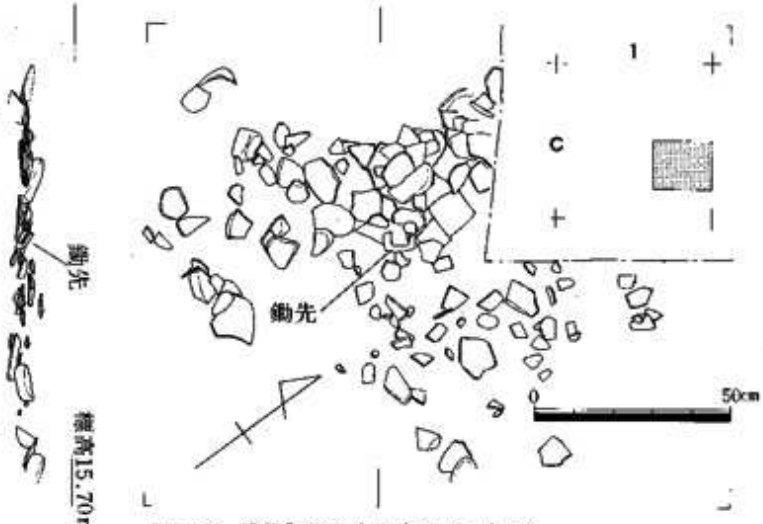


Fig. 6　青銅製鋤先出土状況（1/20）

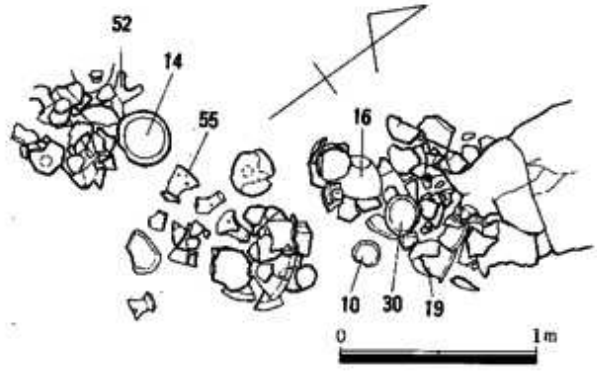


Fig. 7　土器群⑤ 実測図（1/40）

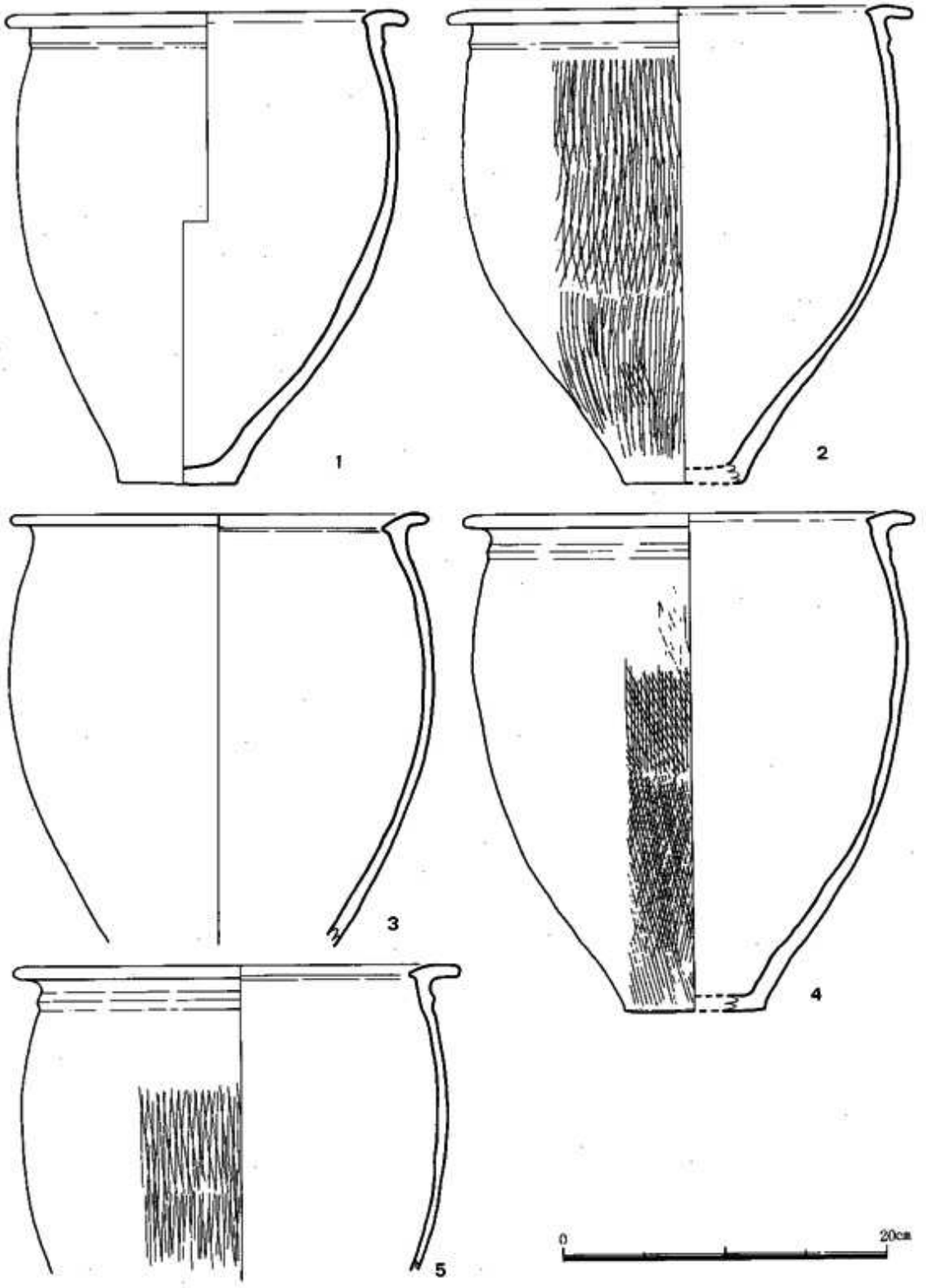


Fig. 8　第3層出土土器実測図Ⅰ（1/4）

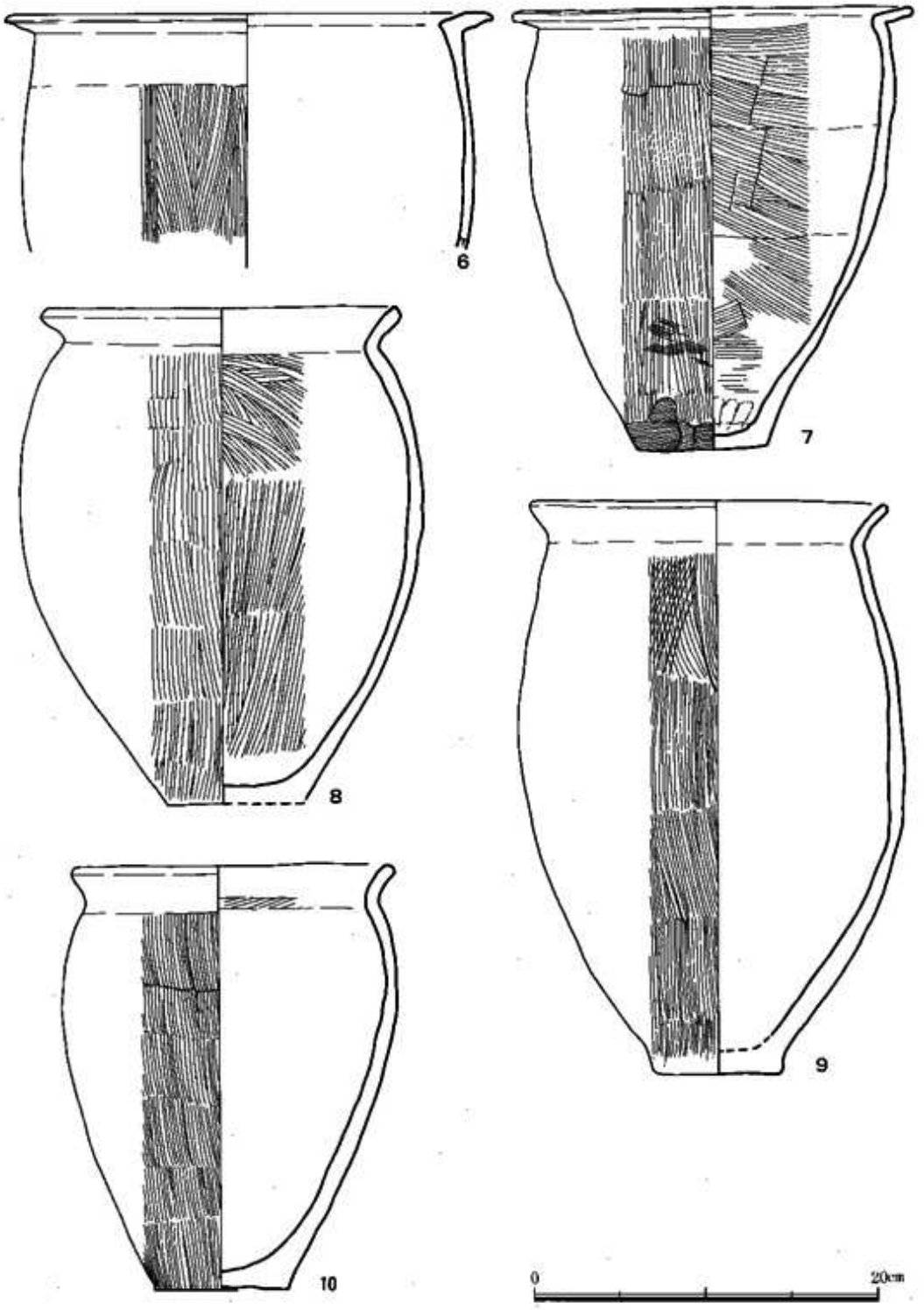


Fig. 9　第3層出土土器実測図Ⅱ（1/ 4）

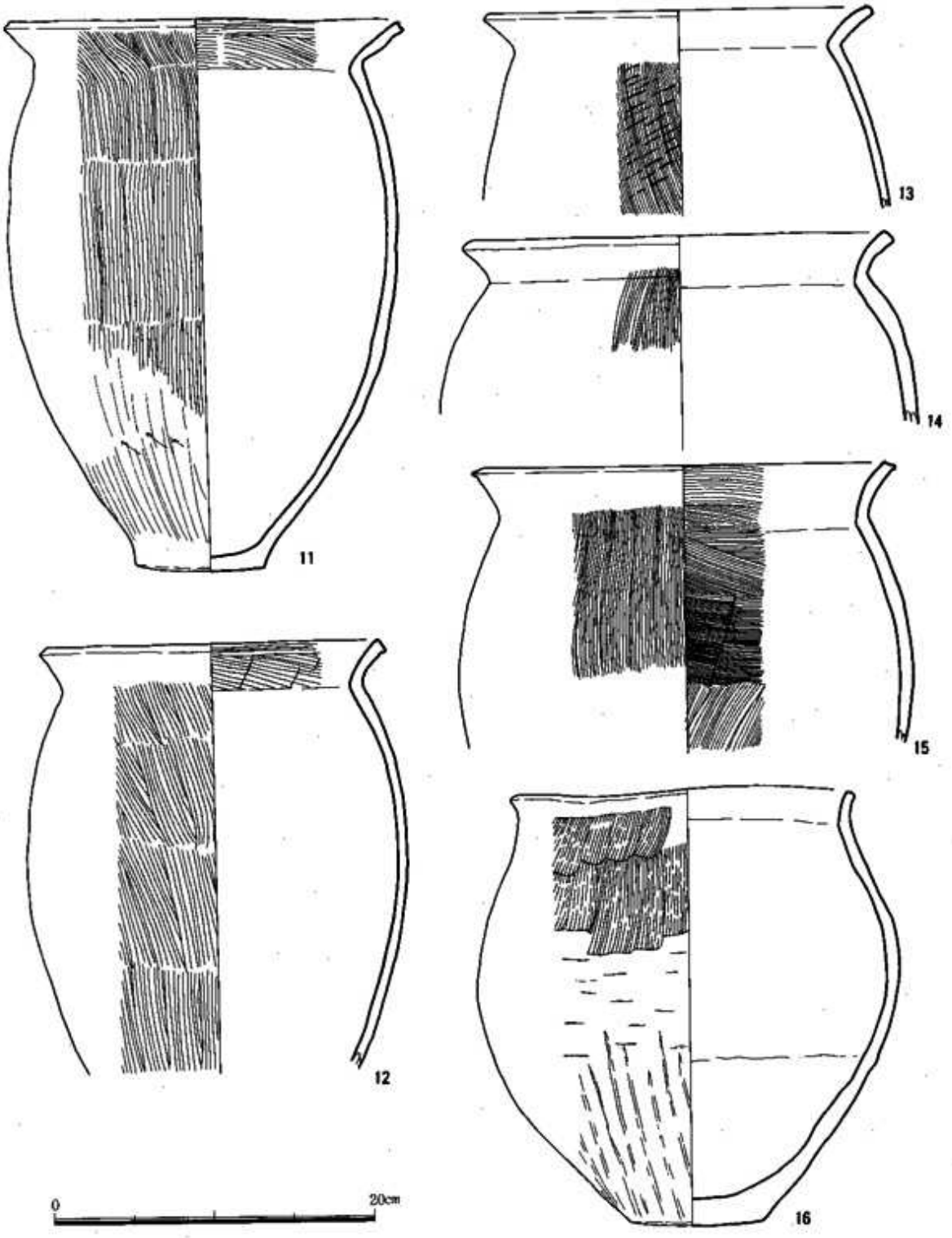


Fig.10　第3層出土土器実測図Ⅲ（1/ 4）

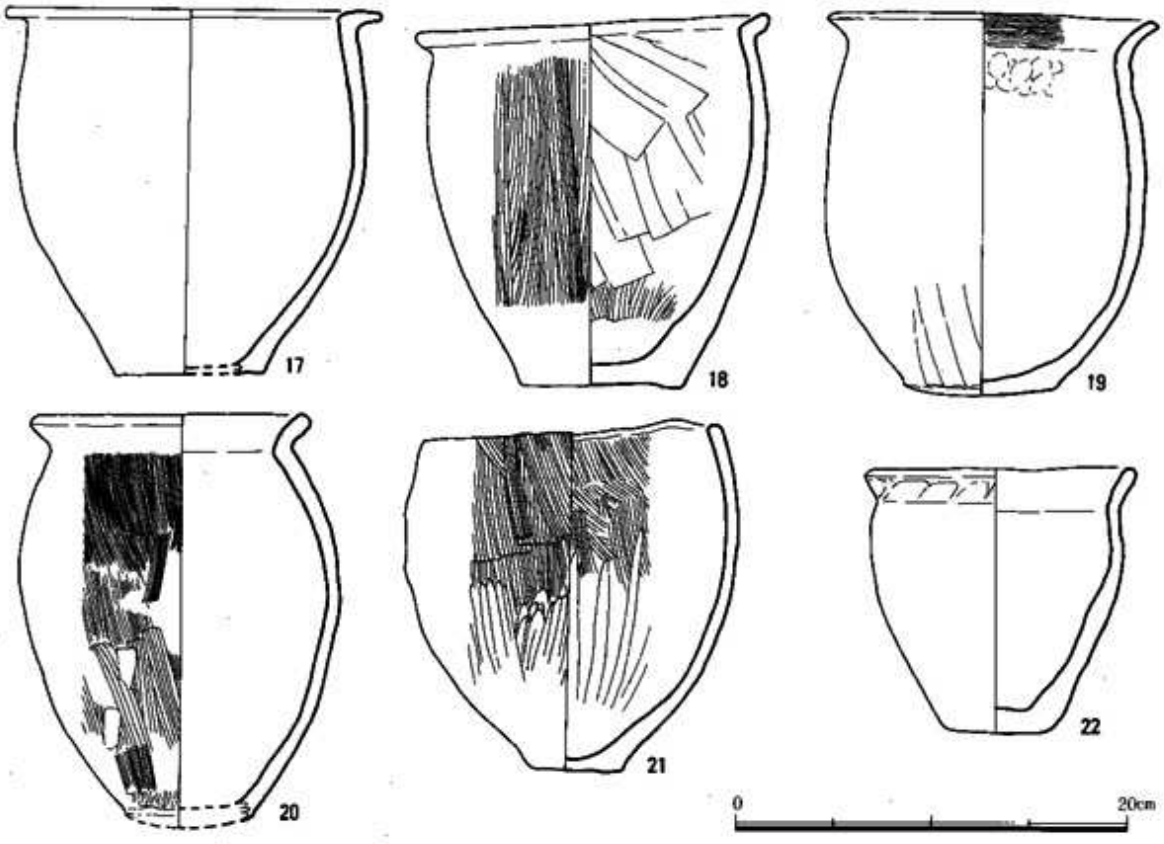


Fig.11　第3層出土土器実測図Ⅳ（1/ 4）

るが、8、10のようにやや小型のものもある。胴部最大径は口縁径を上回る。調整はいずれも外面はハケであるが、タタキのみられるもの(13)や底部付近をケズリ後荒いハケを施すものもある。内面はほとんどがナデであるが、ハケのもの(15)もある。16は胴上半がすぼまり口縁部がゆるく外反する異形の甕である。17～22は器高20cm前後の小型の甕である。17は鋤形口縁の甕で、調整は外面板状工具によるナデ、内面ナデである。18はL字状のやや内傾する短い口縁をもつ。調整は外面ハケで底部付近はナデで、内面は板状工具によるナデで底部付近はハケおよびナデである。19、20、22は「く」の字口縁の甕である。19はやや下ぶくれの器形で底部は凸レンズぎみの平底で、底部付近にケズリを施す。20は底部を欠損するが、凸レンズ状になると思われる。調整は外面ハケで、内面はナデである。22はやや小型で、調整は内外面ともにナデである。焼成があまく雑な感じの作りである。21は口縁が屈曲しない甕で胴上半がややすぼまる。調整は内外面ともにハケであるが、下半部に荒いミガキを施す。

鉢(Ｆｉｇ．12、13－38、39)　23～26、29、30、32は口縁が屈曲する鉢で大きさが、大、中、小の３種類ある。23～26は小型で23は体部が直線的にのびる。底部はいずれも平底である。26

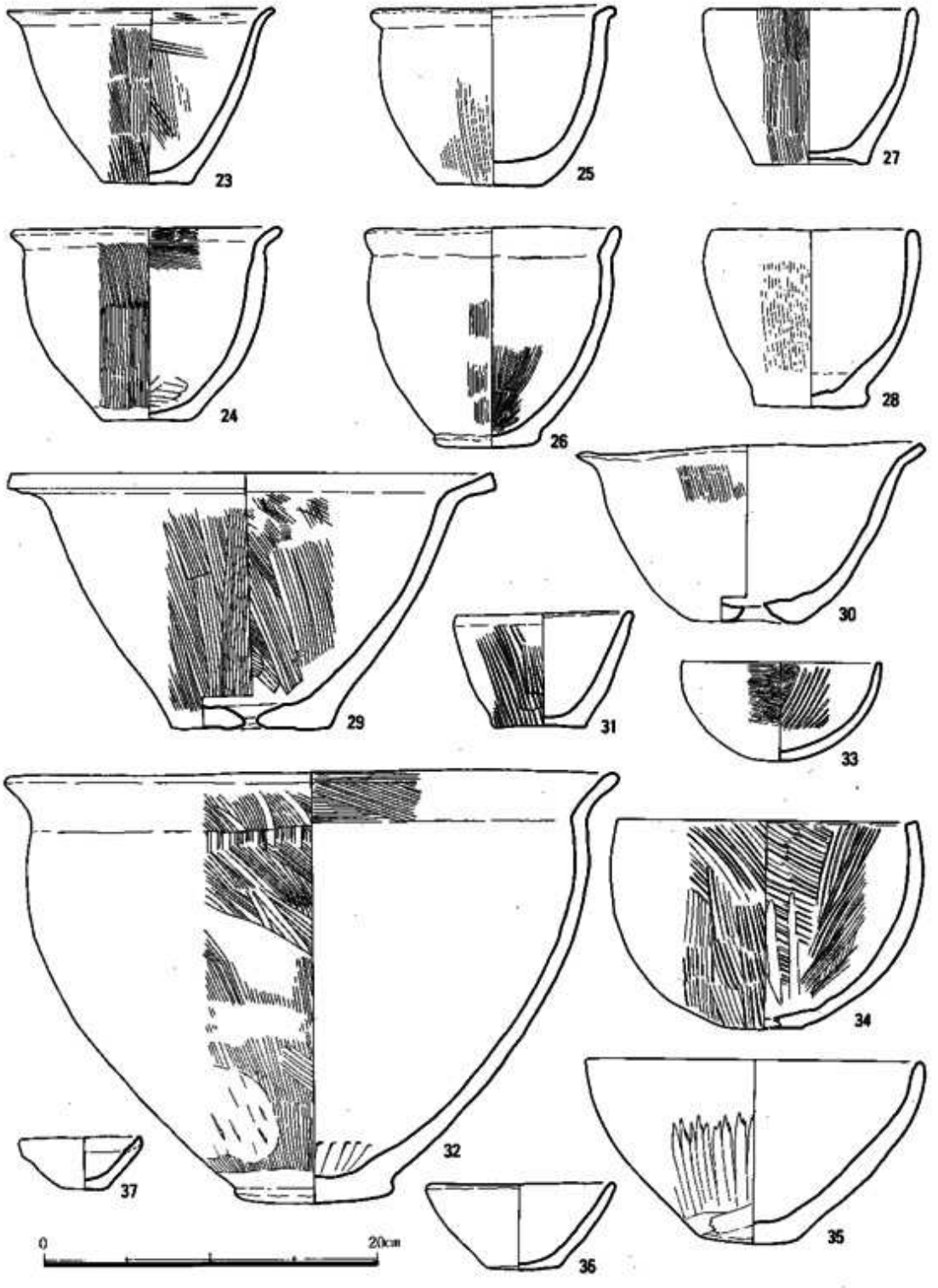


Fig.12 第3層出土土器実測図V（1/ 4）

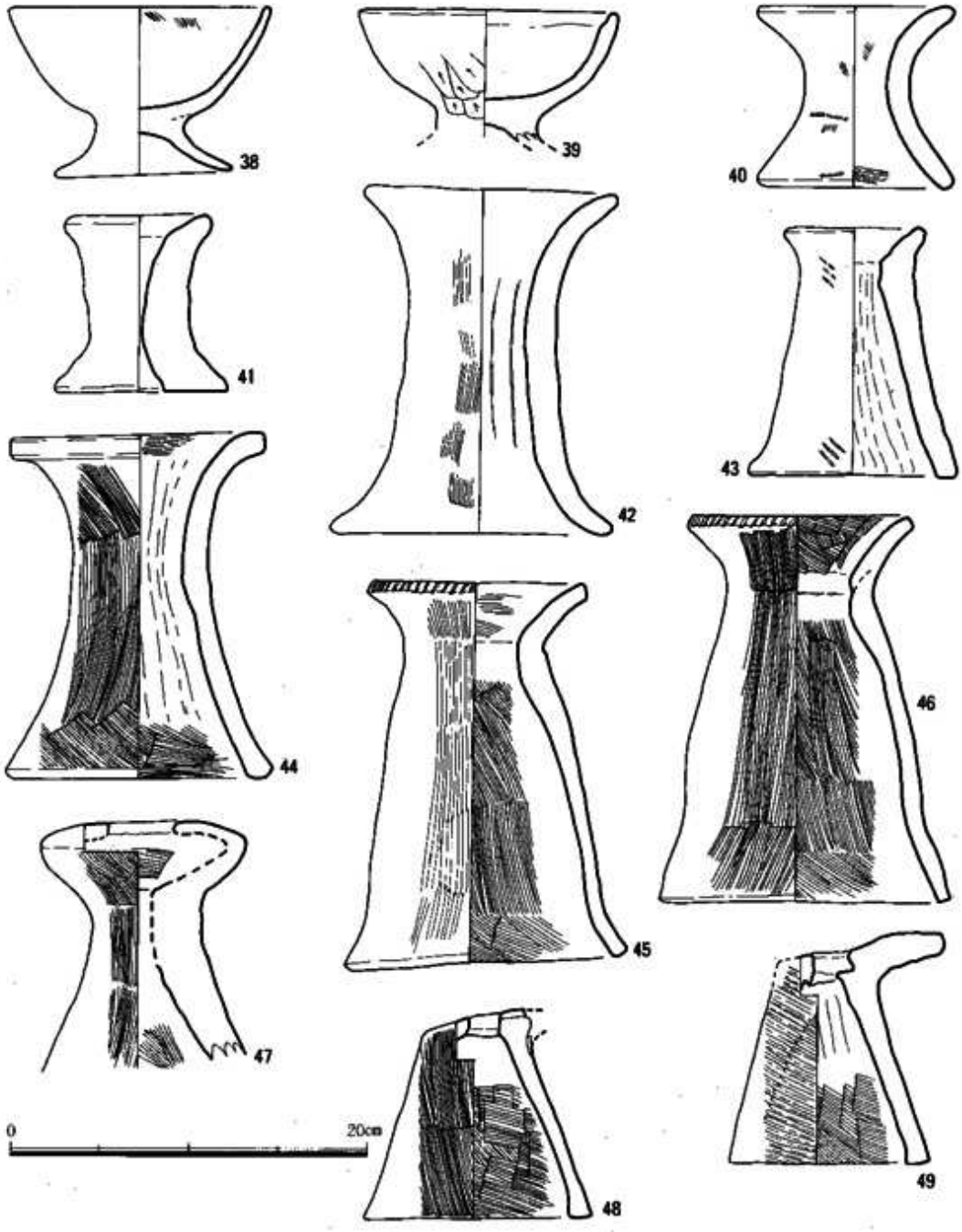


Fig.13 第3層出土土器実測図Ⅵ（1/ 4）

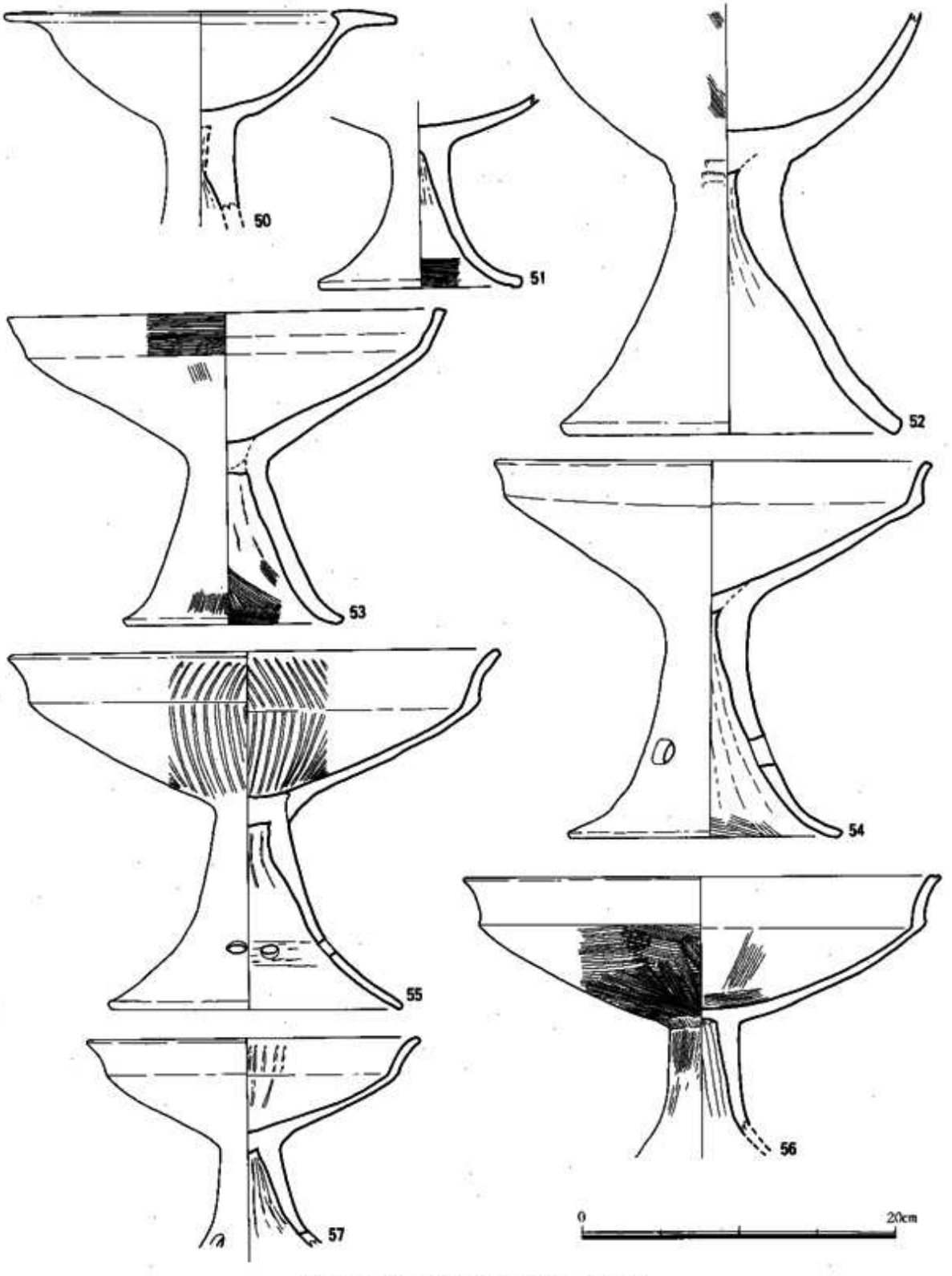


Fig.14　第3層出土土器実測図Ⅶ（1/ 4）

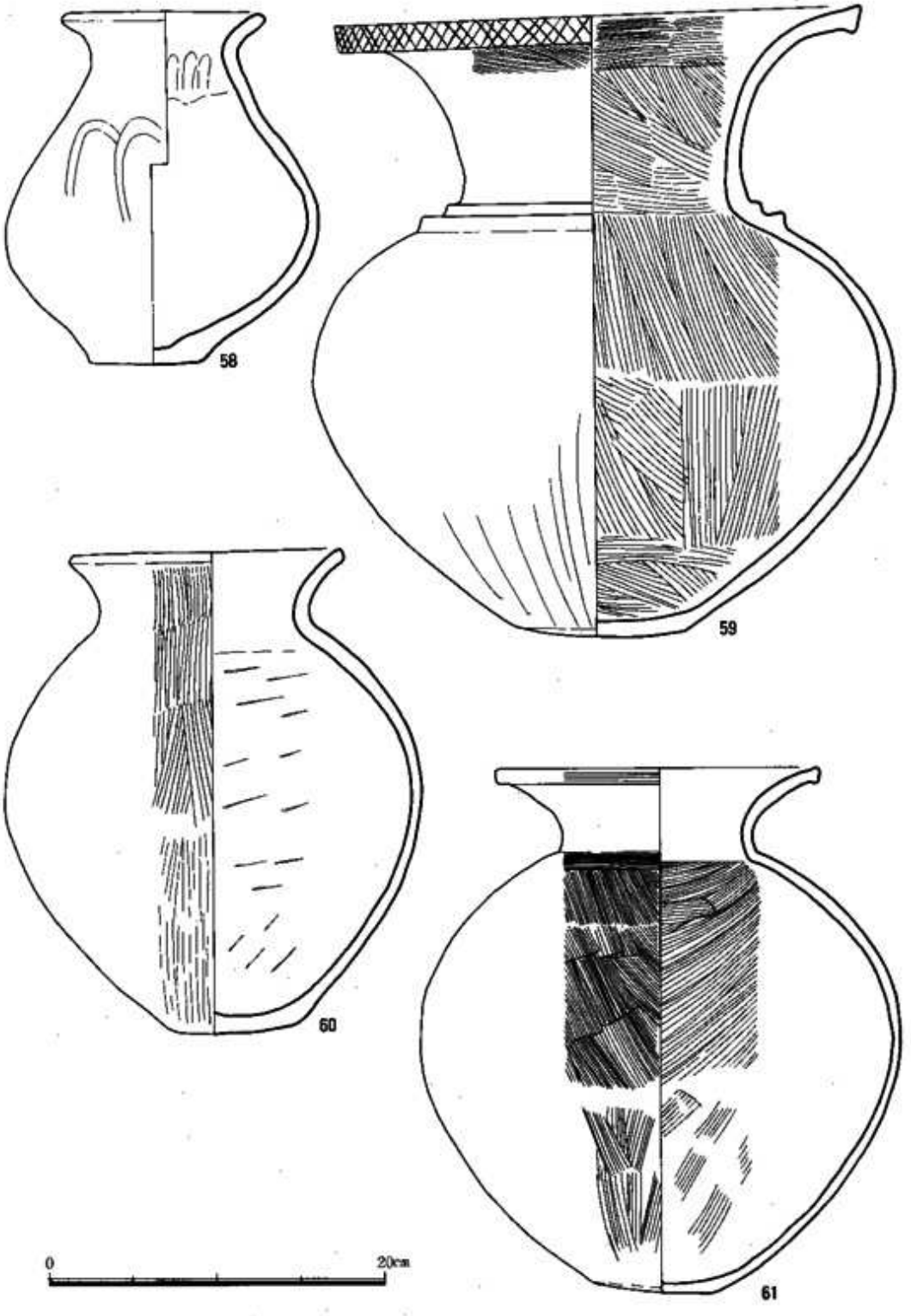


Fig.15 第3層出土土器実測図Ⅷ（1/ 4）

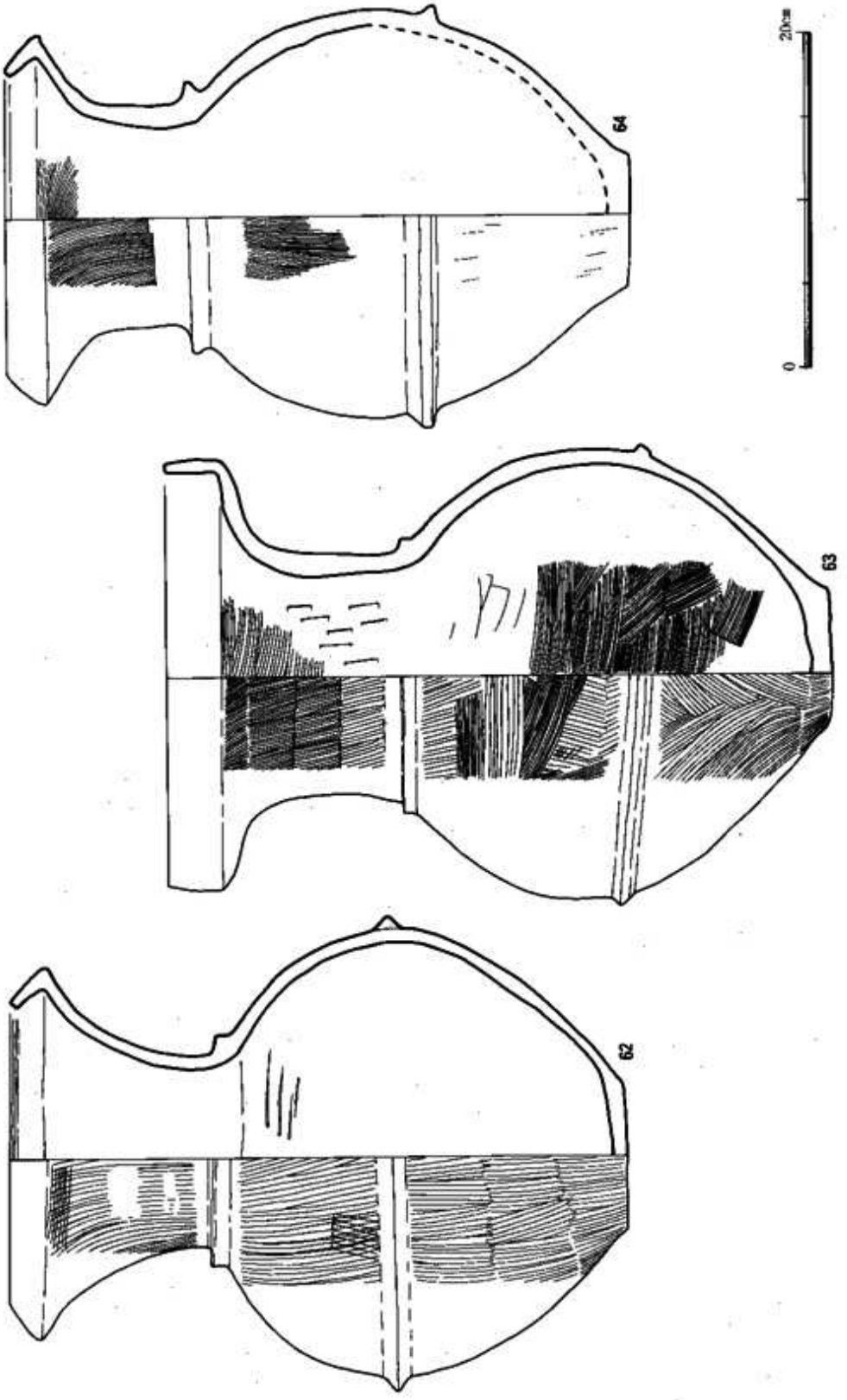


Fig.16 第3層出土土器実測図Ⅸ（1/ 4）

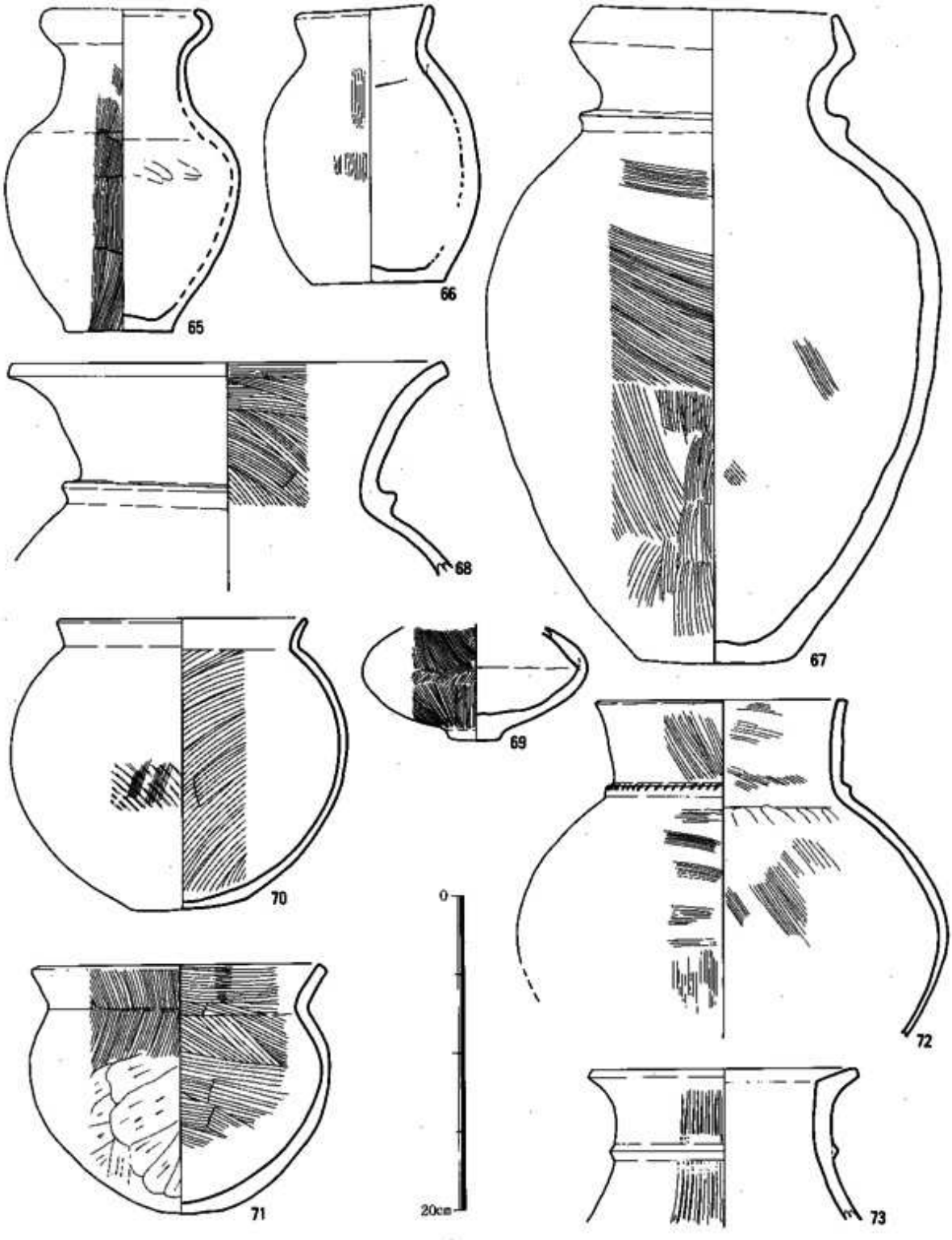


Fig.17 第3層出土土器実測図X（1/ 4）

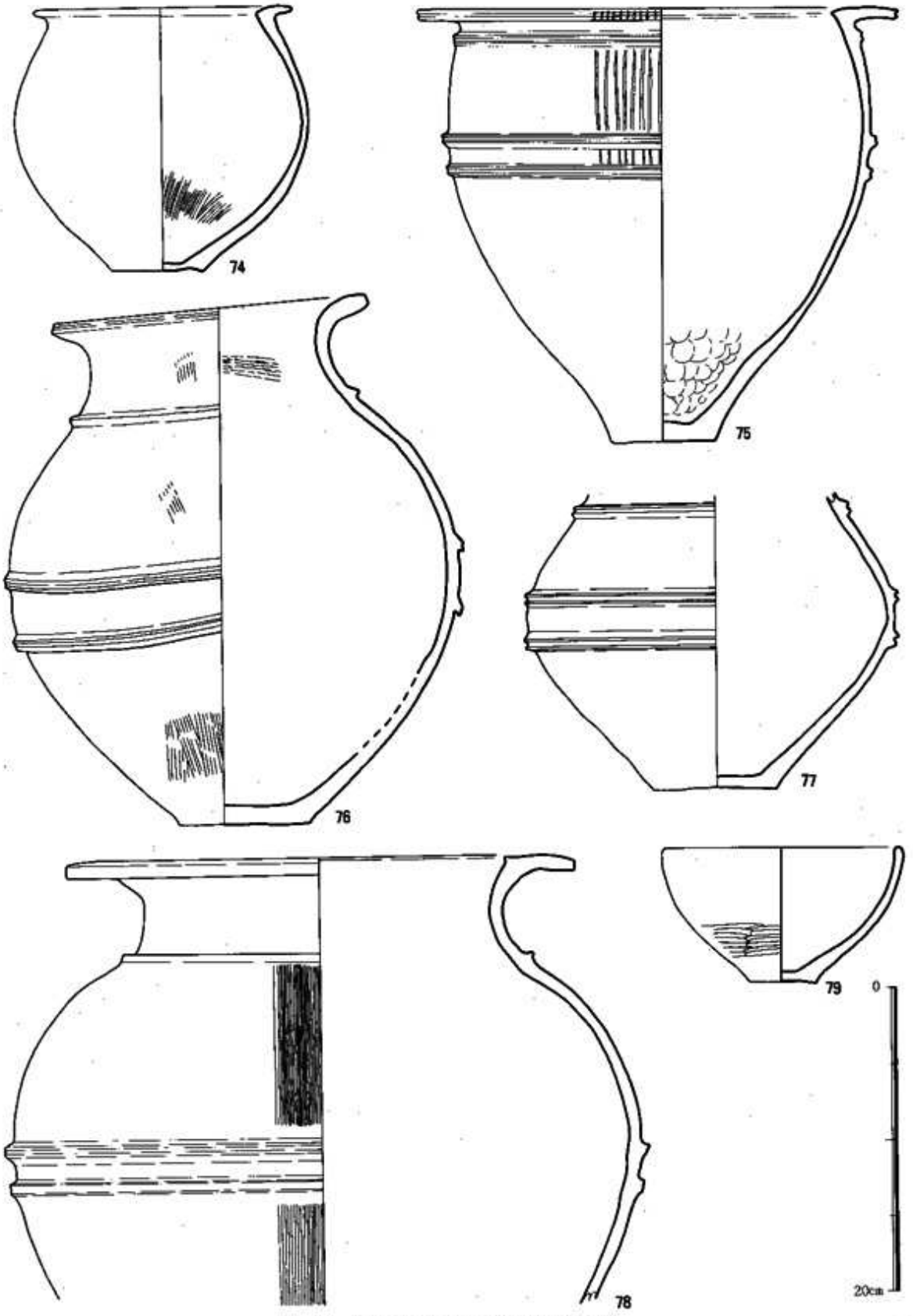


Fig.18 第3層出土土器実測図XI（1/ 4）

はやや凸レンズ状である。29、30は中型で体部が直線的にのびる。底部は平底で穿孔が施される。32は大型で体部は丸味をおびる。底部はやや凸レンズ状である。27、28、31、33～37は口縁が屈曲しない鉢である。27、28は体部がやや内湾し、31は直線的である。いずれも平底である。33、34は体部に丸味をもつ。33にはミガキが施される。34は一見丸底のようであるが底部に小さな平坦面をもつ。35～37は体部が大きく開くもので、底部は凸レンズ状である。35は体部下半はケズリである。37は手捏ねのミニチュア土器であろうか。38、39は台付きの鉢である。内湾する体部に脚台が付く。やや粗雑な感じの作りである。

器　台(Ｆｉｇ．13－40～47)　40、42は円筒形で受部と裾部はなめらかなカーブを描いて広がる。44は受部のカーブがややきつく端部に面を作り出す。45、46は受部が屈曲して開き、裾部にかけて直線的に広がる。受部端に刻目をもつ。調整は内外面ともにハケである。47は受部が内湾するタイプである。43は受部が短く外面にタタキの痕跡を残す。41は厚手でやや雑な作りである。

支　脚(Ｆｉｇ．13－48、49)　ほぼ同形、同大であるが48は外面ハケ、49は外面タタキである。内面はいずれもハケおよびナデである。

高　杯(Ｆｉｇ．14)　50は鋤先状の口縁をもつもので、51にも同様の杯部がつくのであろう。いずれも丹塗りである。52は大型で大きく開く脚部をもち、口縁部は「く」の字状になるものと思われる。53、54は杯部が直線的に開くものであり、54は口縁端部がやや外反気味である。53は脚が短く、端部があまり外反しない。54は脚が長く、端部の外反が強い。３ヵ所に穿孔を施す。55、56は杯部が緩やかにカーブし、口縁部は外湾する。55は杯部内外面に暗文風のミガキを施し、脚部の４ヵ所に穿孔がある。57は55の小型品である。

壺(Ｆｉｇ．15～17)　58は前期的な器形をもつ小型の壺で肩部に二重線の弧文を描く。60は外反する口縁に長めの球形胴をもつ。底部は平底である。外面ハケ、内面ケズリである。59、61は大きく開く口頸部に偏球形の胴部がつく。底部は若干突レンズ気味の平底である。59は口頸部の外反が大きく、口縁端部に斜格子のヘラ描文をもつ。頸部の付根には断面三角形の二重突帯をもつ。62～64、67は複合口縁壺である。62は頸部が締まり、胴部は球形に近い。頸部の付根と胴中位に突帯をもつ。64は頸部が屈曲気味に開き、締まりはない。胴部はやや長胴で頸部の付根と胴下位に突帯をもつ。63は口縁部が直立し、頸部は屈曲気味に開き、締まりはない。頸部の付根と胴下位に突帯をもつ。いずれも平底である。67は頸部が極端に短く、長胴である。頸部の付根に突帯をもつ。65は小型の袋状口縁壺で頸部に締まりがなく、長胴である。やや雑な作りである。66は小型の壺で、厚手で雑な作りである。68は広口壺で口縁部の付根に突帯をもつ。69は扁平な胴部に小さな円盤状の底部をもつ。長頸壺であろう。70、71は短頸壺である。70は球形の胴部に平底がつき、外面にはタタキが残る。71は丸底で胴部外面中位以下はケズリである。72は直口壺で口縁部の付根に刻目をもつ突帯がつく。73は口縁部が外反し内側には面

をもつ。頸部中位に突帯をもつ。

祭祀土器(Ｆｉｇ．18)　いずれも丹塗りで、75～78は口縁直下あるいは頸部の付根に１条、胴中位に２条の断面三角形またはM字形の突帯をもつ。74は無頸壷である。75は鋤先状口縁の甕で口縁端部に刻目をもち、突帯間には暗文が施される。76は外反する口縁に長めの球形胴がつく壷である。胴中位の突帯はダレている。外面はハケのちナデである。77は袋状口縁壷であろう。78は鋤先状口縁の壷で胴部外面はハケである。79は鉢で外面はミガキである。

ⅲ）第２層土器出土状況(Ｆｉｇ．19～21)

Ｆ、Ｇ－２グリッドより完形に近い土器を含む土器群③、④が検出された。その他各グリッドからも多量の土器が出土したがいずれも破片である。土器群③からはアワビ形土製品が出土している。

ⅳ）第２層出土土器(Ｆｉｇ．22～29)

甕（Ｆｉｇ．22～24）　１～10は「く」の字口縁の甕である。９をのぞきいずれも胴径が口径を上回る。６は直口に近い口縁をもつ。底部は２は平底であるが７、８は丸底である。調整はハケを基本としているが、５、６、７、９にはタタキがみられ、５、７は胴外面中位以下にケズリが施される。10は口縁部の付け根に刻目をもつ突帯が巡り、胴部内面はケズリである。11～13は布留式の甕である。外面ハケで内面はケズリである。12は肩部に３～４条のヘラ描き波状文が施され、13は肩部に波状のヨコハケが施される。14～19は小型の甕である。14～17、19は口縁が屈曲する。14、16、19は平底で14は口縁が外湾するが器形は中型の甕と同じである。16は胴部がやや丸味をおびる。19は器高が低くズン胴で鉢に近い。調整は外面がハケないしナデ、内面はナデである。15は底部が凸レンズ状で、胴部はやや丸味をおびる。調整は内外面ハケである。17は尖底状の丸底で、底部外面は板で押し引いたような調整である。18は口縁が屈曲せず、底部は丸底である。20、21は台付の小型の甕である。21は口縁が屈曲せず、胴部下半は内外面ともにケズリである。

鉢（Ｆｉｇ．25）　22、23、25～27は口縁が屈曲する。22、23、25は平底で22には底部に穿孔が施される。23は胴外面が板によるナデである。26、27は丸底で薄手の作りである。26は口縁がやや長く外湾し、胴がやや張る。27は口縁が立ち気味で、内外面ケズリである。24、28、30、31は口縁が屈曲しない。24は平底で底部に穿孔を施す。28、30、31は丸底で28は外面にタタキが残る。30、31は小型の鉢である。29は口縁が全体の２／３を占める。底部外面はケズリで、内面には放射状の暗文を施す。32は手捏ね風の作りで、外面はケズリである。33、34は台付の鉢で、33は27に脚台を付けたようなプロポーションである。調整はいずれも内外面ともにハケである。

高　杯（Ｆｉｇ．26、27－41～50）　35、36は屈曲する口縁が長くのびる高杯である。杯部外面はケズリ、内面には放射状の暗文風のミガキを施し、35は脚裾部外面にも施す。脚部の孔は

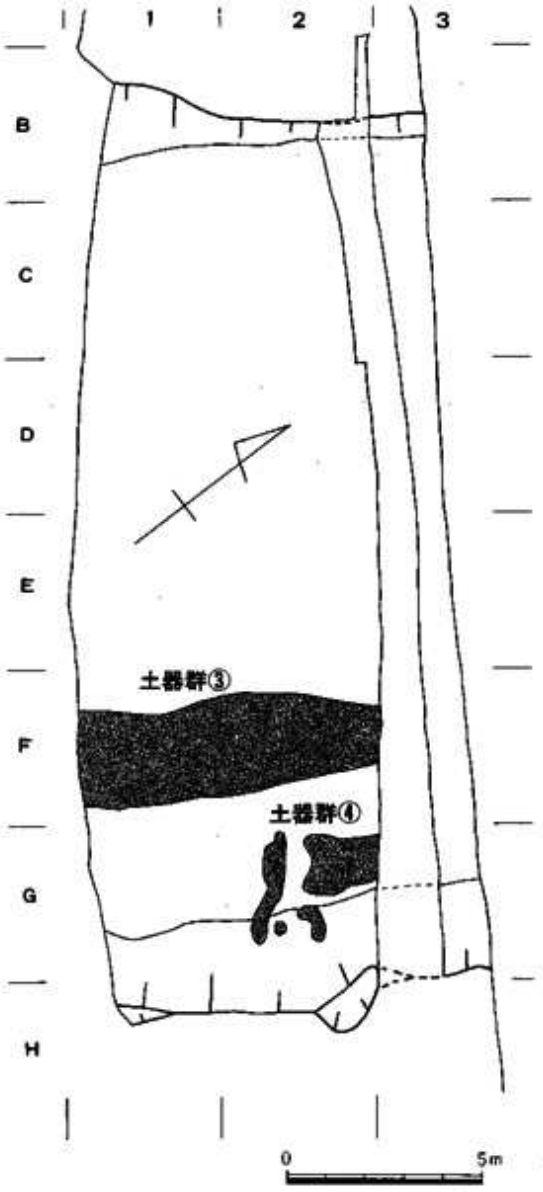


Fig.19 第2層土器出土状況（1/ 200）

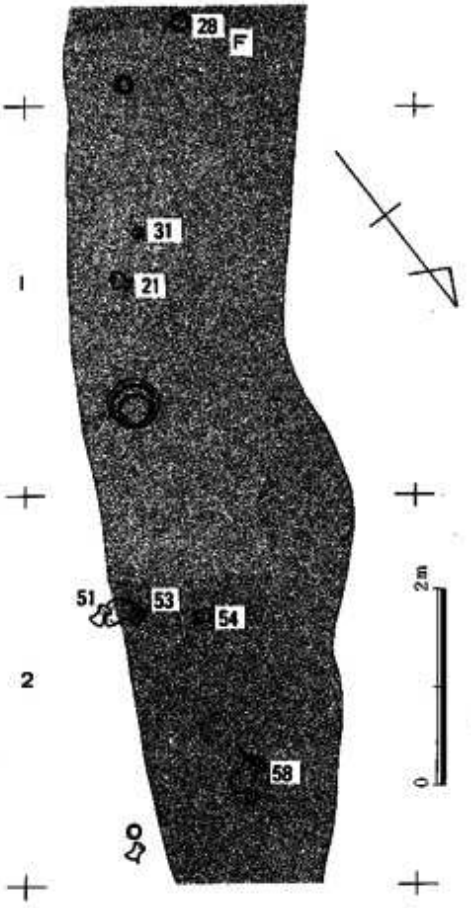


Fig.20 土器群③ 実測図（1/ 80）

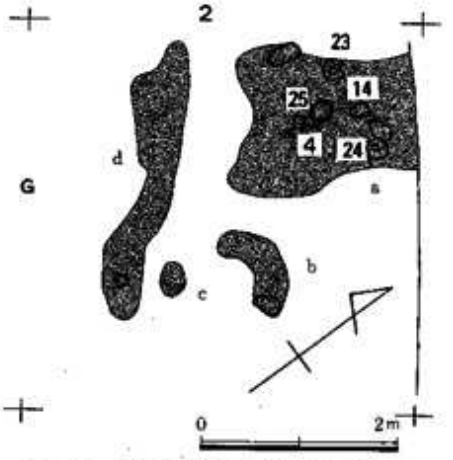


Fig.21 土器群④ 実測図（1/ 80）

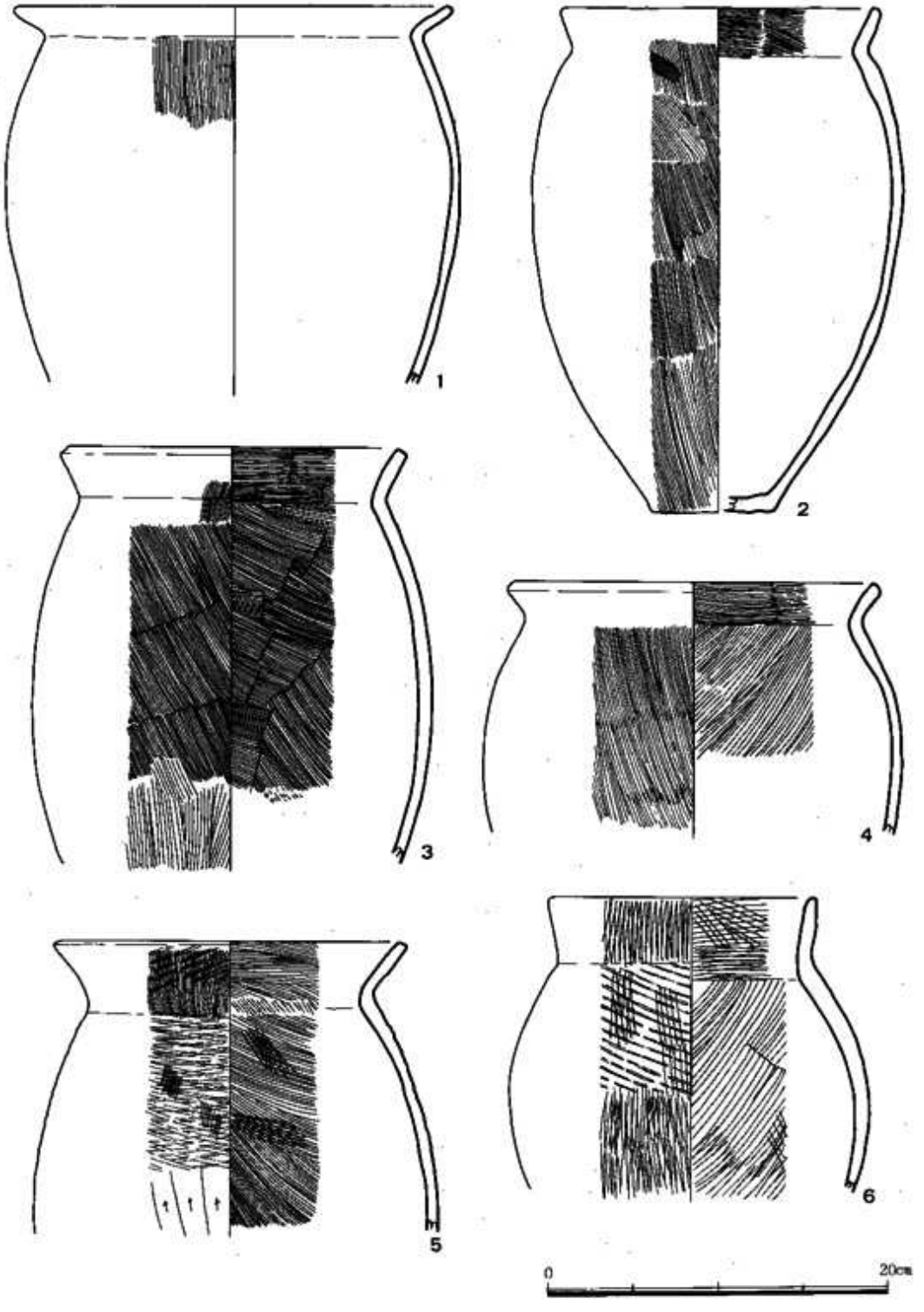


Fig.22　第2層出土土器実測図Ⅰ（1/ 4）

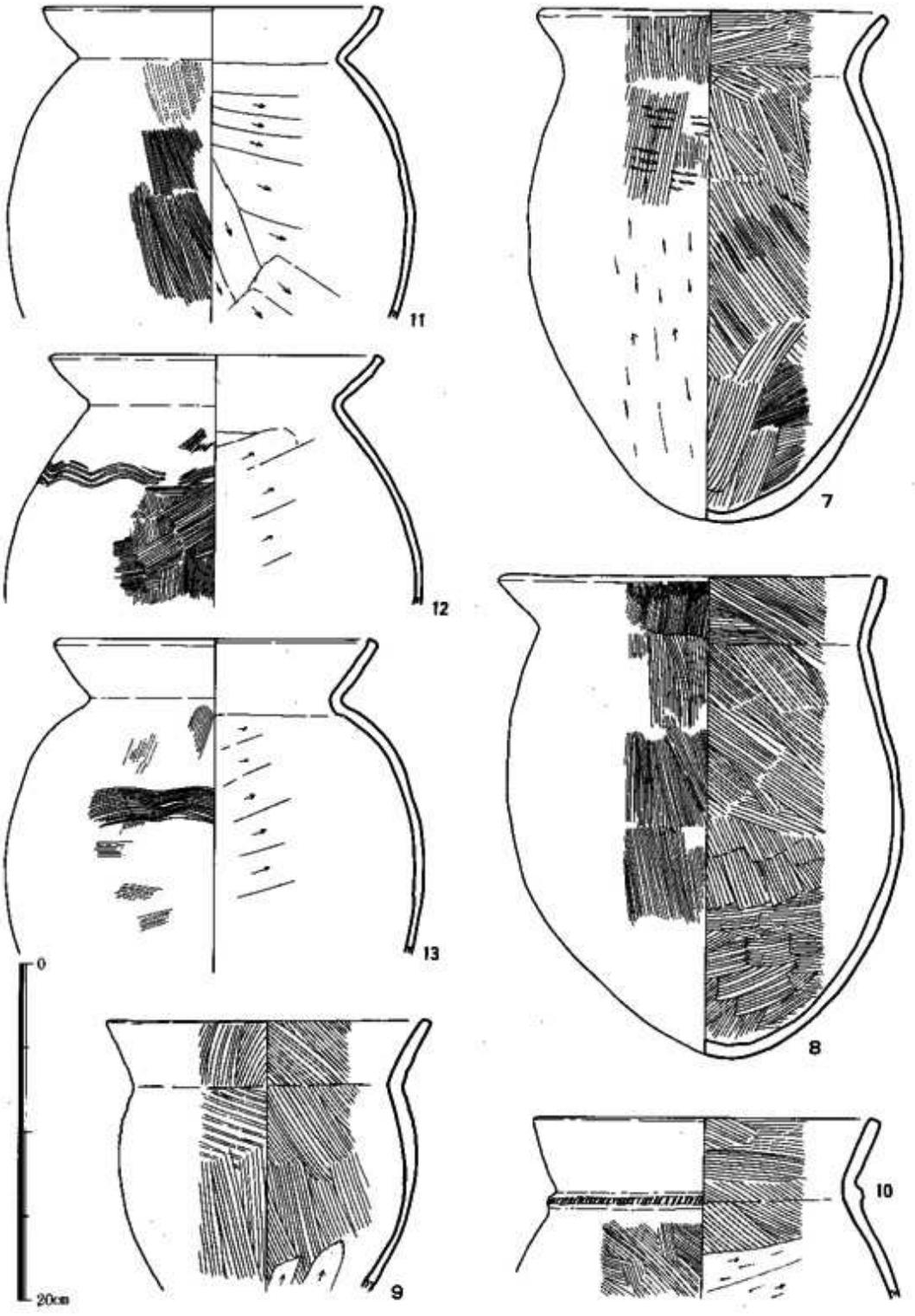


Fig.23 第2層出土土器実測図Ⅱ（1/ 4）

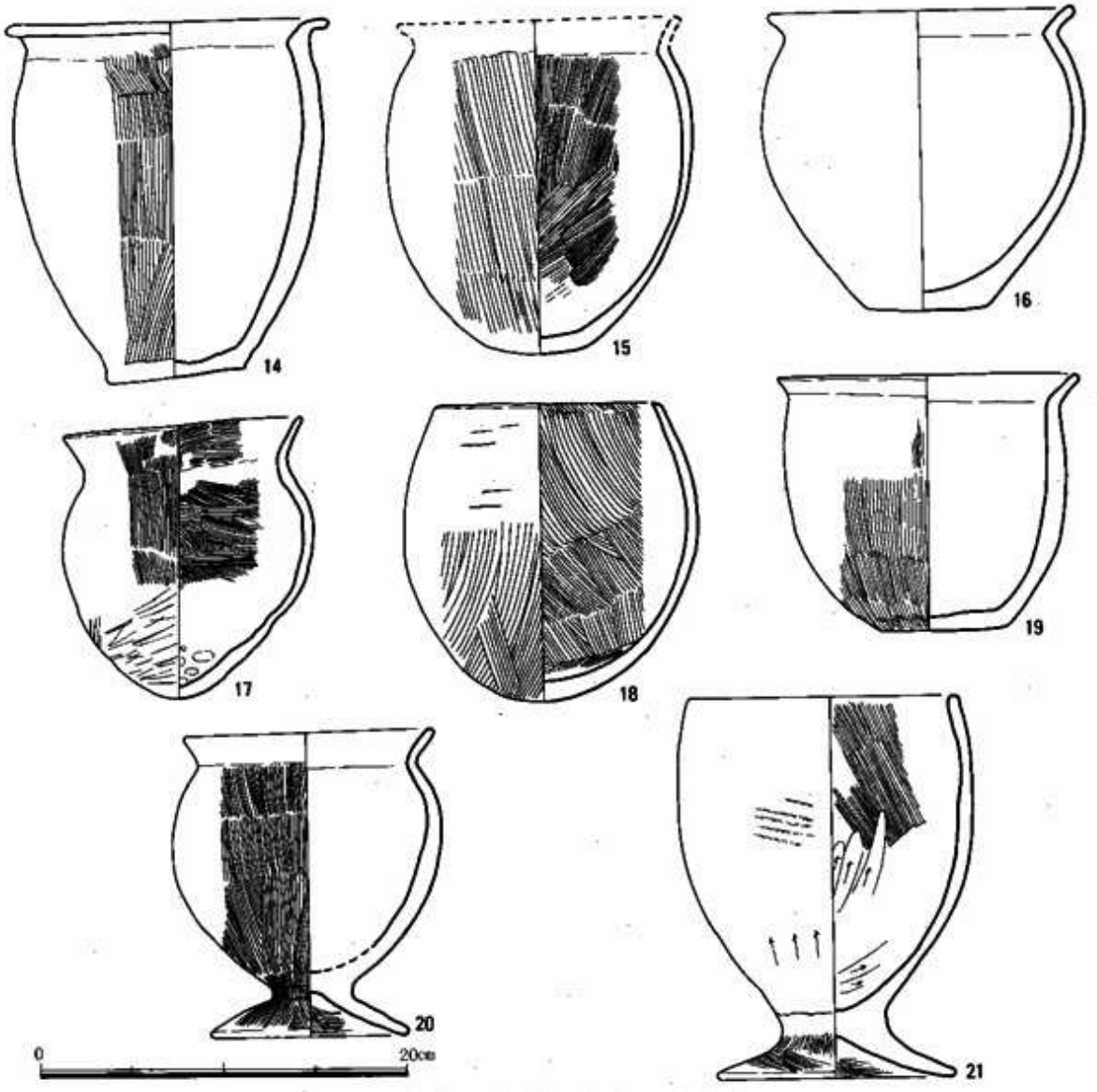


Fig.24　第２層出土土器実測図Ⅲ（1/ 4）

いずれも２ヵ所である。37、39は屈曲する口縁が立ち気味で、39は口縁端部を拡張し面を作る。37は外面ハケ、39は内外面ともにミガキである。38、40は37、39の脚部と考えられる。38は４孔をもち、外面ハケである。40は３孔をもち、外面下半はミガキである。41、42は屈曲する口縁が長くのび、杯部が丸味をおびやや深い。45は椀状の杯部で、内面に放射状の暗文を施す。長めの脚が付くと思われる。46は椀状の杯部に大きく開く低い脚がつく。

器　台（Ｆｉｇ．27－51～53）　52は円筒形で受部、裾部ともに開くタイプである。調整は内外面ともにナデである。51は受部が屈曲して開き、裾部にかけて直線的に開く。調整は上半部

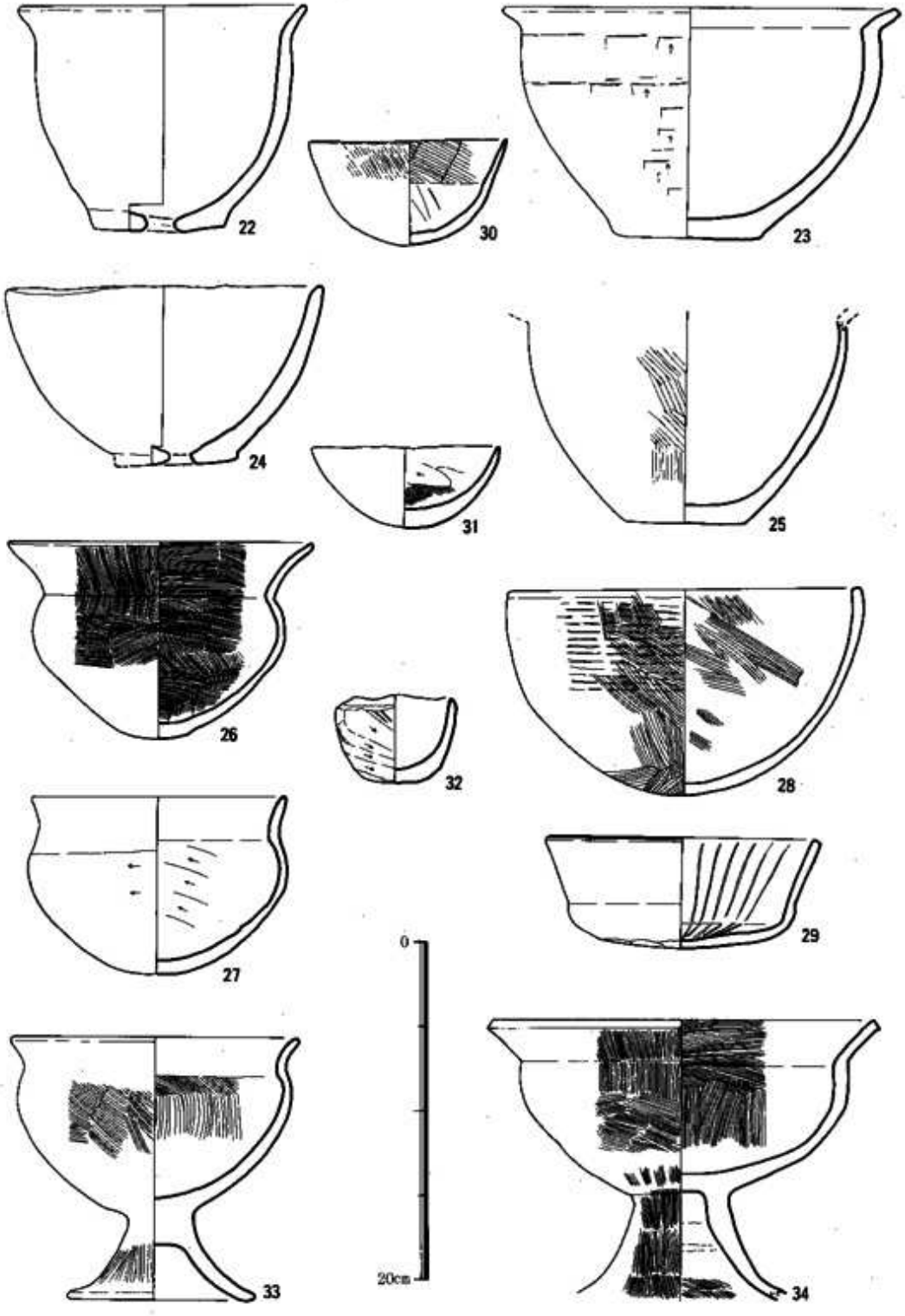


Fig.25　第２層出土土器実測図Ⅳ（1/ 4）

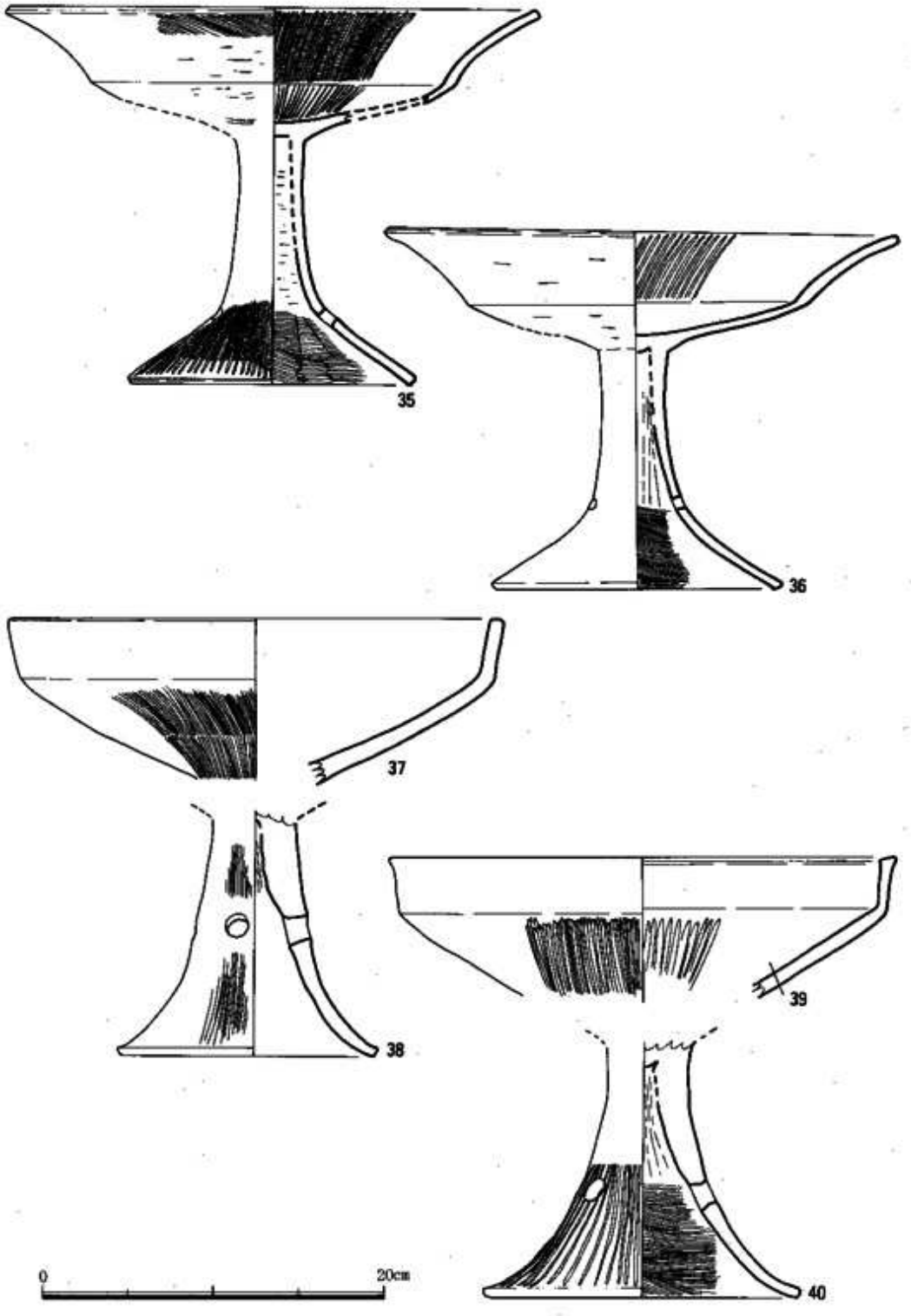


Fig.26 第2層出土土器実測図V（1/ 4）

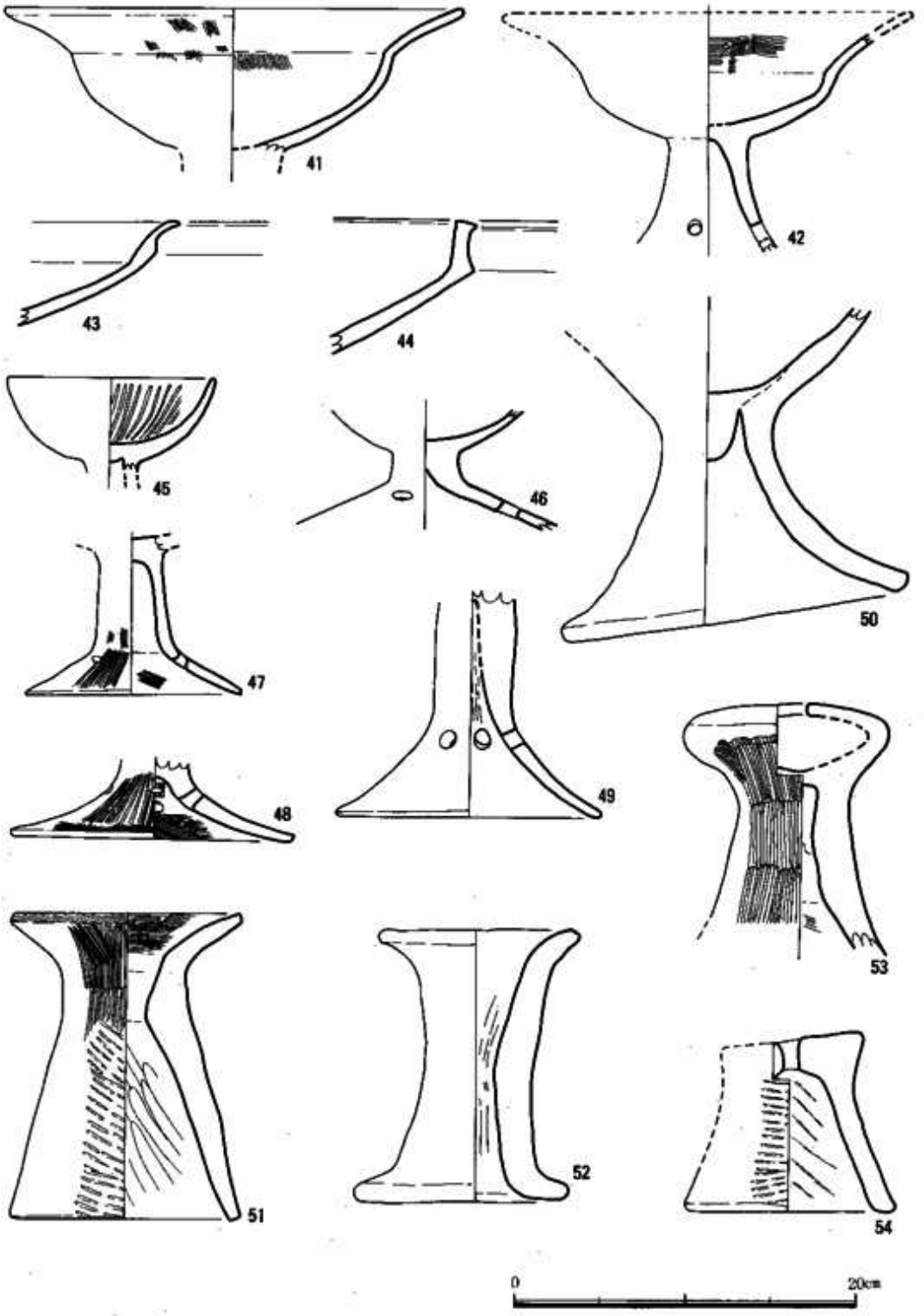


Fig.27　第2層出土土器実測図Ⅵ（1/ 4）

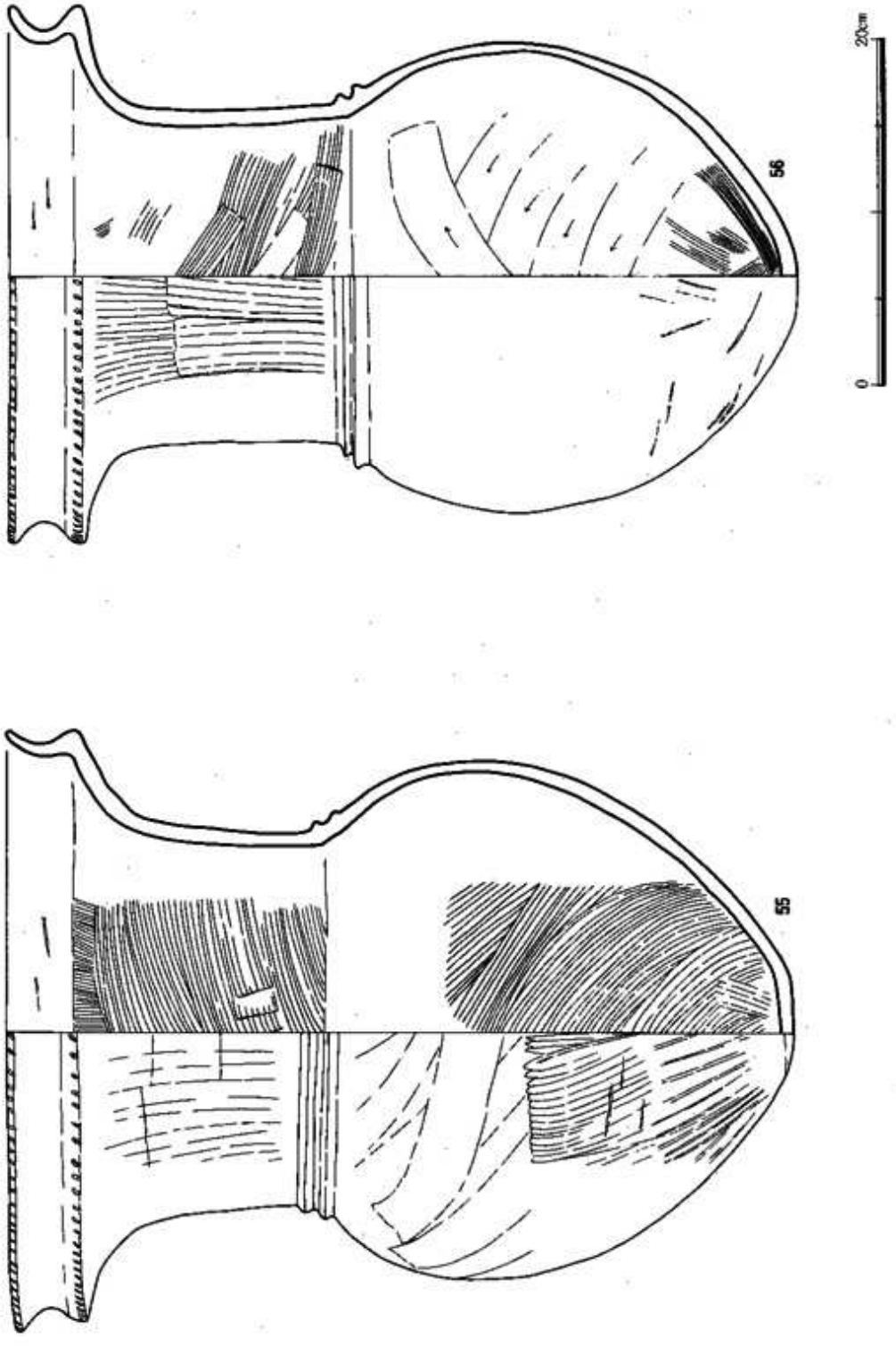


Fig.28　第２層出土土器実測図Ⅶ（1/ 4）

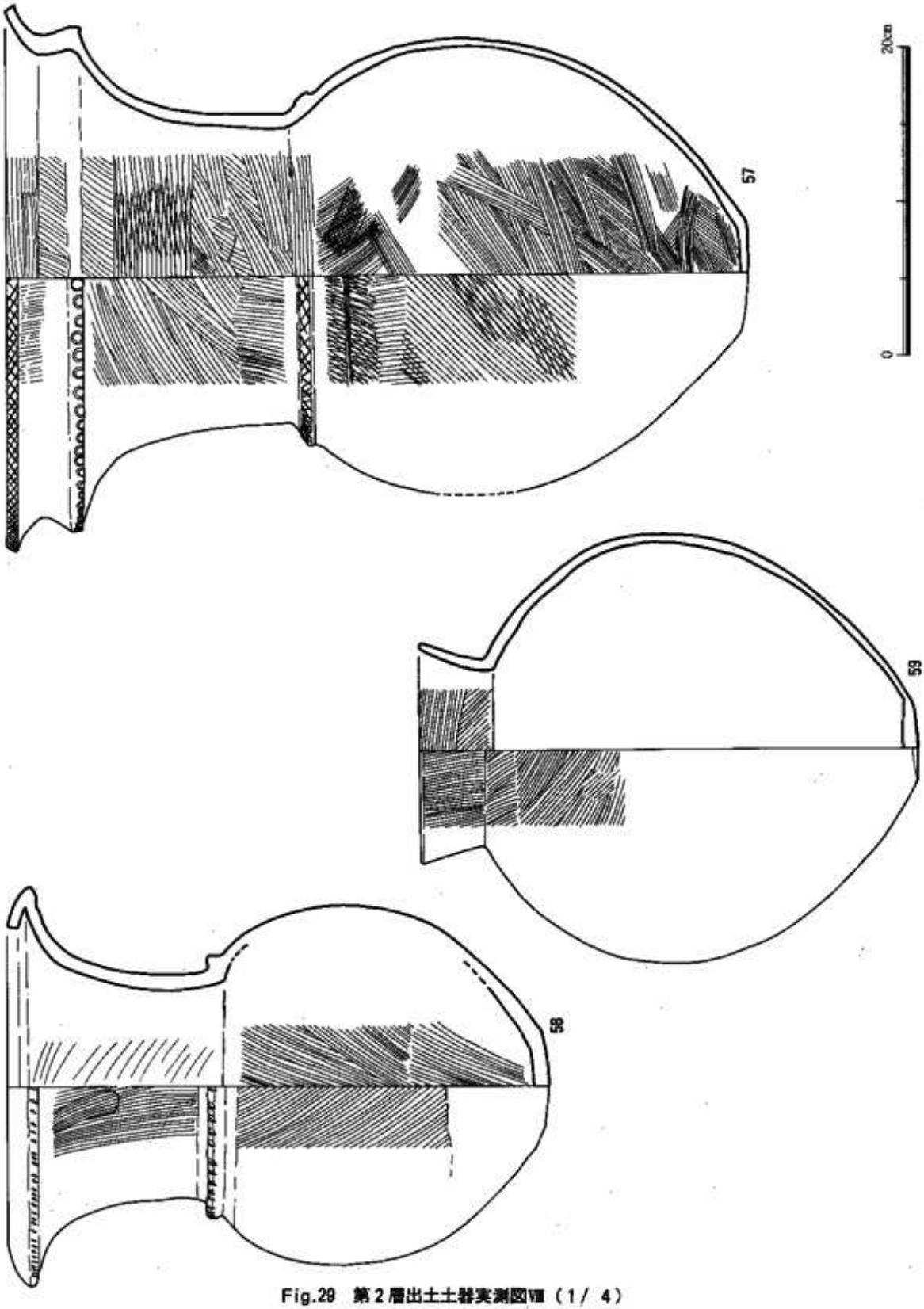


Fig.29 第2層出土土器実測図Ⅷ（1/ 4）

がハケ、下半部は外面タタキ、内面ナデである。53は受部が内湾するタイプである。

支　脚（Ｆｉｇ．27－54）　上面中央に孔があり、調整は外面タタキ、内面ナデである。

壺（Ｆｉｇ．28～29）　55～58は複合口縁壺である。55～57は口縁部が強く外湾するタイプで、55と56は同形、同大である。口縁端部と屈曲部に刻目を施し、頸部は屈曲しすぼまらずに胴部に続く。頸部付け根に断面三角形の突帯を２条巡らす。底部は55が凸レンズ状で、56は丸底である。いずれも頸部中位から胴部中位にかけて丹塗りである。57は同タイプであるがやや大型である。頸部は緩やかにカーブを描き、ややすぼまりながら胴部に続く。頸部付け根に断面台形の突帯を巡らす。底部は凸レンズ状である。口縁端部と突帯にはヘラ描きの斜格子文を施し、屈曲部には竹管文を施す。58は口縁部が内湾し、頸部は緩やかにカーブを描き、ややすぼまりながら胴部に続く。頸部付け根に突帯を巡らす。底部は凸レンズ状である。屈曲部と突帯に刻目を施す。59は球形の胴部に、立ち気味の口縁がつく。底部は凸レンズ状である。

ｖ）第１層土器出土状況（Ｆｉｇ．30、31）

Ｄ～Ｅグリッドからは足の踏み場がないほど土器が集中する土器群①が検出された。出土土器は破片が多く、完形に近いものはあまりみられなかった。土器群①の南側からは土器群②が検出されたが、こちらはあまり密集しておらず、完形品もなかった。第１層出土土器は下層の土器に較べ摩滅を受けた小片が多かった。

ⅵ）第１層出土土器（Ｆｉｇ．32～34）

甕（Ｆｉｇ．32－１～３、６～８、33）　１～３、６は「く」の字口縁の甕である。１は口縁の屈曲にシャープさがなく、胴部は下ぶくれで丸底である。調整は外面ハケ、内面ハケまたはケズリである。２は丸底で外面にタタキが残り、下半部はケズリである。３も外面にタタキが残る。６は小型で、口縁の屈曲にシャープさがない。７は口縁が屈曲せず砲弾形を呈する。底部に穿孔が施される。８は台付の甕で口縁が屈曲しない。７と８はセットで出土している。12～15は布留式の甕である。13、14は肩が張り尖底に近い。14は口縁がわずかに外反し、端部を内側に小さくつまみだす。

鉢（Ｆｉｇ．32－９～11、34－19）　９、11は体部がやや開き、平底に近い丸底である。11は小型である。10は丸底で内外面ともにナデである。19は畿内系の鉢で口縁部が屈曲して大きく開き、底部は丸底である。

高　杯（Ｆｉｇ．34－24～26）　25は屈曲した口縁が直線的に開き、短めの脚が付く。脚に３孔をもつ。24は口縁部が外湾する。26は短い口縁部が強く外湾する。いずれも杯部に放射状の暗文を施し、25は脚裾部外面にもみられる。

器　台（Ｆｉｇ．34－23）　鼓形器台で全体にシャープさに欠ける。

壺（Ｆｉｇ．32－４、５、34－16～18、20～22）　４は小型で立ち気味の口縁に、球形の胴部が付き丸底である。５も同様の形態でやや小型である。口縁が直立する。16～18は山陰系の複合

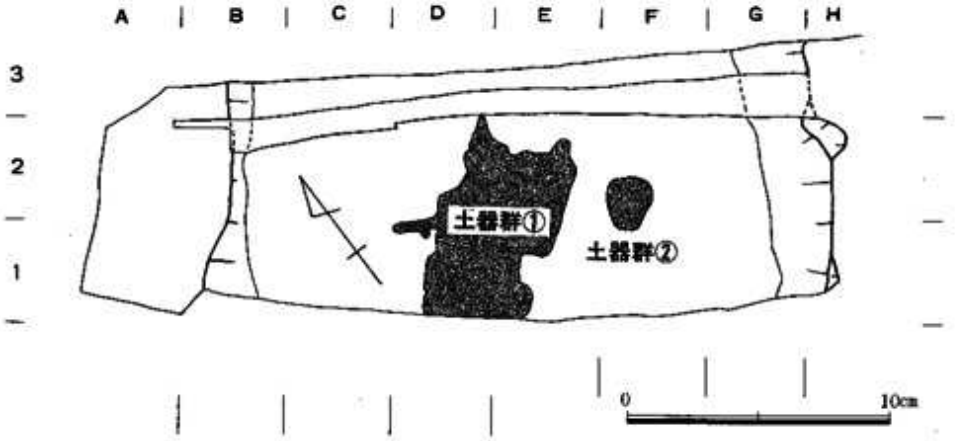


Fig.30　第１層土器出土状況（1/ 300）

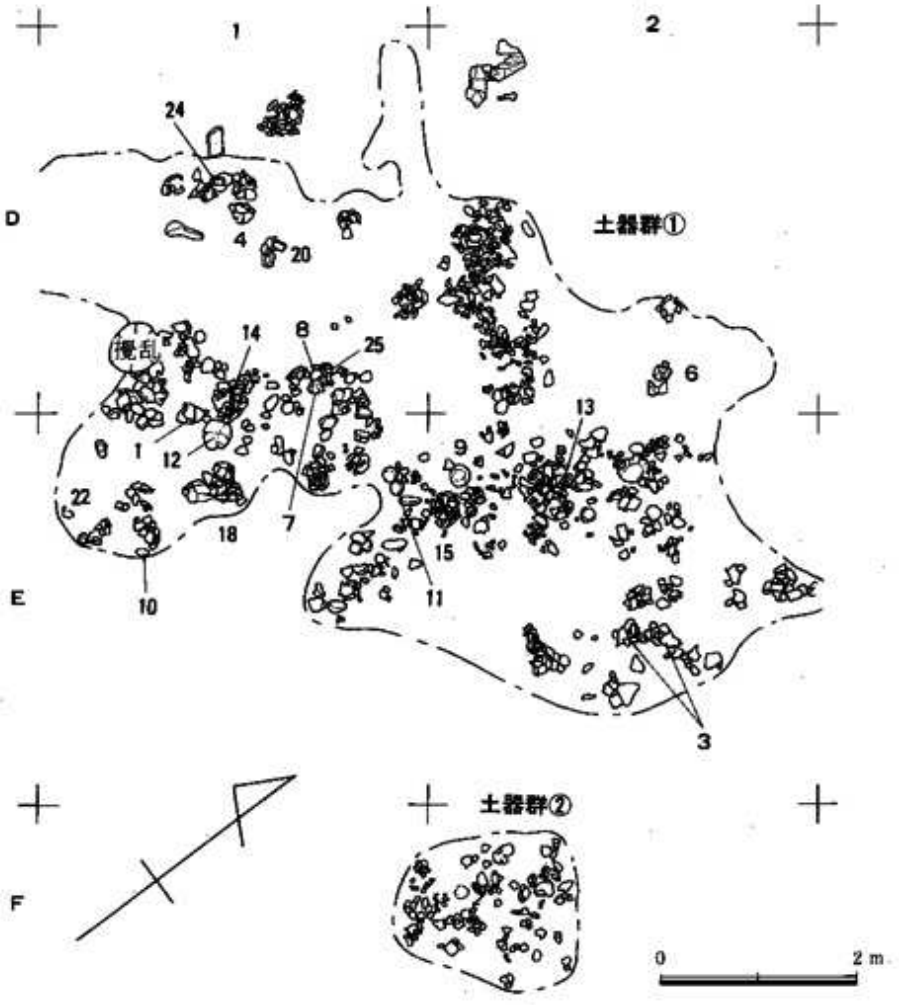


Fig.31　土器群①、② 実測図（1/ 80）

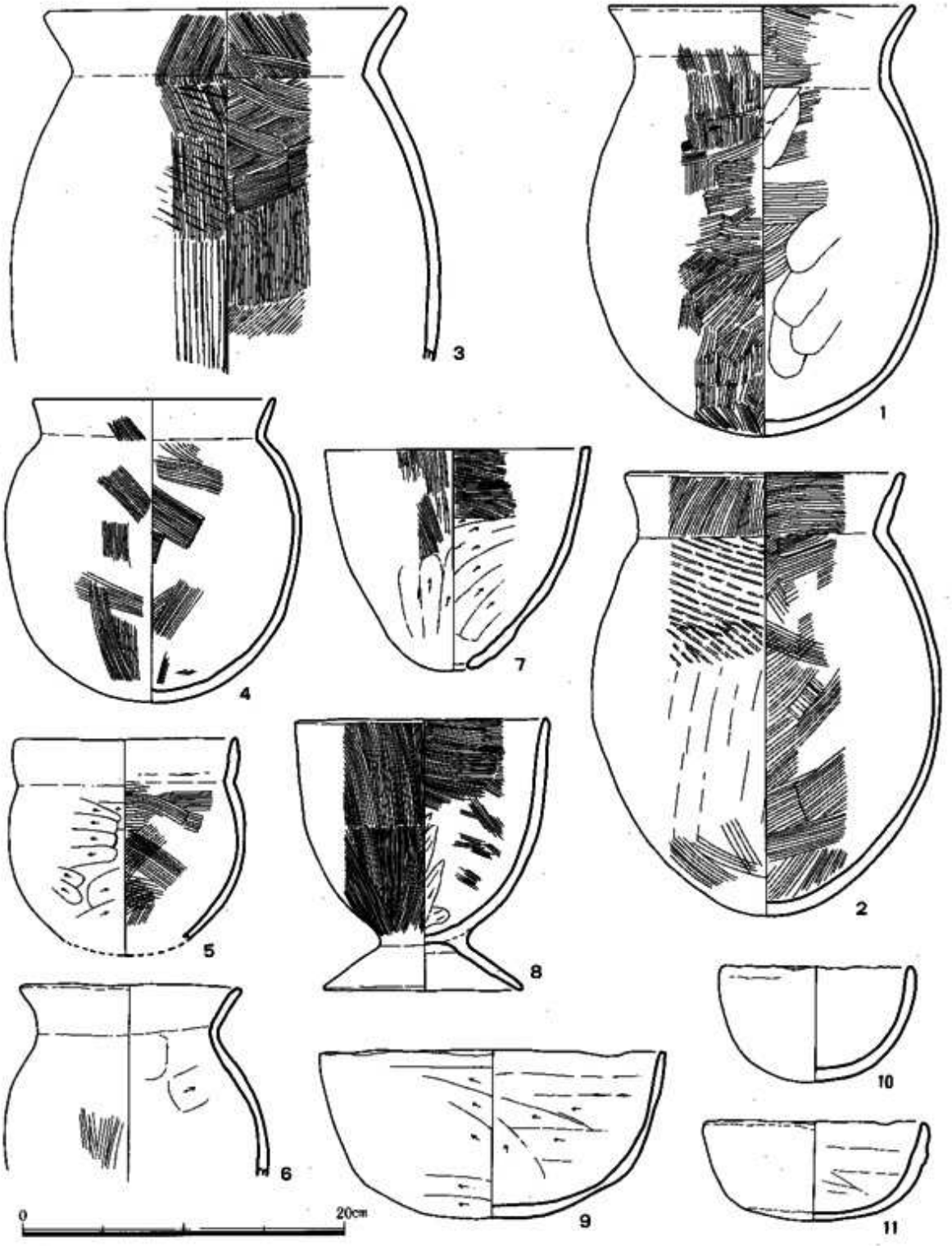


Fig.32 第1層出土土器実測図Ⅰ（1/ 4）

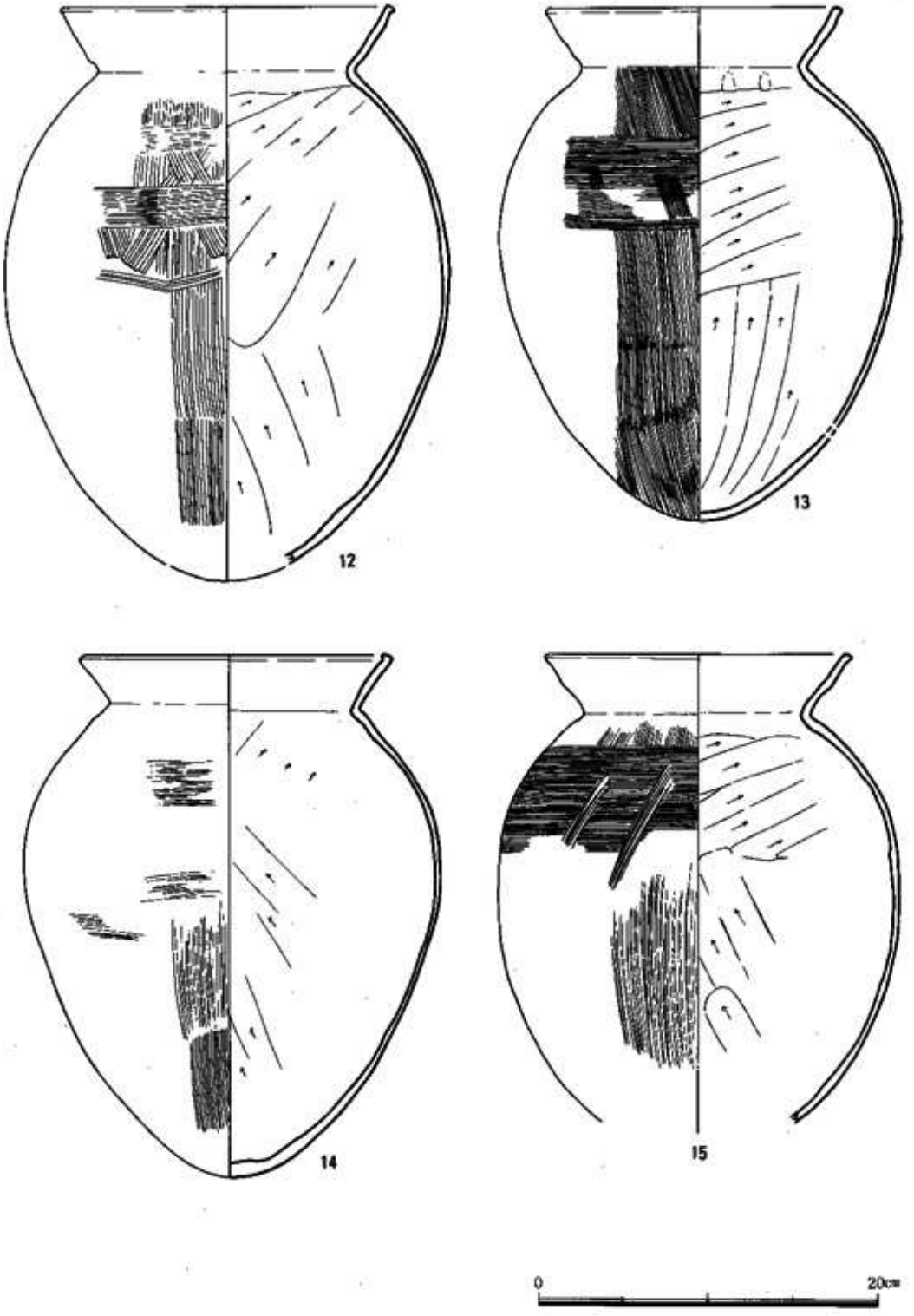


Fig.33 第1層出土土器実測図Ⅱ（1/ 4）

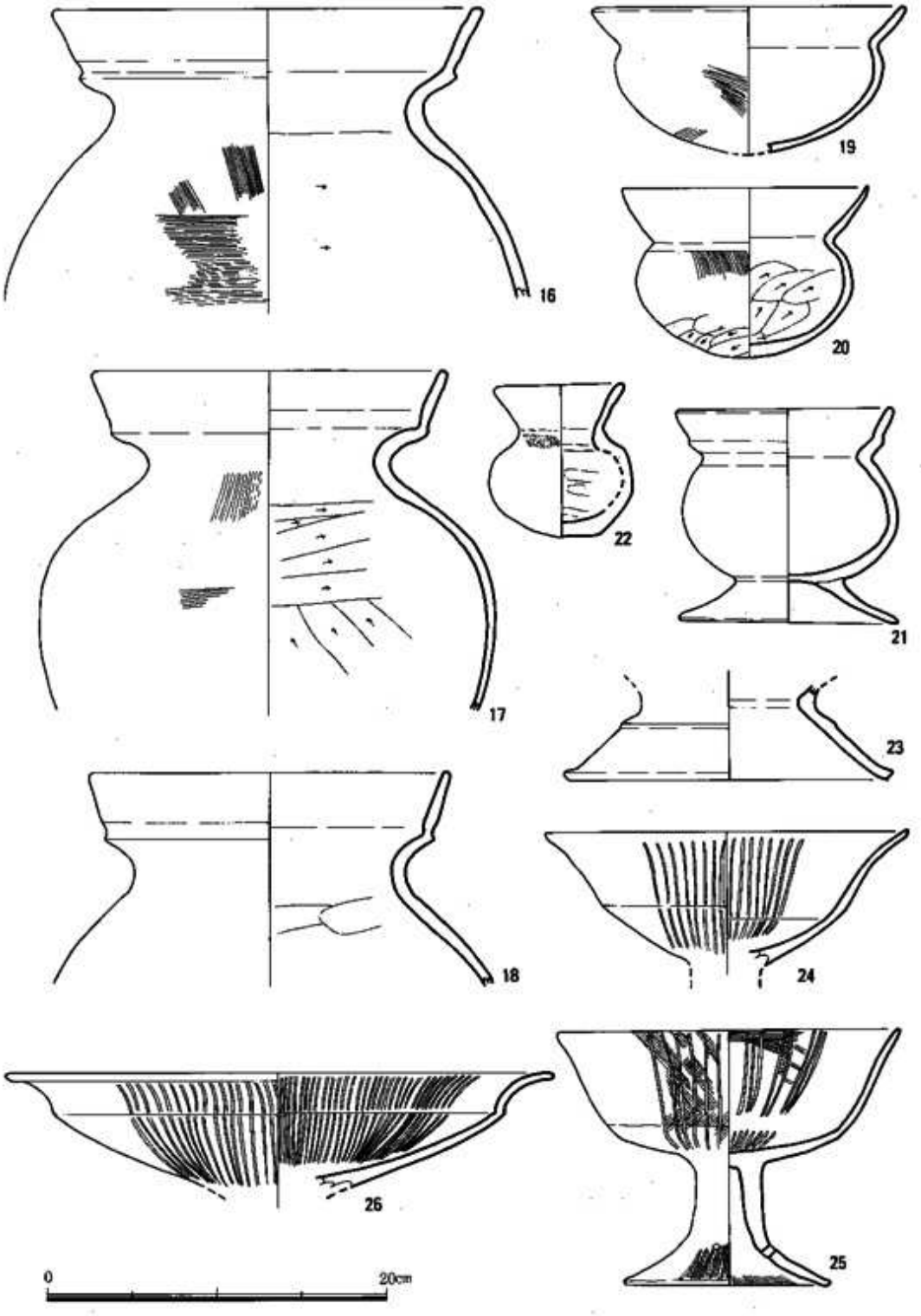


Fig.34　第1層出土土器実測図Ⅲ（1/ 4）

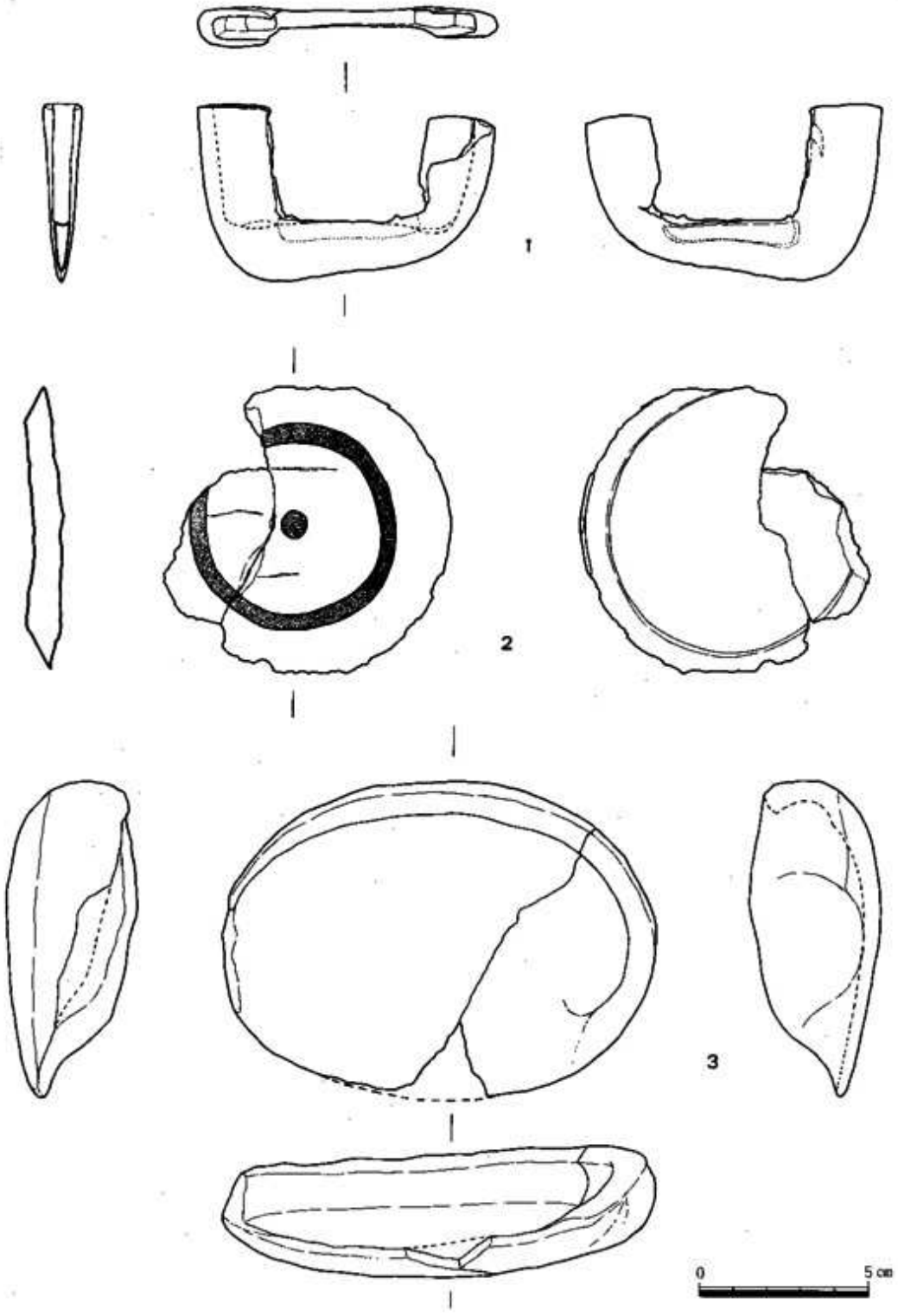


Fig.35　その他の出土遺物実測図（1/ 2）

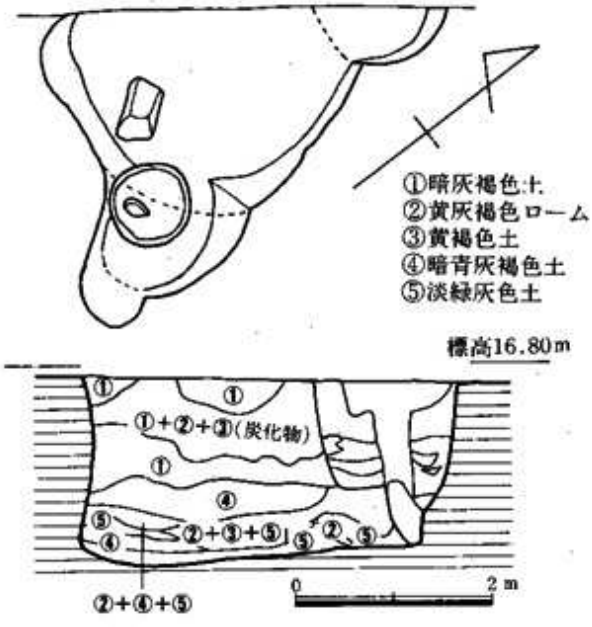


Fig.36 土坑①実測図（1/40）

口縁壷で、17は肩がやや張る。調整はいずれも外面ハケ、内面ケズリである。20は畿内系の小型丸底壷である。19と同様の器形であるが体部が丸味をおび、やや深めである。21は台付の山陰系小型壷である。複合口縁であるが屈曲部はシャープさに欠ける。体部と脚台部の接合状態がよくわかる。22は小型丸底壷であるが全体に厚手で、作りも雑である。

vii）その他の遺物（Fig. 35）

青銅製鋤先(1) 袋部の一部を欠損するがほぼ完形である。幅8.8cm、現存長5.3cm、袋部端の厚さ1.3cmである。全体に錆で覆われているが、検出時に付いた傷の部分を見ると赤銅色をしており残りはよい。径1mm程の孔が若干見られ、一部酸が入るが比較的鋳上がりはよい。刃部は片減りしており、減った方の袋部の肉厚はかなり薄くなっており、極限まで使い込んでいる。部分的に鋳掛けがみられる(註)。錆のせいか使用痕は認められない。C－1グリッド3層の出土である。

漆　器(2) 円盤状の漆器で一部を欠損する。厚さ1.1～0.8cmで、直径は9.4cmに復元される。断面は台形状を呈し、やや反りをもつ。片面は黒漆の地塗りに赤漆で円文を描き、その中心に小円文を描く。裏面は漆を塗らず木地のままである。周縁には幅8mmの刳り込みがあり、円筒状のものをはめ込んだと考えられる。E－1グリッド第3層の出土である。

アワビ貝形土製品(3) 長径12.9cm、短径9.5cmの楕円形で、高さ3.7cmである。一部を欠損するがほぼ完形である。塩吹孔の表現は無いが、全体の形はアワビ貝をよく写している。土器群③(第2層)の出土である。

(2)土　坑（Fig. 36）

調査区の北西端、A－2グリッドで検出した。一部調査区外に延びており幅140cm、長さ120cmを検出したにとどまる。深さ1m弱が遺存しており、一部ピットに切られている。土器片が出土しているが、いずれも細片で図示し得なかった。

(3)ピット

A～Bグリッドで検出した。かなり密集しており柱痕跡を残すものもあったが、調査面積が狭いため建物となる配置をとるものがあるのかは確認できなかった。

(註)柳田康雄氏の御教示による。

3．ま と め

今回の調査では大溝から多量の土器が出土しているが、その時期を見てみると弥生時代中期末から古墳時代前期に及んでいる。大溝の埋土は3層に分けられるが、下層から上層にゆくにしたがって出土する土器が時期をおって新しくなってゆく。ただし溝の堆積土であるという遺構の性格から層ごとに明確に時期が分けられるという状況ではない。また、溝の堆積土層を明確に分離しうるかというと事実上それは不可能であるため、上下の層で若干の混じり込みがあることを考慮に入れておかなければならない。各層の出土土器の時期をみてみるとおおむね第3層は中期末から後期中頃、第2層は後期前葉から古墳時代前期前半、第1層は弥生時代終末から古墳時代前期後半である。器種については甕、壷、高杯、鉢、器台等ほぼ全てが揃っており、土器編年を考える上で良好な資料となるであろう。今回は時間的、予算的な制約があり、完形に近いものを中心に報告している。また土器以外の遺物についてはほとんど報告することができなかった。今後は未報告の資料をくわえて遺物の検討を行ない、報告する機会をつくりたいと考えている。

第3層出土土器観察表

（単位；cm）

番号	出土位置	器形	色調	胎土	調整	焼成	口径	胴径	器高	備考
1	G-1	甕	(外)暗褐色 (内)明褐灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	内外面ともにナデ	良好	25.0	23.6	29.4	外面にススが付着、内面底部に炭化物のコゲ着き
2	〃	〃	暗褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	29.0	27.2	29.8	〃
3	〃	〃	暗褐色～淡黄橙色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケのちナデ、内面ナデ	〃	25.9	26.3	(26.8)	外面にススが付着、器面風化のため調整詳細不明
4	〃	〃	淡赤褐色～黒褐色	〃	外面ハケ、上部1/4のみナデ消し、内面ナデ	〃	28.0	27.1	31.0	外面にススが付着、内面底部に炭化物のコゲ着き
5	〃	〃	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、上部ナデ消し、内面ナデ	〃	27.5	26.3	(19.2)	外面にススが付着
6	〃	〃	淡褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂を含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	28.6	26.5	(13.9)	〃
7	C-2	〃	(外)暗褐色 (内)暗黒褐色	〃	内外面ハケ、内底部指ナデ	〃	23.4	21.6	25.9	〃
8	〃	〃	淡黄灰色	〃	内外面ハケ、内面中位一部ナデ、底部ナデ	〃	21.1	23.7	29.1	〃
9	D-2	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒子含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	20.9	22.4	33.5	〃
10	C-1	〃	暗赤褐色～淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面板ナデ、底部ナデ	〃	19.0	19.6	24.9	
11	D-2	〃	淡黄灰色～暗褐色	〃	外面ハケ、底部付近ケズリのち荒いハケ、内面ナデ	〃	25.1	24.4	35.0	外面にススが付着、内底に炭化物のコゲ着き
12	D-2 土器群⑤	〃	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	21.6	23.9	(27.1)	外面にススが付着
13	D-1	〃	(外)明褐灰色 (内)淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、一部タタキ痕、内面ナデ?	〃	24.6		(12.9)	〃
14	土器群⑤	〃	淡黄灰色～暗褐色	〃	外面ハケ、内面ナデ	〃	27.0		(12.1)	
15	F-2	〃	(外)暗赤褐色 (内)暗褐色	〃	内外面ハケ	〃	26.7	28.6	(17.7)	
16	土器群⑤	〃	淡黄灰色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む	外面上部ハケ、中位以下ケズリ、内面ナデ	ややあまい	22.7	26.5	27.6	外面に一部ススが付着残存
17	B-2	〃	〃	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む 精良	外面板ナデ、上部のちナデ、内面ナデ	良好	19.4	18.0	18.9	外面に一部ススが付着
18	G-1	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、底部付近ナデ、内面板ナデ、底部付近ハケ、底部ナデ	〃	18.0	17.3	18.7	
19	土器群⑤	〃	淡黄灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂多く含む 3mの石英が目立つ	外面中位以下ケズリ、内面ナデ、底部板ナデ	良	16.9	16.3	19.8	外面中位以下風化のため調整不明
20	G-1	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	良好	14.2	16.1	(20.9)	
21	E-2	〃	淡黄灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ともに中位以上ハケ、中位以下荒いミガキ状の調整	〃	15.3	17.1	17.3	
22	D-2	〃	暗黄灰色	〃	内外面ともにナデ	ややあまい	13.7	12.8	13.6	
23	F-2	鉢	淡褐色	〃	内外面ともにハケ、内面一部ナデ	良好	16.1		10.6	黒斑あり
24	F-1	〃	(外)淡黄灰色 (内)淡灰褐色	長石、石英、雲母の微～粗粒砂含む、角閃石?	外面ハケ、内面上部ハケ、体部ナデ、底部ミガキ	〃	16.2		11.7	
25	G-2	〃	淡黄灰色	長石、石英の微～粗粒砂多く含む、角閃石微粒砂若干含む 雲母?	外面ハケ、内面ナデ	〃	14.6		10.8	
26	G-1	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ともに上部ナデ、中位以下ハケ	ややあまい	15.5	14.7	13.6	外面風化のため調整不明瞭
27	F-1	〃	淡褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	良好	13.1		9.6	

28	G-1	鉢	(外)淡赤褐色 (内)暗褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ハケのちナデ、内面ナデ	良好	12.5		10.9	
29	土器群⑤	〃	淡黄灰白色	〃	内外面ともにハケ、内面底部ナデ	〃	28.9		15.5	底部穿孔
30	〃	〃	暗赤褐色	〃	外面上部にハケ、底部付近一部ケズリ？内面ナデ	良	20.9		10.5	全体に風化、底部穿孔は焼成後
31	G-2	〃	〃	長石、石英、雲母の微～粗粒砂多く含む、角閃石の微～中粒砂少量含む	外面ハケ、内面ナデ	良好	10.7		6.8	
32	土器群⑤	〃	淡茶灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケのち 部ナデ消し、底部付近一部ケズリ、内面ナデ、底部ナデ消し	〃	37.0		26.1	
33	F-2	〃	淡黄灰白色～暗褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～中粒砂含む	内外面ともにミガキ、底部ナデ	〃	12.1		6.0	黒斑あり
34	〃	〃	淡～暗褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面ハケ一部ナデ、底部ナデ	〃	18.1		12.6	
35	D-2	〃	淡灰褐色～淡黄褐色	〃	外面上部ナデ、中位以下荒いケズリ内面ナデ	〃	20.5		11.1	
36	B-2	〃	淡黄灰色(地色)	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケのちナデ？内面ナデ	〃	11.4		5.2	丹塗り？
37	D-1	〃	淡黄灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ともにナデ	〃	7.4		3.2	手捏ね
38	F-2	台付鉢	明赤褐色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ナデ？内面ハケ	ややあまい？	14.6		9.5	
39	土器群⑤	〃	淡黄灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂少量含む	外面ナデ、底部付近ケズリ、台部ナデ？内面ナデ	良	14.7		(7.4)	
40	C-2	器台	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ともにナデ、一部ハケ	良好	10.9		10.2	
41	G-1	〃	暗茶褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂多く含む、雲母目立って多い	内外面ともにナデ、内面裾部未調整	〃	8.8		9.9	
42	F-2	〃	赤褐色～淡黄灰色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、受部と裾部ナデ、内面ナデ	〃	14.0		19.4	
43	D-2	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ナデ、一部にタタキ残る、内面ナデ	ややあまい	7.9		13.9	内面にシボリ痕
44	F-1	〃	淡黄褐色	〃	外面ハケ、内面受部と裾部ハケ	良好	14.4		19.4	〃
45	〃	〃	(外)淡褐色 (内)淡黄褐色	〃	内外面ともにハケ、内面屈曲部ナデ	ややあまい	12.4		21.4	表面やや風化、内面に黒斑
46	〃	〃	淡黄灰色～淡赤褐色	〃	〃	良好	12.5		21.7	
47	F-2	〃	暗褐色～暗黄灰色	〃	外面ハケ、内面受部一部ハケ、裾部ハケ	〃	11.4		(13.3)	
48	〃	支脚	暗黄褐色	〃	内外面ハケ、内面上部ナデ	〃			(11.8)	
49	〃	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母の微～粗粒砂含む角閃石？	外面タタキ、内面上部ナデ、裾部ハケ	〃			13.2	
50	G-1	高杯	赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む精良な胎土	杯部内面ナデ	〃	25.1		(13.6)	杯内面は丹塗り、その他は風化が激しく不明、脚部内面シボリ痕
51	〃	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む精良	杯部内外面、脚部外面ミガキ？脚部内面ナデ、裾部ハケ	〃			(12.3)	全体に風化剥離しているが、部分的に丹塗りの痕跡を止める、杯部内外面、脚部外面は丹塗りであったと考えられる
52	土器群⑤	〃	淡赤褐色	〃	杯部外面ハケ、内面ナデ、脚部外面ハケのちナデ？、内面ナデ？	〃			(27.7)	脚内面上部にシボリ痕
53	C-2	〃	暗黄褐色～淡褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む、長石、石英の粗粒砂目立つ	杯部外面ハケ、内面ナデ、脚部外面ハケ、内面上部ナデ、裾部ハケ	〃	27.9		20.1	全体に風化
54	F-2	〃	淡暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	杯部外面荒いケズリのちナデ、内面ナデ、脚部外面ナデ、裾部ハケ	〃	27.9		24.3	脚部外面にミガキ？、内面にシボリ痕、脚部に3孔あり
55	C-2 土器群⑤	〃	淡赤褐色	〃	杯部内外面暗文風ミガキ、脚部内面ナデ、孔付近ケズリ	〃	31.2		23.0	全体に風化している、脚部内面上部にシボリ痕
56	E-1	〃	〃	〃	杯部内外面ハケ、内面一部ナデ消し、脚部外面ハケ、内面荒いケズリ	〃	30.4		(18.0)	〃

57	C-2	高　杯	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	杯部内面ナデのち暗文風ミガキ、脚部内面ナデ	良　好	21.3		(13.4)	外面風化のため調整不明、脚部内面にシボリ痕
58	G-1	壺	淡黄灰色～淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂多く含む	内外面ともにナデ?、外底面ケズリ	〃	12.1	18.7	21.2	肩部に線刻重弧文
59	E-2	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面頸部ハケ、胴部～胴中粒以下板ナデ?一部ハケ、内面ハケ	〃	31.4	34.7	37.4	黒　斑　あ　り
60	土器群⑤	〃	〃	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂多い	外面ハケ、内面ケズリのちナデ?	〃	16.3	24.8	28.9	
61	E-2	〃	〃	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	口頸部内外面ナデ胴部内外面ハケ	〃	19.3	28.5	31.4	
62	D-2	複合口縁壺	淡黄褐色(ややくすむ)	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ、肩部一部荒いケズリ、底部ナデ	〃	17.9	28.4	36.5	黒　斑　あ　り
63	D～E-1	〃	淡黄灰色～淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面頸部上半と胴中粒以下のケ、頸部下半と胴部ハケのちナデ?	〃	25.3	27.5	39.5	
64	D-2	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面頸部ハケ、頸部下半ケのち一部ハケ、胴部ハケのちナデ、外面頸部上部ハケ、胴部中粒以下ナデ	〃	18.2	25.4	37.1	
65	G-2	袋状口縁壺	(外)暗褐色(内)黒褐色	〃	外面頸部ハケのちナデ、胴部ハケ、内面ナデ	〃	9.3	15.0	20.6	
66	F-1	壺	淡黄灰色	長石、石英の微～粗粒砂多く含む、角閃石の微～中粒砂若干含む雲母?	外面ハケのちナデ?内面ナデ	ややあまい	9.0	13.5	17.4	全　体　に　風　化
67	D-1	複合口縁壺	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂多く含む	外面頸部ナデ、胴部ハケ、内面頸部ナデ、胴部ハケのちナデ消し	良　好	15.6	28.9	41.8	一部風化のため剥離
68	D-2	広口壺	(外)淡赤褐色(内)黄灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ナデ、内面頸部ハケ、胴部ナデ	〃	28.0	(13.8)	69	
69	〃	長頸壺?	淡黄灰色	長石、石英(多い)、雲母、角閃石(わずか)の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	ややあまい		14.2	(7.3)	黒　斑　あ　り
70	E-2	短頸壺	淡黄灰色～淡黄褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含むやや粗雑	外面タタキのち板ナデ、胴中粒タタキのち一部ハケ、内面ハケ	良　好	16.0	21.4	18.4	つくりはていねいな感じ
71	〃	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面上部ハケ、胴中粒以下荒いケズリ、内面ハケ、底部付近ナデ	〃	18.8	19.1	16.0	
72	F-1	直口壺	淡黄灰白色～赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母(少ない)含む	内外面ともにハケ	〃	15.9	27.1	(21.7)	黒　斑　あ　り
73	F-2	壺	淡黄灰色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂 雲母微粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	17.1		(9.8)	丹　塗　り　?
74	G-1	無頸壺	淡赤褐色(地色)	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む精良	外面ナデ、内面ナデ、底部付近ハケ	〃	16.9	19.2	17.4	全　面　丹　塗　り
75	〃	甕	〃 〃	長石、石英、角閃石の微粒砂含む 精良	外面上半ナデ、下半ミガキ、内面ナデ、底部付近に指頭圧痕	ややあまい	31.6	28.6	28.7	底部外面以外全面丹塗り、突帯間に暗文
76	〃	壺	明黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む	外面ハケのちナデ、内面頸部ハケのちナデ、胴部ナデ	良　好	20.7	30.1	34.8	口縁部内外面丹塗り、胴部も丹塗りの可能性あり
77	〃	袋状口縁壺	〃	〃 〃　精良	内外面ともナデ	〃		24.6	(19.4)	外　面　丹　塗　り
78	〃	壺	暗赤褐色	長石、石英の微～粗粒砂含む	外面口頸部ナデ、胴部ハケ、内面ナデ	〃	33.2	42.2	(29.9)	外面丹塗り、内面風化剥落が激しい、丹塗りか?
79	B-1	鉢	暗赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ナデ、底部付近ミガキ、内面ナデ	〃	16.0		9.9	外面丹塗り?、精製土器

第2層出土土器観察表

番号	出土位置	器　形	色　調	胎　　土	調　　整	焼　成	口　径	胴　径	器　高	備　　考
1	土器群④	甕	暗褐色	長石、石英、角閃石の(雲母?)微～粗粒砂多く含む	外面ハケ、内面ナデ	良　好	25.6	26.6	(22.4)	外面スス付着顕、器面風化のため調整の詳細不明
2	D-2 土器群④	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	18.9	21.9	29.9	外　面　ス　ス　付　着
3	F-2	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂多く含む	内外面ともにハケ	〃	20.4	23.5	(24.6)	

4	土器群④	甕	暗褐色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂多く含む	内外面ともにハケ	良 好	22.0	24.8	(15.0)	外面スス付着痕
5	E-1	〃	淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面上部タタキのち一部ハケ、中位以下荒いケズリ、内面ハケ	ややあまい	20.7	23.8	(17.3)	瓦質風の焼き？
6	土器群③	〃	淡赤褐色～淡灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂やや多く含む	外面上部タタキのち一部ハケ、中位以下ハケ、内面ハケ	良 好	15.8	21.2	(17.5)	黒 斑 あ り
7	土器群③ E-2	〃	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面上部タタキのちハケ、中位以下ケズリ、内面ハケ	〃	20.8	22.1	34.0	胴部外面に一部スス付着、黒斑あり
8	土器群③	〃	淡黄灰褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、底部近くのちナデ、底部ケズリのちナデ、内面ハケ	ややあまい	23.0	23.4	28.6	外面一部スス付着、黒 斑 あ り
9	E-2	〃	赤褐色～淡黄灰色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂やや多く含む	外面肩部タタキ、以下ハケ、内面ハケ、下部荒いケズリ	良 好	19.2	17.7	(16.0)	黒 斑 あ り
10	E-1	〃	(外)暗褐色 (内)淡褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面肩部ハケ、以下ケズリ	〃	20.6		(10.6)	外面にスス付着
11	土器群③	甕 (布留式)	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面肩部ハケのちナデ、以下ハケ、内面輪部下ナデ、以下ケズリ	〃	20.2	24.2	(18.7)	外面肩部にスス付着
12	〃	〃 (〃)	淡赤褐色～淡褐色	〃	外面肩部ハケのちナデ、以下ハケ、内面ケズリ	〃	18.9	24.7	(14.6)	外面口縁、肩部に一部スス付着痕、肩部に波状文数条あり
13	〃	〃 (〃)	淡灰白色～淡褐色	〃	外面ハケ、内面ケズリ	〃	19.2	24.8	(18.8)	全体に風化、調整の詳細不明 肩部に波状のハケ
14	土器群④ -a-③	甕	(外)暗褐色 (内)黒褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	ややあまい	17.7	16.9	19.6	外 面 ス ス 付 着
15	土器群③	〃	淡黄灰色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	内外面ハケ、底部ナデ	〃		16.7	(16.8)	〃
16	サブトレ (2層？)	〃	明黄褐色	長石、石英の微～粗粒砂多い雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ナデ	良 好	16.7	17.6	16.5	内面口縁～外面丹塗り？(化粧土か？)
17	E-2	〃	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面中位以上ハケ、以下タタキ？内面中位以上ハケ、以下ナデ	〃	13.2	13.9	15.0	肩部より下にスス付着、内面底にコゲ巻き(？)
18	E-1	〃	淡赤褐色～淡褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面上部板ナデ？、下部ハケ、内面ハケ	〃	12.5	16.0	16.4	
19	F-2	〃	淡黄灰色～赤褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂やや多く含む	外面ハケ、内面ナデ	〃	16.7	15.6	14.1	外面にスス付着
20	F-2	台付甕	淡黄灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ、台部内外面ともにハケ	ややあまい	13.6	14.7	16.6	
21	土器群③-④	〃	〃	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む 雲母？	外面肩部上ハケのちナデ、以下荒いケズリ、内面中位以上ハケ、以下ケズリ、台部内面ハケ	良 好	14.8	16.1	20.8	胴外面上半部、風化して調整不明？
22	サブトレ (2層)	鉢	淡黄褐色	長石、石英の微～粗粒砂多く含む、角閃石微量含む 雲母？	内外面ともにナデ	〃	17.2		13.4	底 部 穿 孔
23	土器群④	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面板ナデ、内面ナデ	〃	23.5		13.8	精 製 品
24	土器群④ -a-①	〃	(外)淡褐色 (内)暗褐黒色	長石、石英、角閃石、雲母(少ない)微～粗粒砂含む	外面タタキ？、内面ナデ	ややあまい	18.9		10.5	外面風化のため調整不明瞭、黒斑あり
25	土器群④ -a-⑤	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ	良 好			(12.0)	本来は内外面共に赤褐色の化粧土を施していた？
26	E-2	〃	(外)淡黄灰色 (内)淡灰褐色	〃	外面中位以上ハケ、以下ケズリのちナデ、内面ハケ	〃	18.2		11.9	全体にやや風化、黒 斑 あ り
27	土器群③	〃	明灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂多く含む	外面中位以上ケズリ、以下ナデ？、内面ケズリ、底部ナデ	ややあまい	14.9	15.2	10.6	全体に風化、調整不明
28	土器群③	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面中位以上タタキのちハケ、以下ハケ、内面ハケ	良 好	21.0		12.4	甕の下半部と同形態
29	E-2	〃	淡灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む 精良	外面ハケ、底部ケズリ、内面ナデ	ややあまい	16.1		6.6	口縁部風化激しい内面に放射状の暗文
30	E-1	〃	赤褐色	長石、石英、雲母の微～中粒砂含む	内外面とも上部ハケのちナデ、以下ナデ	良 好	11.8		6.2	
31	土器群③	〃	淡～暗褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む(一部3mm程の花崗岩あり)	外面ナデ、内面上半ケズリ、以下ハケ	〃	11.2		4.8	

32	E-1	鉢	(外)淡黄灰色 (内)黒褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ケズリ、内面ナデ	良　好	7.2		5.2	
33	土器群③	台付鉢	暗灰褐色～淡黄灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む	内外面上半ハケ、以下ナデ、台部外面ハケ、内面ナデ	〃	17.2		15.7	外面にスス付着
34	土器群③(本体) 2,3層、3層	〃	暗黄褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	内外面ハケ、台部外面ハケ、内面上部ナデ、以下ハケ	ややあまい	23.2		(16.4)	粗製の感を受ける
35	E-1(脚) E-2(杯)	高　杯	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む量は少なく粘土は精良	脚部外面屈曲部以上ハケのち一部ミガキ、以下ミガキ、脚端部外面横ハケのち一部ミガキ、内面下部縦ケズリ、脚部ハケ	良　好	31.3		22.4	脚部外面屈曲部以下のナデ調整不明、暗文風ミガキ 脚部に2孔
36	土器群③	〃	〃	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む	杯部外面ケズリ、内面屈曲部以上ミガキ、脚部外面ケズリ、内面下部縦ケズリ、脚部ハケ	〃	30.3		21.3	全体に器面風化 暗文風ミガキ、脚部に2孔
37	C-1	〃	暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂やや多い	外面屈曲部以上ナデ、以下ハケ 内面ナデ	〃	29.1		(9.8)	
38	F-2 3層 D-1 3層	〃	暗灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ、内面ナデ？	ややあまい			(13.9)	4孔 内面にシボリ痕
39	G-2	〃	淡黄灰色	〃	内外面屈曲部以上ナデ、以下荒いミガキ	良　好	29.9		(8.3)	
40	サブトレ 2層	〃	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂を多く含む	外面裾部ミガキ、内面上半ナデ、裾部ハケ	〃			(15.4)	暗文風ミガキ 3孔 内面にシボリ痕
41	E-1	〃	淡灰白色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂を含む	外面ハケ、内面屈曲部以上ナデ？以下ハケ	ややあまい	27.0		(8.5)	全体に風化、調整不明
42	〃	〃	淡赤褐色	〃	脚部外面ナデ？内面屈曲部以上ハケ、以下ナデ？脚部外面ミガキ？内面ナデ？	良　好			(12.6)	外面風化のため調整不明 3孔？
43	F-2	〃	暗黄灰色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	外面屈曲部以上ナデ、以下荒いミガキ？内面ナデ	〃				径は復原できない
44	〃	〃	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面屈曲部以上ナデ、以下板ナデ 内面ナデ？	〃			(8.1)	径 30 cm 程か？
45	E-1 土器群③	〃	(外)赤褐色 (内)黒褐色	〃	外面ナデ 内面ミガキ	〃	12.1		(5.6)	暗文風ミガキ
46	〃	〃	明赤褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	脚部外面ともにミガキ 脚部外面胴部ケズリ、裾部ミガキ 内面ナデ	ややあまい			(7.0)	全体に風化 調整不明 3孔？畿内系
47	E-2 土器群③	〃	赤褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	円筒部内外面ともにナデ？裾部内外面ともにハケ	良　好			(4.7)	3孔 全体に風化
48	F-1	〃	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケのちミガキ 内面上部ナデ、以下ハケ	ややあまい			(9.3)	暗文風ミガキ 4孔
49	G-1	〃	暗赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	内外面ともにナデ	良　好			(12.8)	3孔 内面にシボリ痕、全体に風化
50	土器群④	〃	淡黄褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂多く含む	杯部、脚部内外面ともにナデ？	〃			(17.1)	粗製品？内面にシボリ痕 器面風化のため調整不明
51	土器群③	器　台	淡黄灰白色～淡褐色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む 雲母？	外面上部ハケ、以下タタキ 内面受部ハケ、以下ナデ	〃	13.6		18.0	完形品 黒斑あり
52	サブトレ(層?)	〃	暗赤褐色～淡褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂多く含む	内外面ナデ	〃	11.6		16.0	内面にシボリ痕
53	土器群③	〃	暗灰褐色～赤褐色	長石、石英、雲母の微～粗粒砂含む(一部mm程のものあり)	外面ハケ 内面上部ナデ、以下ケズリ一部ハケ	〃				外面半分に黒斑
54	〃	支　脚	暗赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂を含む	外面タタキ 内面ナデ	〃				
55	E-2 土器群③	複合口縁壺	淡桃褐色	長石粒を多く含む	頸部下半、胴部上半ナデ、下半ハケのち磨滅、内面胴部ハケ、頸部ハケのちナデ、以下ハケ	〃	33.8	29.9	45.3	頸部付根付近～胴中位丹塗り 頸径21.4底径6.3黒斑あり
56	〃	〃	〃	長石粒が多い	外面頸部ハケ、胴部上半ナデ、下半ケズリのちナデ内面頸部上部ナデ、以下ハケ、頸部ハケのち磨ナデ、底部付近ハケ	〃	30.5	27.2	45.3	頸部下半～胴中位丹塗り 頸径19.7黒斑あり
57	〃	〃	(外)淡黄灰褐色 (内)赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒を含む	外面ハケ、底部付近ナデ、内面ハケ	〃	35.8	29.8	48.2	黒斑あり
58	〃	〃	明灰白色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ハケ、底部付近ナデ内面頸部ミガキ、胴部ハケ	〃	26.1	23.4	35.1	丹塗り？黒斑あり
59	〃	壺	(外)明黄灰色 (内)暗灰褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む精良	外面肩部ハケ、以下板ナデ 内面ナデ	〃	14.4	28.0	32.3	黒斑あり

第1層出土土器観察表

番	出土位置	器形	色調	胎土	調整	焼成	口径	胴径	器高	備考
1	土器群①	甕	淡橙色	石英、長石の粗粒砂雲母、角閃石の微粒砂含む	外面ハケ、内面ハケのちケズリ	ややあまい	19.3	22.0	27.0	外面にススが付着
2	E-2	〃	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面胴部タタキ、以下荒いケズリ、底部付近ハケ内面ハケ	良好	17.6	21.9	27.8	黒斑あり
3	土器群①	〃	淡黄灰色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂若干含む雲母微量	外面胴部タタキのちハケ、以下ハケ内面ハケ、下部に一部ナデ	〃	22.7	26.8	(22.2)	黒斑あり
4	〃	短頸壺	淡明橙色～明黄灰白色	石英、長石、角閃石の細粒を若干含む	内外面ハケ、底部付近のちナデ	〃	15.0	18.4	19.1	外面は風化している黒斑あり
5	〃	〃	淡黄灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の中～微粒砂含む	外面ケズリ、内面ハケ	ややあまい	14.1	14.8	(12.7)	黒斑あり
6	〃	甕	淡赤褐色～暗褐色	長石、石英、雲母の中～粗粒砂含む、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ？内面ナデ（一部ケズリ？）	あまい	13.8	16.4	(12.0)	粘土紐接合痕残る全体に風化
7	〃	〃	淡黄灰褐色	長石、石英、角閃石、雲母の粗～微粒砂多く含む	外面上半ハケ、以下ケズリ内面上部ハケ、以下ケズリ	良好	16.5		14.0	粗製のコシキNO8とセットで出土
8	〃	台付甕	淡赤褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	外面ハケ内面上部ハケ、以下ハケのちナデ一部ケズリ台部内外面ともにナデ	〃	16.0		17.1	NO7とセットで出土
9	〃	鉢	暗褐色～淡黄褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	外面ケズリ、内面上部ナデ、以下ケズリ 台部内外面ともにナデ	〃	21.4		10.1	黒斑あり
10	〃	〃	淡橙色～淡黄灰色	〃	内外面ともにナデ	ややあまい	12.1		7.2	やや楕円形
11	〃	〃	(外)暗褐色(内)暗橙色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂多く含む	外面ナデ、底部ケズリ内面上半ケズリのちナデ、以下ケズリ	あまい	14.2		6.3	
12	〃	甕(布留式)	淡黄灰白色～暗橙色	長石、石英の粗粒雲母、角閃石の中粒砂含む	外面ハケ、内面ケズリ	ややあまい	19.8	26.4	34.0	外面風化
13	〃	〃(〃)	淡褐色	長石、石英、雲母、角閃石の微～中粒砂含む	〃	良好	17.7	23.8	30.5	内外面ともに風化が激しい外面に一部ススが付着
14	〃	〃(〃)	暗褐色～暗橙色	長石、石英、雲母、角閃石の細粒含む	〃	ややあまい	18.4	24.6	31.0	黒斑あり、内外面風化
15	〃	〃(〃)	淡赤褐色	長石、石英、角閃石、雲母の微～粗粒砂含む	〃	〃	18.2	23.6	(27.7)	外面にススが付着黒斑あり
16	D-2	複合口縁壺	〃	〃	〃	良好	25.4		(17.3)	全面に風化して調整の詳細不明、山陰系
17	〃	〃	淡黄灰色	〃	外面胴部ハケのちナデ、以下ハケ、内面ケズリ	〃	20.9	26.9	(20.3)	山陰系
18	土器群①	〃	淡赤褐色(淡灰白色)	長石、石英、角閃石、雲母の微粒砂含む	外面ナデ、内面ケズリ	〃	21.3		(9.7)	〃
19	E-1	鉢	淡赤褐色	長石、石英、角閃石の微～中粒砂含む	外面上部ナデ、以下ハケ、内面ケズリ	〃	18.7	16.0	(8.7)	全体に器面風化畿内系
20	土器群①	小型丸底壺	灰白色～暗橙色	長石、石英の粗粒砂、雲母、角閃石の微粒砂多い	外面上半ハケ、以下ナデ、底部ケズリ内面上部ナデ、以下ケズリ	〃	14.5	12.7	10.2	外面は風化が激しい畿内系
21	D-2	台付小型壺	淡褐色～暗灰白色	長石、石英、雲母、角閃石の微～粗粒砂含む	外面上半ナデ、以下ハケ、内面ケズリ？台部内外面ともにナデ	〃	12.9	12.7	12.7	山陰系
22	土器群①	小型丸底壺	淡赤褐色(一部淡褐色)	〃	外部肩部ハケ、以下ナデ、内面ナデ	〃	7.8	8.6	9.1	手づくねによる成形胴部内面に指ナデ痕明瞭
23	E-2	鼓形器台	淡赤褐色	〃	外面ナデ、内面ケズリ	〃			(5.6)	全体に風化 調整不明瞭
24	土器群①	高杯	〃	長石、石英、雲母、角閃石の微粒砂含む	内外面ともにナデのちケズリ	〃	21.6		(7.9)	精製土器暗文風ミガキ
25	〃	〃	赤褐色	長石、石英、角閃石の中～微粒砂含む	杯部外面胴部以上ハケ、以下ケズリ？内面ケズリ、内外面ともに丁寧なミガキ脚部外面ナデ、脚部内面ハケのちミガキ、内面ハケ	ややあまい	20.4		15.3	脚内面を除き赤褐色の化粧土暗文風ミガキ、3孔
26	D-1	〃	淡赤褐色	長石、石英、角閃石の微～粗粒砂含む粗粒目立つ雲母？	外面ハケのちミガキ、内面ナデ？のちミガキ	良好	32.3		(6.8)	暗文風ミガキ

Ⅳ．東スス町遺跡の調査

1．遺跡の概要

調査地点は、事前の試掘調査にもとづき、県道工事区間の中で最も北側の、国道202号に接続するところとした。所在地は、福岡県前原市大字東335番地である。

現況は水田および畑地であるが、長野川左岸に広がる微高地の端部にあたり、東向きの緩やかな斜面となっている。前面（東側）に広がる水田とは比高差２～2.5ｍ、長野川からの距離は約230ｍである。

調査区は、道路工事によって削られる部分に、幅８ｍ・長さ70ｍにわたって設定した。調査面積は、約500㎡である。

遺構としては溝・ピット群・井戸を検出した。そして、それぞれから若干の土器が出土したが図示に耐えるものはなく、さらには、調査期間中の台風の豪雨によってただでさえ少なかった土器をかなり失ってしまい、気象状況に対する配慮の足りなさを反省させられた。

なお調査期間は、1991年（平成３年）７月18日から８月８日である。

2．遺構と遺物

遺構は、調査区の南側にやや偏って検出され、北側にわずかな集中が見られるものの、中央付近ではほとんど検出されなかった。北側に比べて南側のほうが低いため、後世の掘削の影響が北側でより大きかったであろう。

溝状の遺構は、調査区の南側で、調査区を斜めに横切る形で検出された。中央に比較的大きな溝があって、その両側に細い溝が平行して走っているが、上部は大きく削られていて、いずれも寸断されている。一応、三条の溝を想定することができるが、あるいは大きな一条の溝であった可能性も捨て難い。また、残りが悪いとはいえ、直線的なしっかりした溝であったことが伺われ、方形に、かなり広い面積を区画していたのではないかと考えられる。調査区内では、溝状遺構に伴うような遺構は確認することができなかったが、地形的には溝の南西側にむかって丘陵が高くなっており、そちら側になんらかの施設があったと考えられる。わずかに埋土内からは、弥生式土器、古式土師器、白磁の小片が出土したが、いずれも磨耗が激しく、溝の時期を決定できるような資料とは成り得なかった。

ピット群は、直径20㎝前後の比較的小さいものが多く、建物の柱穴となり得るような大きなものは少なく、したがって、建物などを想定することはできなかった。ただし、残りが良くないながらも直線的にならぶピット群も散見され、杭列といったものは十分に想定できる。ピット内の土器は、これもまた摩滅の激しい細片ばかりで、時期を決める材料にはなり得ず、もちろん互いに関係を確認できるピットは存在しなかった。

井戸は、調査区の最も南側に近い所で検出された。直径約1.1mのほぼ正円の平面形を持つもので、地表面から約2m近く掘り下げて底面には到達できなかったが、台風による雨で地盤が弛んでいたこともあって、それ以上の調査は行なわなかった。そして、調査した範囲内では、木枠などの施設は確認できず、土器などの遺物も出土しなかった。ただし、掘り方を見る限り、円筒状に真っ直ぐに掘り込まれており、近代以降のものではないかとの印象を受けるものであった。

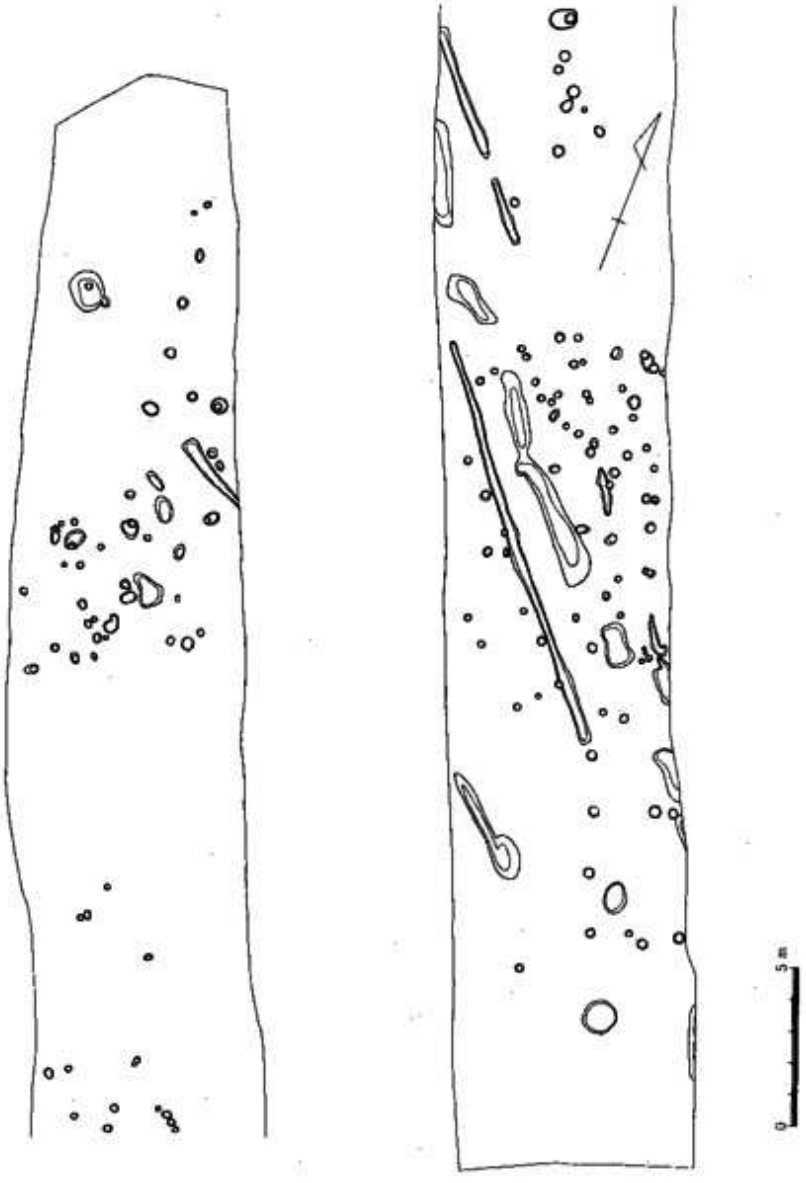


Fig.37 調査区全体図（1/250）

V．付 論　土器表面に見られる砂礫

奥田　尚

1．はじめに

前原市の本田孝田遺跡、浦志遺跡、東五反田遺跡等から出土した甕、壷等の土器に含まれる砂礫の観察をした。観察資料は完形品もあるが、口縁部の破片のみのものもある。最初に裸眼で土器片全体に見られる砂礫を観察し、次に倍率30倍の実体鏡で観察良好な部分を観察した。

観察は、石種・鉱物種・生物片の形、大きさ、量について行なった。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩・泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、変輝緑岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石、生物片として海綿の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物等があげられる。また、火山岩と深成岩とを区別するために、鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に、石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については、角、亜角、亜円、円の４段階に区分した。粒径についてはmm単位で目測した。量については、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの６段階とした。

岩石片の同定については、鉱物構成で名称が変わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英・長石、石英・長石・黒雲母、長石・黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃緑岩、輝石や橄欖石が噛み合っていれば斑糲岩とした。また、自形の石英が見られれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石が見られれば安山岩とした。片理があれば、片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

2．砂礫の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石である。それぞれの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、白色、粒形が角、亜角、粒径が最大８mmである。石英と長石が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色、灰色、粒形が角、粒径が最大４mmである。石英・角閃石、石英・長石・角閃石、長石・角閃石が噛み合っている。

火山ガラス：無色透明、粒径が最大0.7mmである。貝殻状、フジツボ状である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大８mmである。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。

長石：灰色透明、灰白色で、粒形が角、粒径が最大４mmである。

黒雲母：金色の金属光沢があり、粒径が最大２mmである。板状、粒状をなす。

角閃石：黒色、粒径が角、粒径が最大3㎜である。粒状、柱状をなす。柱状で一部に結晶面がみられるものがある。

3．砂礫種構成

観察した砂礫種構成は、花崗岩と他形の石英・長石からなる花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするグループからなる。この砂礫種構成と他の砂礫種を組み合わせて類型区分をした。砂礫が小量の場合、細粒の場合、表面に付着物が多く観察が不良の場合は類型区分不能とした。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる …… Ⅰb類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる …… Ⅰbd類型

4．砂礫の採取地

博多を中心として東を粕屋郡、西を糸島郡とした範囲の河川の砂礫種を調査した。現在の河川であるために、護岸工事等により、人為的に移動した砂礫種もごく僅かにあると考えられるが、自然に流出した砂礫が主を占めていると考えられる。河川砂礫の傾向をみれば、前原市の河川では比較的角閃石が多く含まれ、閃緑岩質の岩石片が見られる。早良平野や博多付近では角閃石が比較的少なくなり、片岩がごく僅かに含まれる場合や花崗岩質岩起源の砂礫のみとなる場合がある。福岡市東方の粕屋郡付近になれば、泥岩・砂岩や片岩が多くなる。

河川砂礫には、花崗閃緑岩のような比較的角閃石が多い砂礫からなることから、Ⅰb類型、Ⅰbd類型の砂礫は前原市付近で採取できる砂礫である。早良平野になれば、角閃石が比較的少なく、花崗岩質岩起源の砂礫が非常に多くなり砂礫種構成は異なってくる。

また、器形的に韓式系土器である浦志M-1図15の1、東五反田Ⅲ4号38の資料はⅠbd類型に属するが、石英や花崗岩、長石片においてもくすんだ色を呈し、他の資料の砂礫とは感覚的に異なる。韓式系とされている多くの資料に見られる砂礫である。同じ花崗岩質岩起源と推定される砂礫であるが、前原付近の砂礫とは異なる。

5．おわりに

前原市付近で制作されたと器形的に言われている甕、韓式系土器等の砂礫を観察した結果、砂礫の採取地が土器の制作地であるとするならば、韓式系土器以外の甕や壺は遺跡付近で制作されたものであり、韓式系土器は韓半島から運ばれてきた可能性がある。

Tab. I　土器の表面に見られる砂礫種

試料番号	器種	岩石																鉱物										焼土塊	類型
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石			
		裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍		
本田孝田 図29の58	壺 複合口縁	L-僅 角	L-僅 角		L-稀 角														L-多 E 僅	L-多	L-中	L-微 板	L-中 粒板	L-僅	L-僅			無	Ibd
本田孝田 図16の11	甕	L-微 角	L-稀 角		L-稀 角													M-微	L-中 E 微	M-中	M-中	M-僅 板	M-僅 板	M 稀	M-僅 EF稀			無	Ibd
本田孝田 図29の57	壺 複合口縁	L-中 角	L-僅 角		L-僅 角												M 稀 貝	M-僅	L-中 E 稀	L-中	L-微	S-稀 板	M 微 板	M 稀	M-僅 EF僅			無	Ibd
本田孝田 図33の14	布留甕		L-微 角		L-微 角												S 稀 束	M-僅	L-僅	M-僅	M-僅		M-微 板		L-僅 EF稀			無	Ib
本田孝田 図33の12	〃	L-微 角	L-微 角		L-稀 角												M 微 フ	M-僅	L-中 E 僅	L-中	L-多	L-微 板	M-微 板	M-僅	M-僅 EF稀			無	Ibd
本田孝田 1層(未報告)	〃	L-稀 角	L-微 角															M-中	L-中 E 微	M-中	L-中	S 僅 板	M-僅 板	M-稀	S 僅 EF稀			無	Ibd
浦志 図15の13	壺	L-僅 角	L-微 角		L-微 角													L-中	L-中 E 稀	L-中	L-僅				S 僅 EF中			無	Ibd
浦志M-1 図15の4	〃	L-僅 角	L-僅 角	L-微 角														L-微	L-僅	M-多	L-中			M-僅	M 僅			無	Ib
浦志M-1 図15の1	壺 韓式系	L-僅 角	L-微 角															L-僅	L-多 E 稀	M-微	M 微		S 微 板		M-僅			無	Ibd
東五反田 Ⅲ4号38	壺 韓式系	L-微 角	L-微 角															M-微	L-中 E 微	M-中	M 中			M-微	M-僅			無	Ibd
塚廻 住 2 215	壺 5世紀代		M-微 角																M-中		M-中				S 僅			無	砂礫細粒 区分不能
三雲 2号墓	甕棺 弥生中期	L-微 角																M-微		M-中				M-微				無	Ib?

裸眼＝裸眼観察：L＝粒径2㎜以上　M＝粒径2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径1㎜以上　M＝1㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5㎜未満　量は裸眼に同じ　-＝以下の粒径がある
E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　束＝束状　フ＝フジツボ状　図＝報告書等の図版

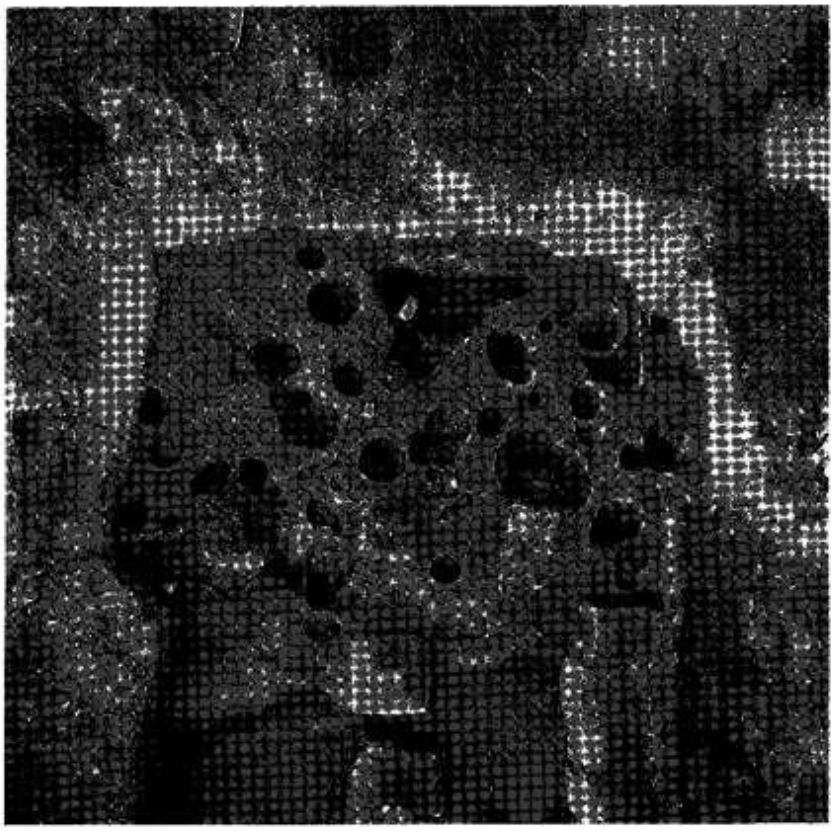
Tab. II　博多を中心とした河川の砂礫

試料番号	岩石																鉱物										類型
	花崗岩		閃緑岩		流紋岩		安山岩		砂岩・泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石		
	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	裸眼	30倍	
1．長野川 前原市長野	L-中角	L-僅角	L-稀角	L-微角													M-中	M-多	L-中	L-中	M-僅板	L-中粒	M-微	L-僅			Ib
2．雷山川 前原市三坂	L-中角	L-僅角												L稀角			M-中	M-多	L-多	M-多	S中板	M中粒板		M-僅			Ibh
3．赤崎川 前原市松井	L-微角	L-中角	L-僅角	L-僅角													L-微	L-中	L-多	L-中	L-僅粒	L-僅粒	M-微	L-稀			Ib
4．川原川 前原市西堂	L-僅角	L-僅角		L-微角													M-僅	L-中	L-中	L-中	S中粒	M-僅粒	S僅	M-僅			Ib
5．汐井川 前原市横	L-中角	L-多角											L-稀角	L-微亜角			L-多	L-中	L-中	M-中	M-稀粒	L-微粒					Ih
6．日向川 福岡市早良区飯盛	M-中角	L-多角				L稀亜円							L-稀亜角				L-多	L-多E稀	L-多	L-中	M-微板粒	L-微粒板		L-稀			Ibd
7．室見川 福岡市早良区都地	L多角	L-多角											L-稀亜角	L稀亜角			L-中	L-中	L-中	L-中	M-僅板	M-僅粒板		M-微EF稀			Ibh
8．樋井川 福岡市城南区田島	L-多角	L-多角			L稀亜角	M稀亜角							L-稀角	L稀亜角			L-多	L-中	L-中	L-中	M-稀粒	S稀粒					Idh
9．那珂川 春日市警弥郷	L-中角	L-中角															L-多	L-多	L-多	L-多	M-微板粒	L-微粒					Ia
10．御笠川 大野城市御笠川	L-中角	L-中角															L-多	L-中	L-多	M-多	S僅板	S僅粒		S微			Ib
11．宇美川 粕屋郡志免町片峰	M-中角	L-僅角							L-微角	L-微亜角			L-稀亜角	L-僅角			L-多	L-多E稀	L-僅	L-微	M-稀粒			L-稀			Ibdgh
12．須恵川 粕屋郡志免町本村	L-中角	L-僅角							L-微角	M稀亜角		M稀円	L-微角	L-稀角			L-多	L-多	L-中	L-僅		M-稀粒		S稀			Ibgh
13．多々良川 粕屋郡粕屋町長戸	L-僅角	L-僅角				L稀亜角				L-微亜角			L-多亜角	L-多亜角			L-中	L-中E稀	L-微	L-稀							Ⅶadg
14．久原川 粕屋郡久山町蒲田	L-稀角	L-微角				L-稀亜角			L-中亜角	L-中亜円		L-僅円	L-多亜角	L-多亜円			L-微	L-僅									Ⅶadg
15．猪野川 粕屋郡久山町牛見原						M稀亜円							L-非亜角	L-非亜角		M稀貝フ	L微	M微E中									Ⅶd

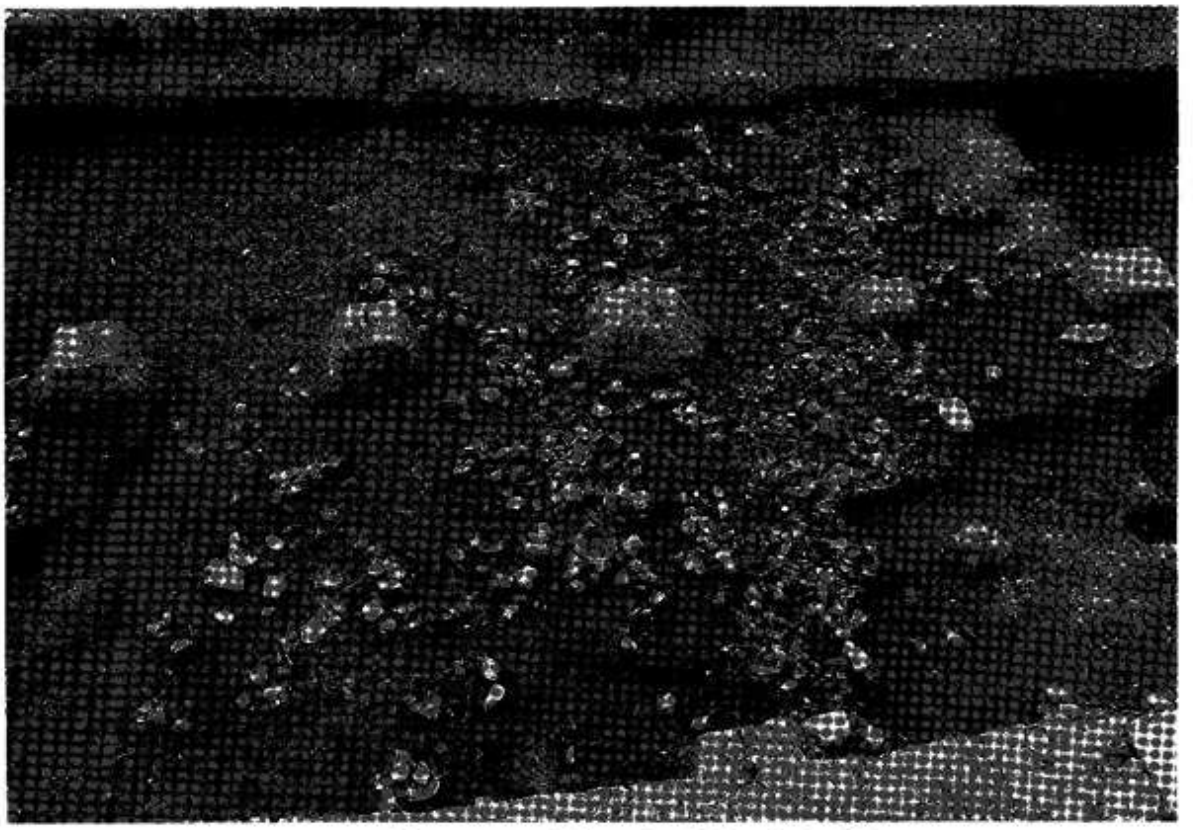
PLATE

PL. 1

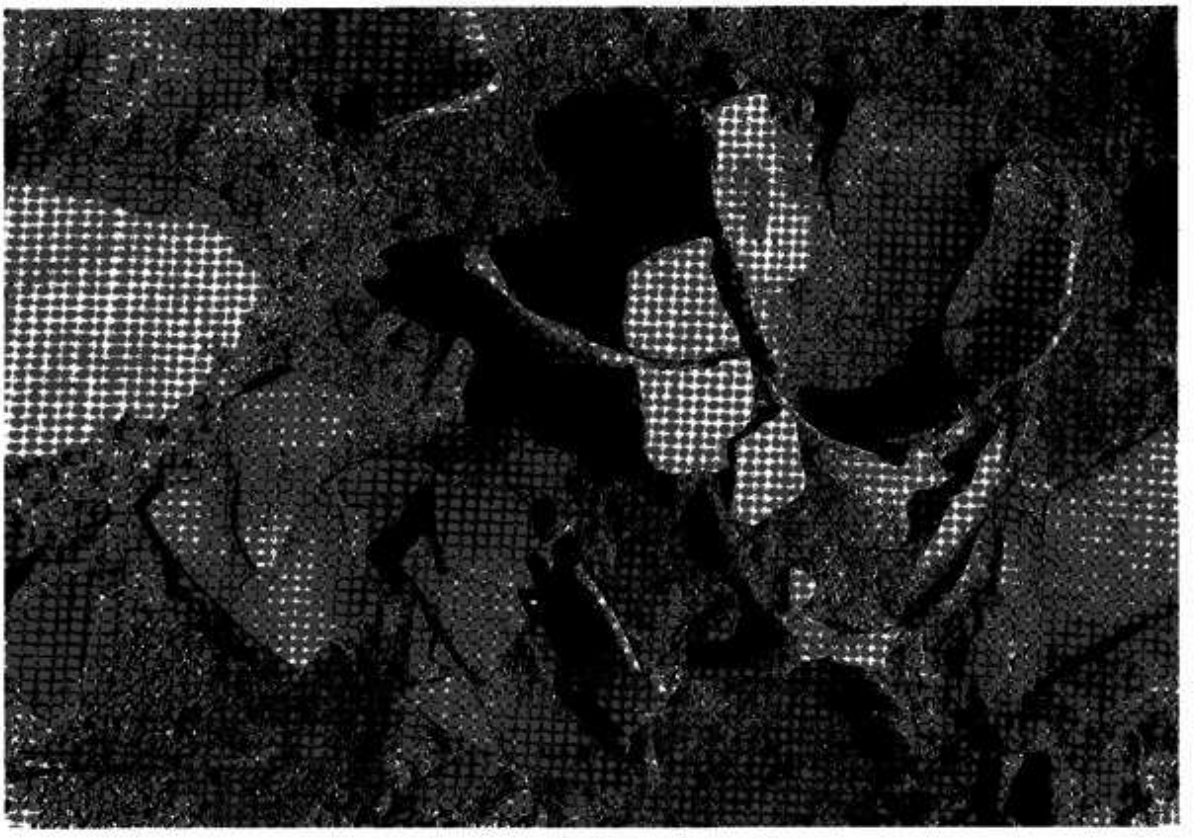
a. 本田孝田遺跡全景
（上から）



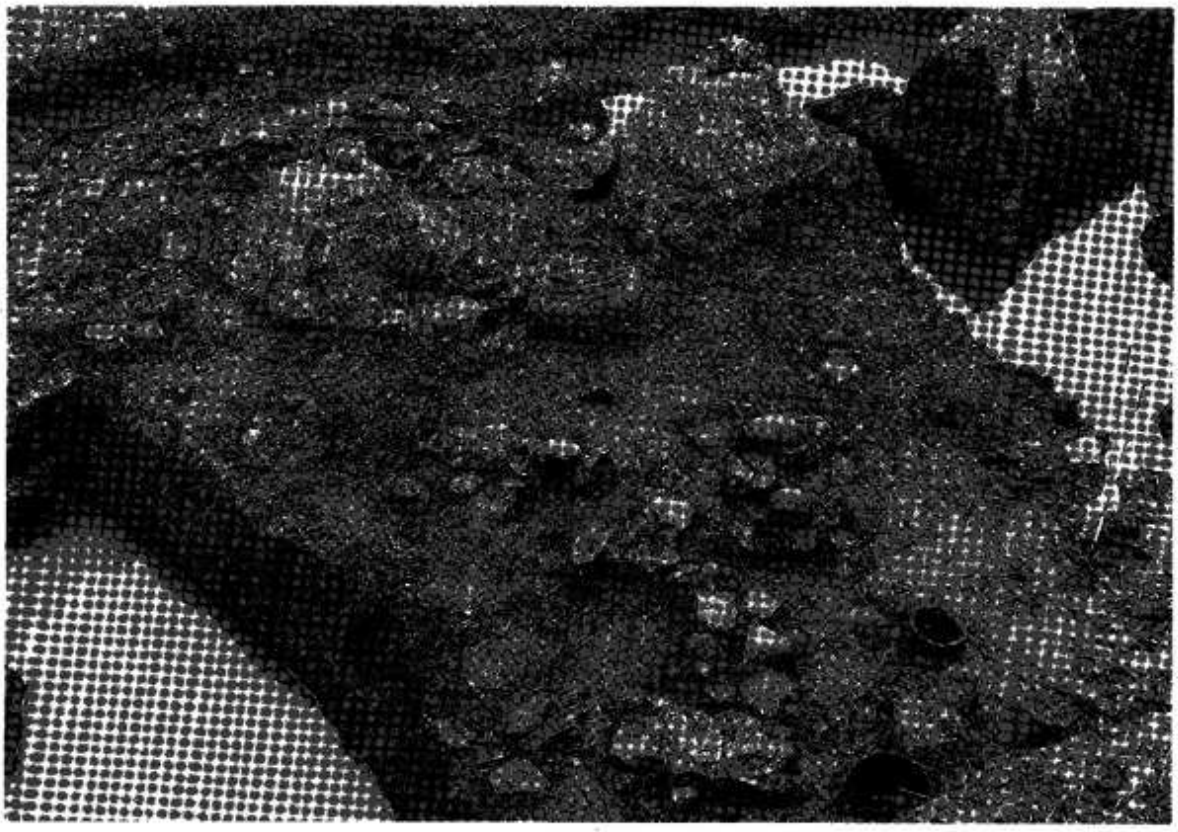
b. ピット・土坑
（上から）



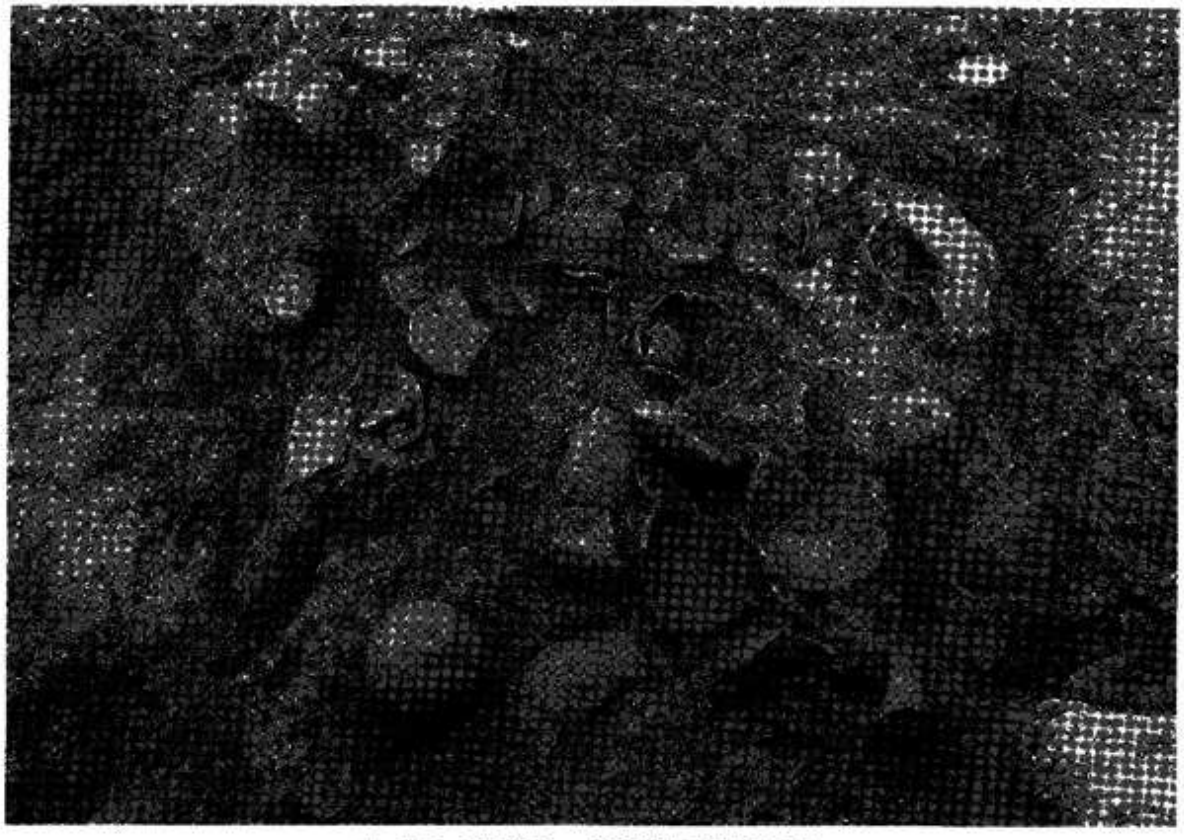
a．大溝第１層土器群①検出状況（全景・南西から）



b．同　　上（土器７、８・北西から）

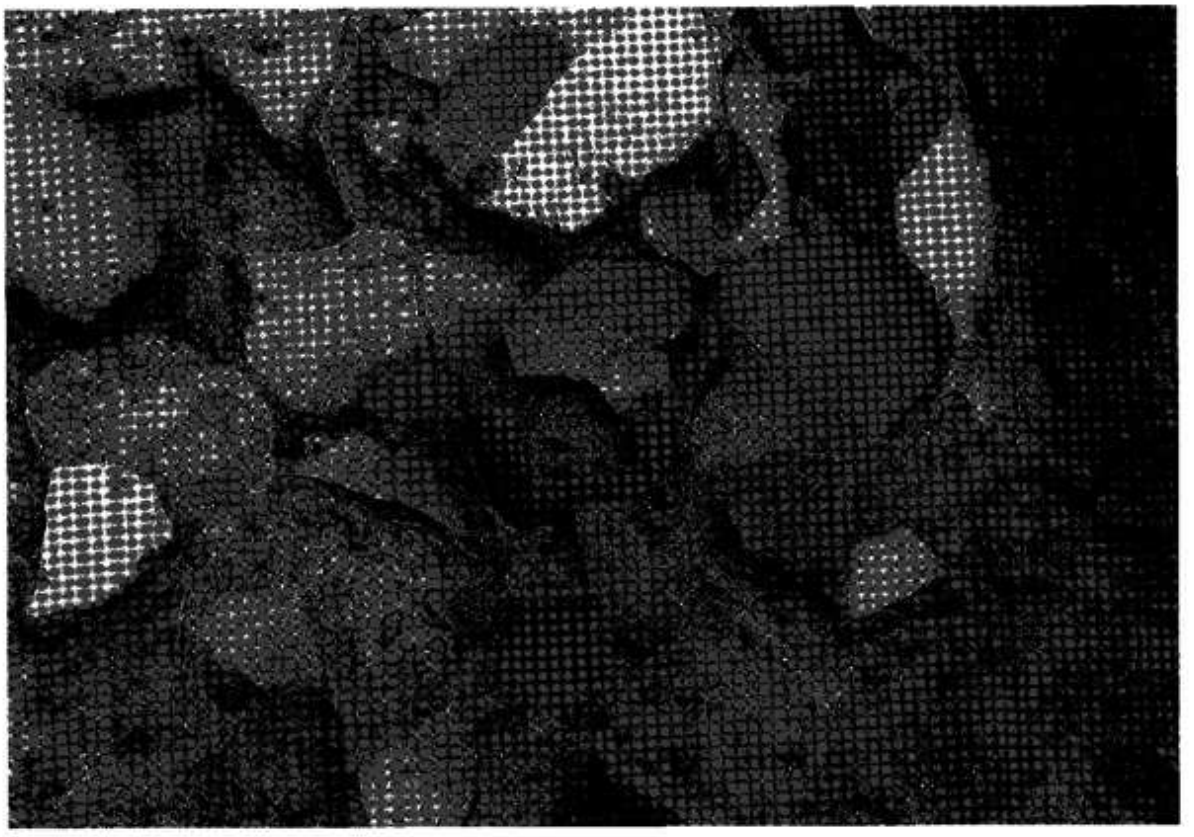


a．大溝第２層土器群③検出状況（全景・北西から）



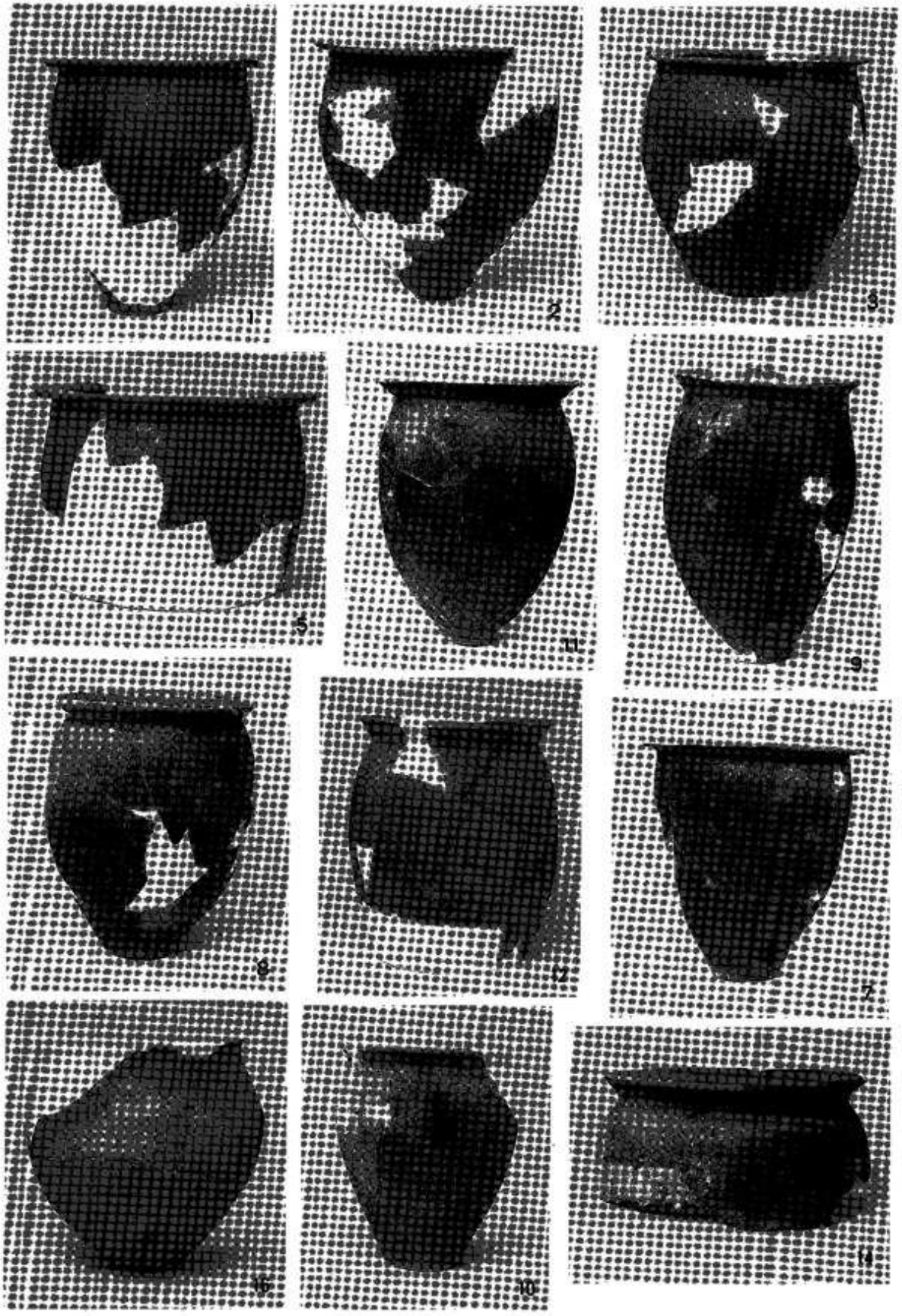
b．同上土器群④－ａ検出状況（北東から）

a．大溝第３層土器群⑤検出状況（北東から）

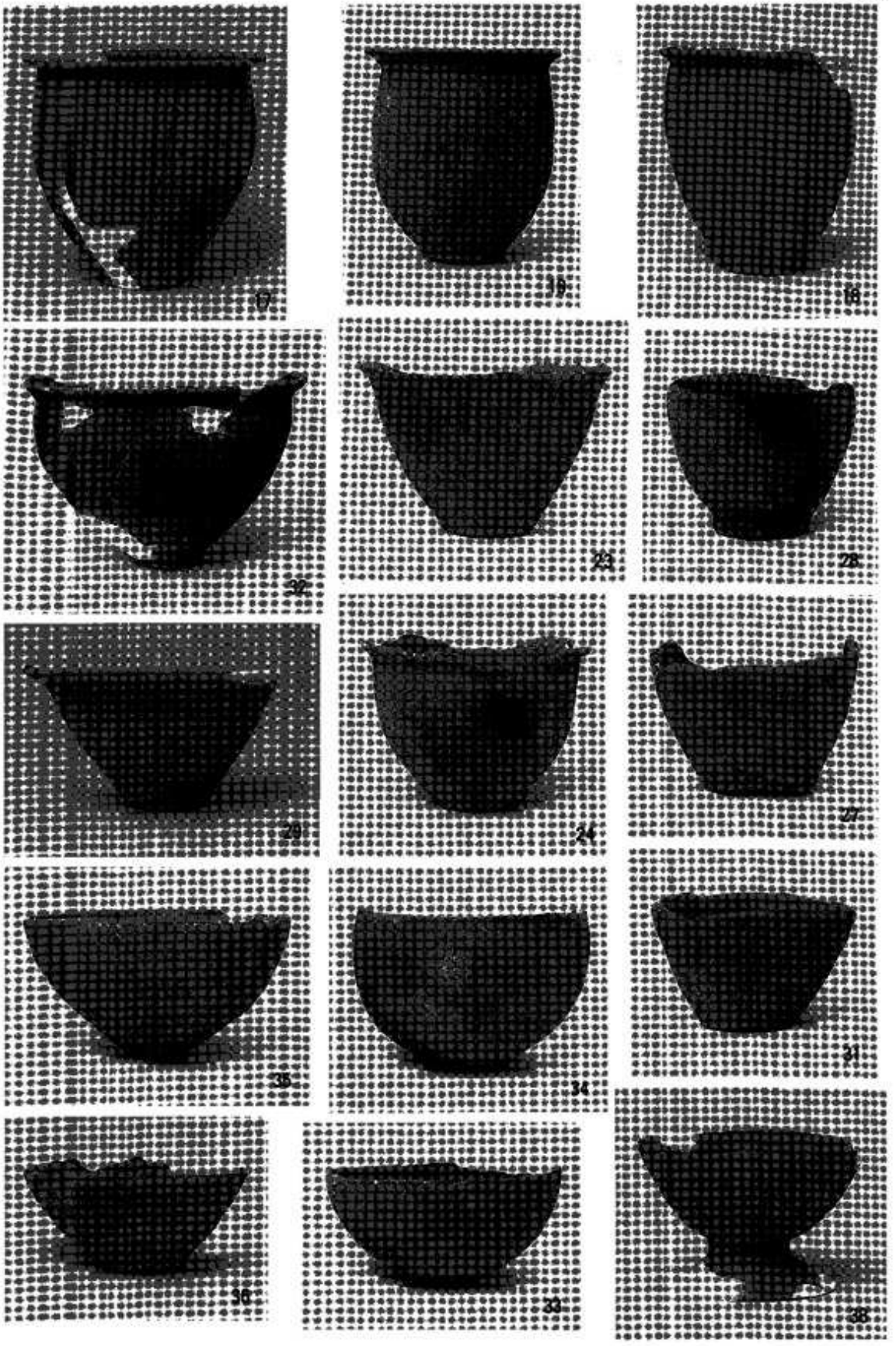


b．青銅製鏃先出土状況（南東から）

PL. 5

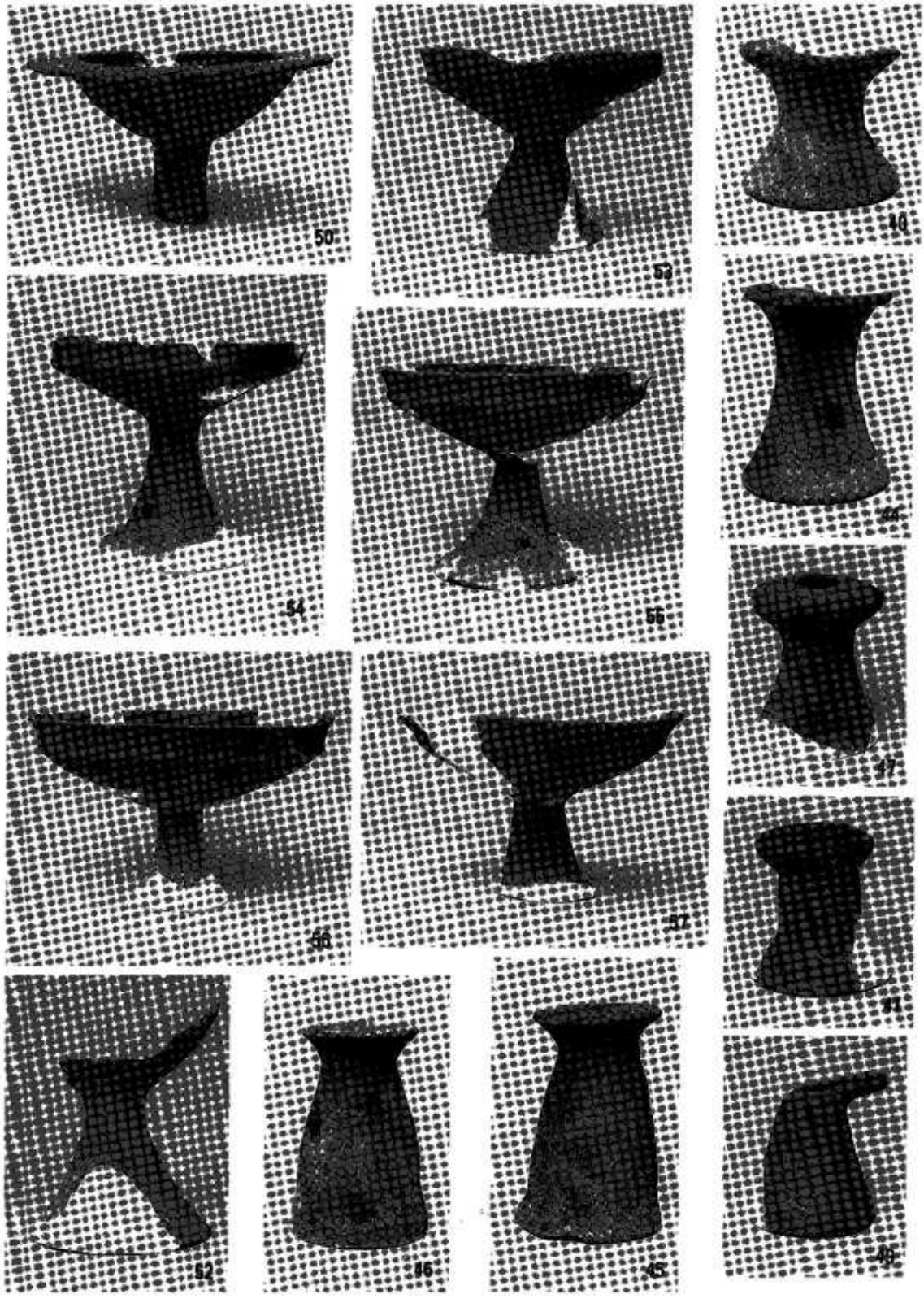


出土遺物Ⅰ（第3層出土）

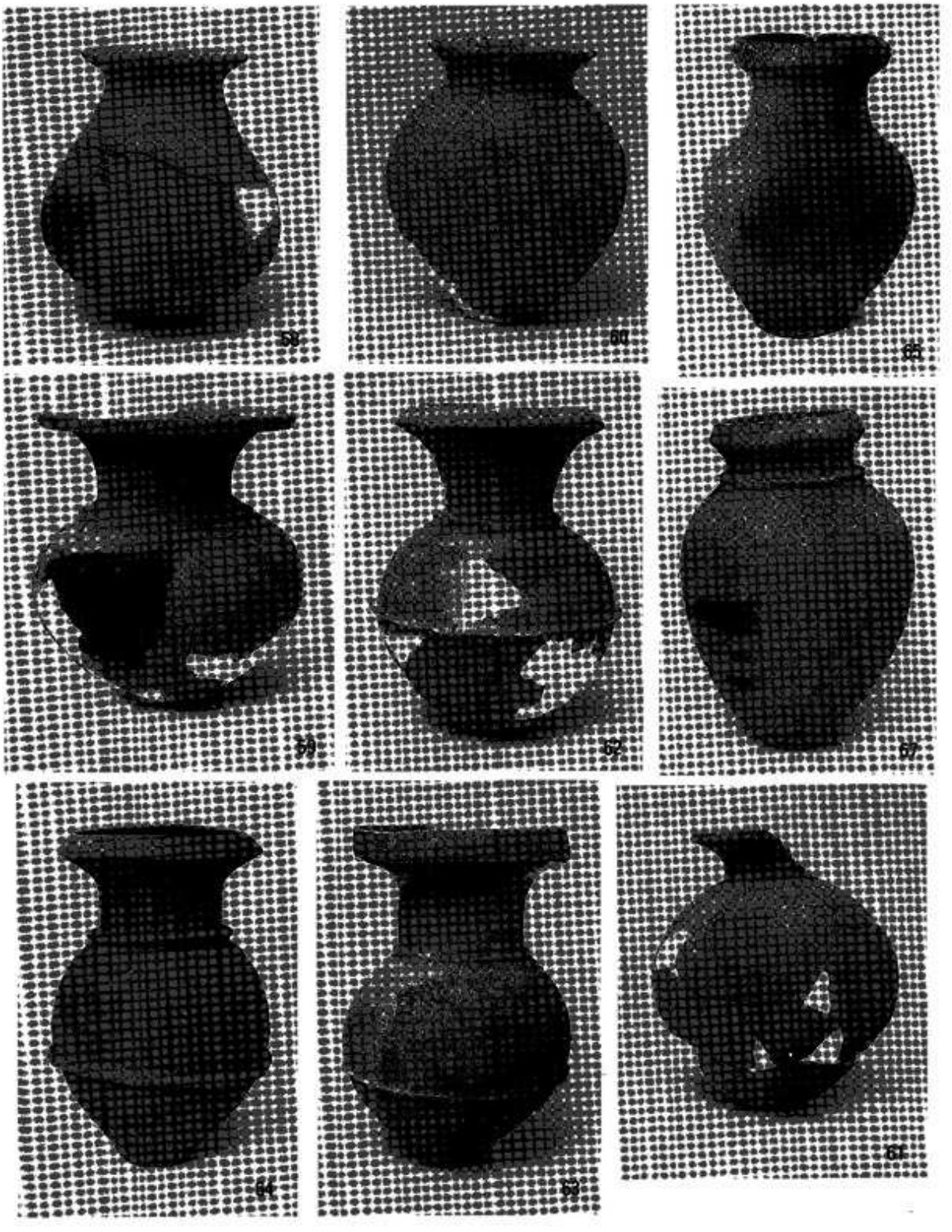


出土遺物II（第3層出土）

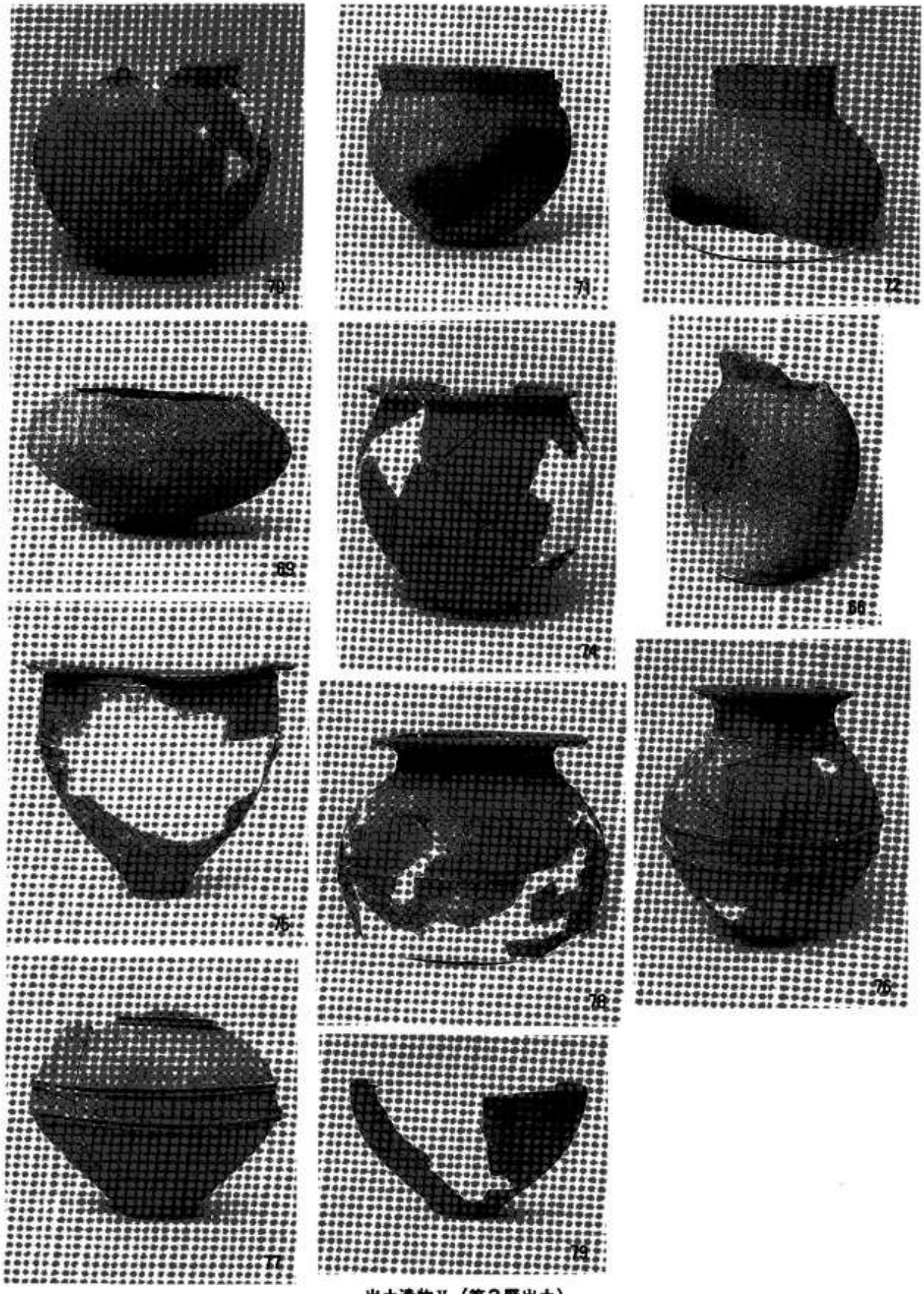
PL. 7



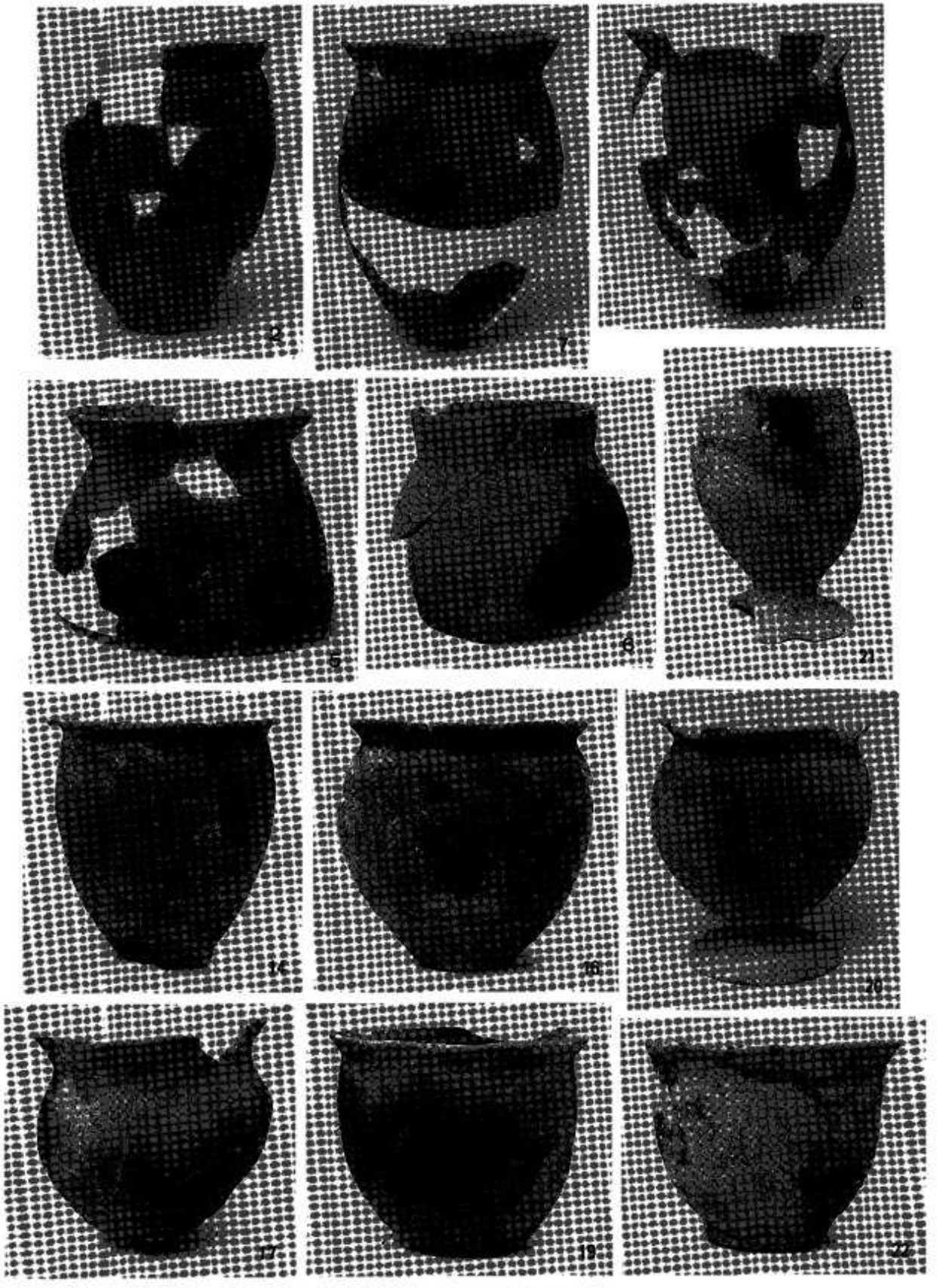
出土遺物Ⅲ（第3層出土）



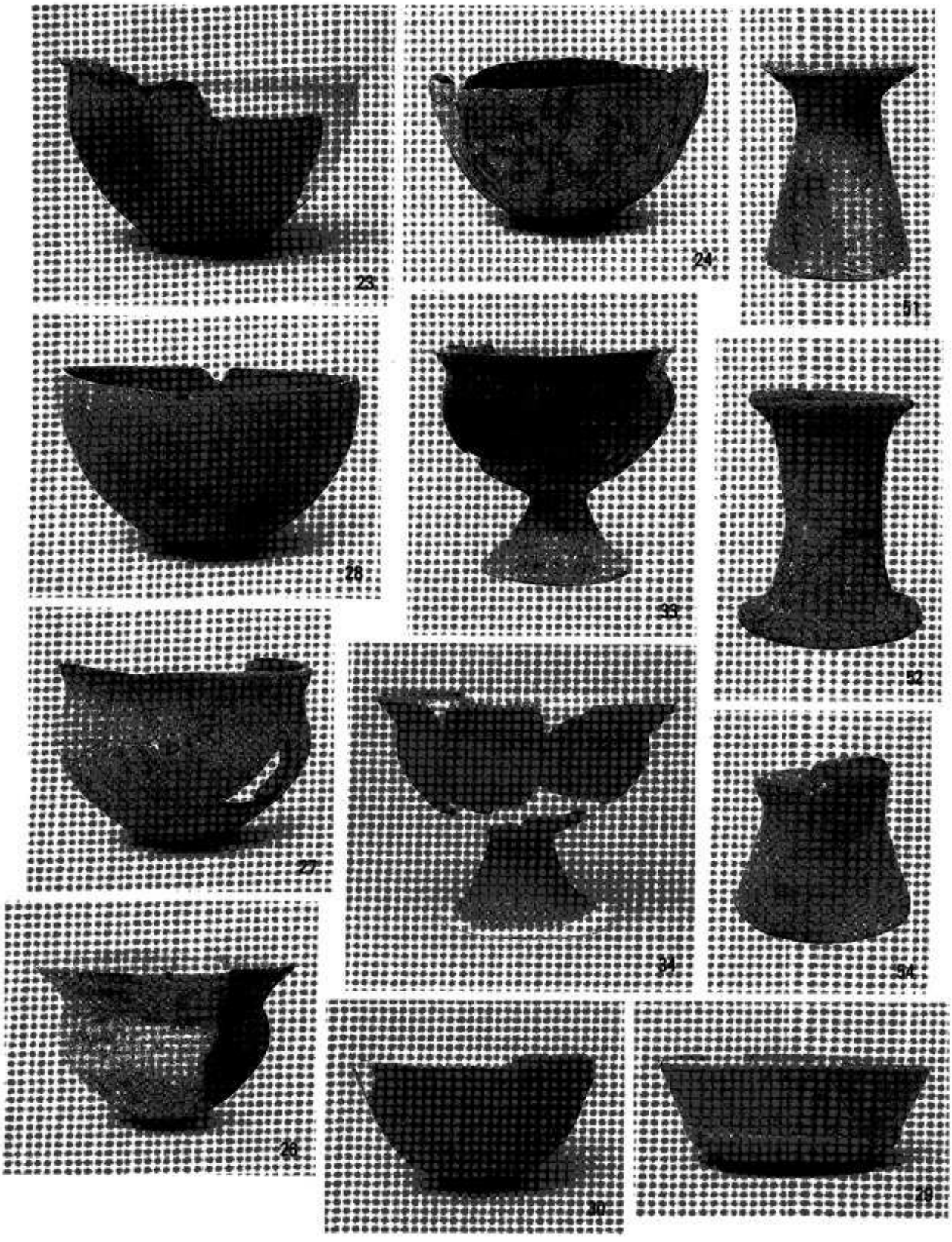
出土遺物Ⅳ（第３層出土）



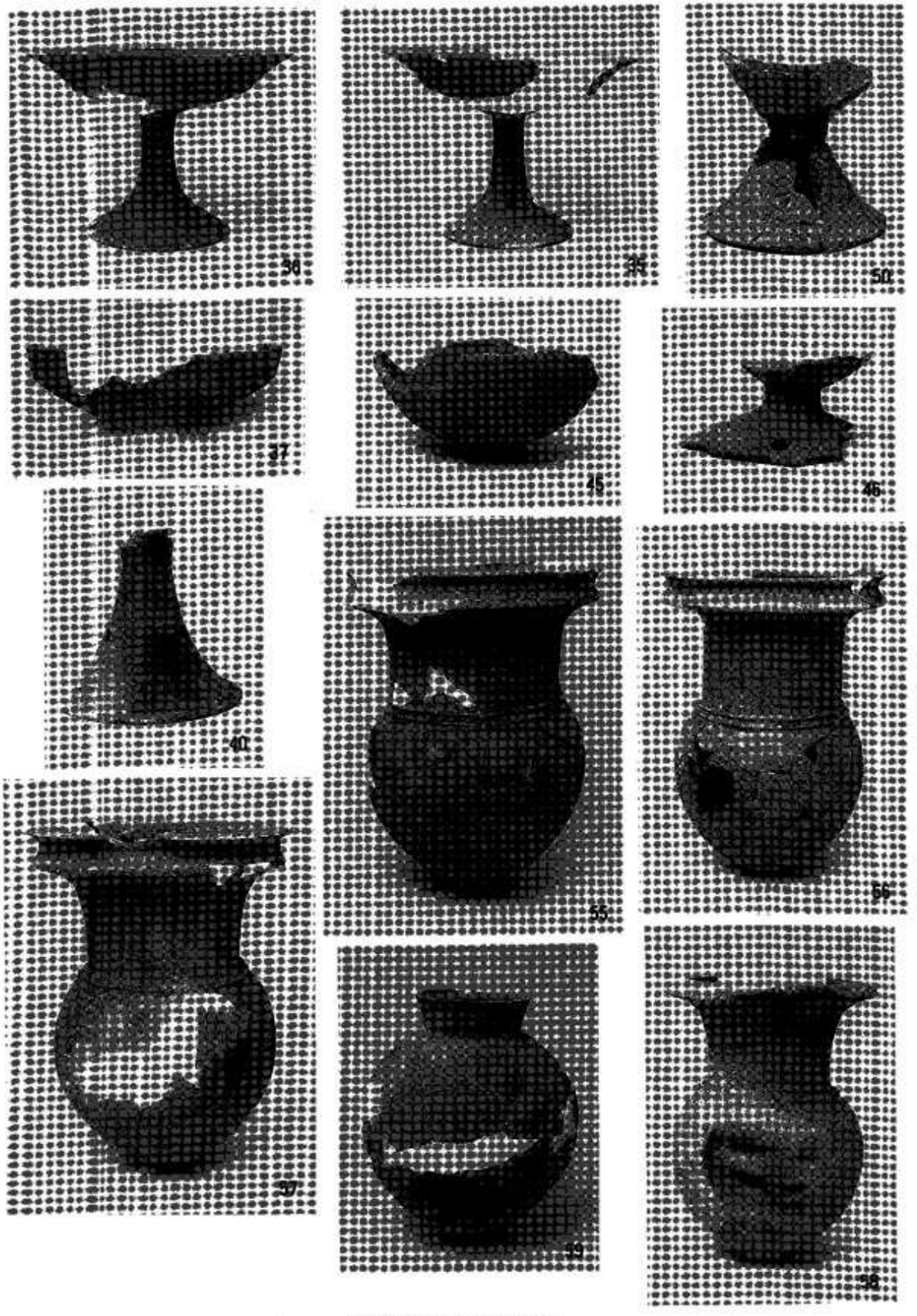
出土遺物Ⅴ（第3層出土）



出土遺物Ⅵ（第２層出土）

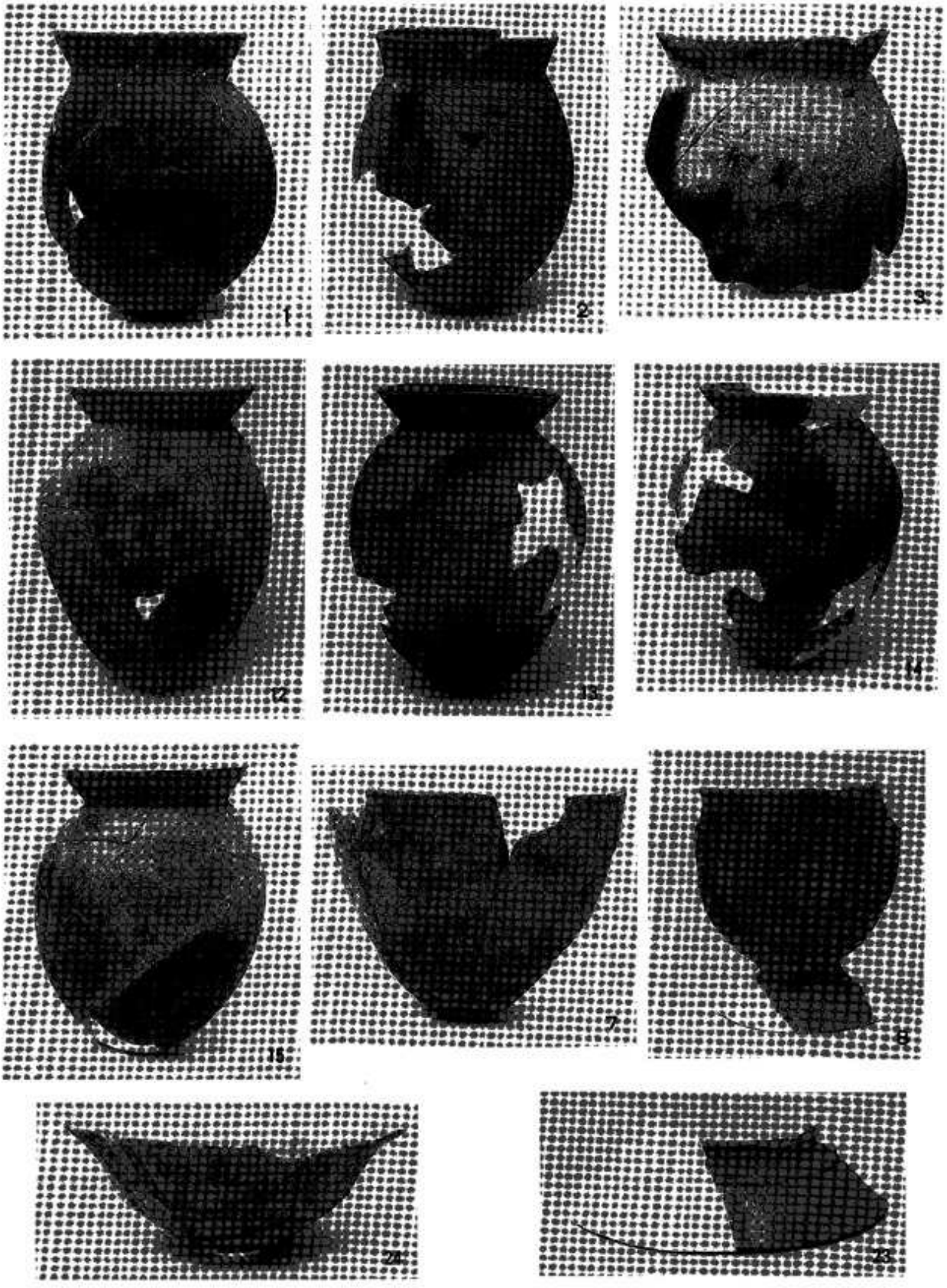


出土遺物Ⅶ（第2層出土）

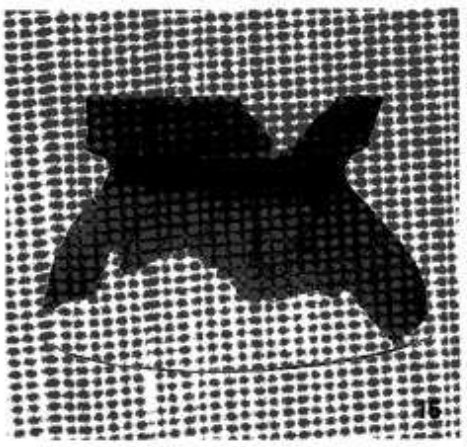


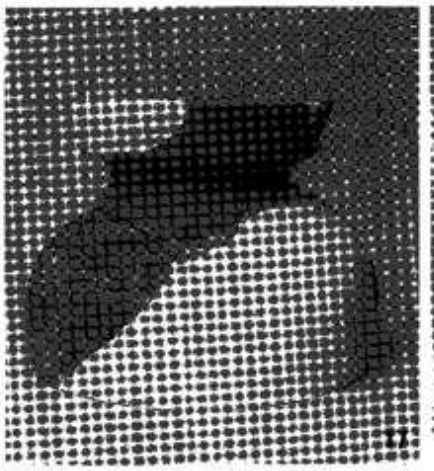
出土遺物Ⅷ（第２層出土）

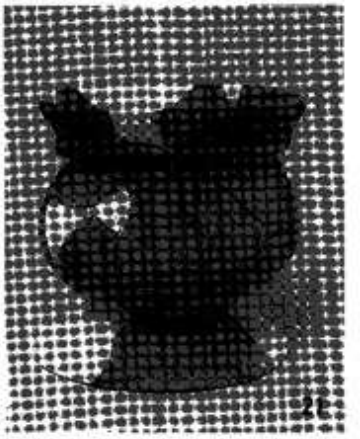
PL. 13

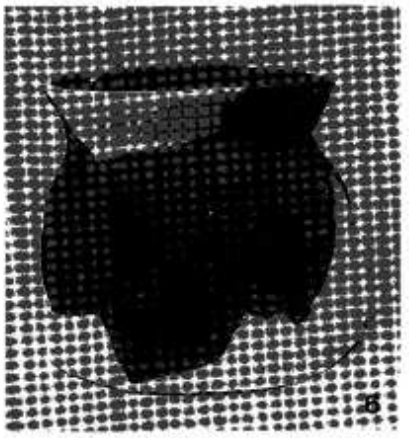


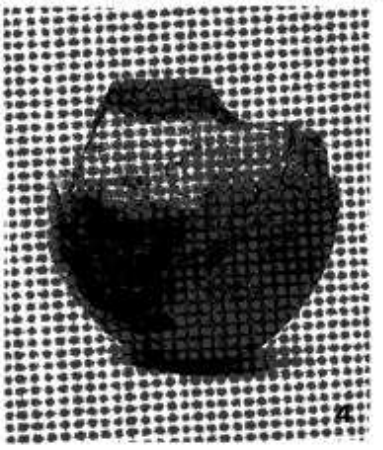
出土遺物Ⅸ（第1層出土）

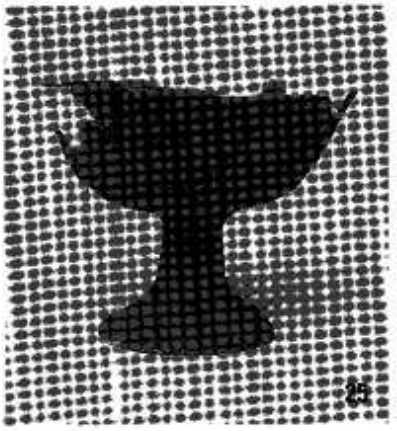


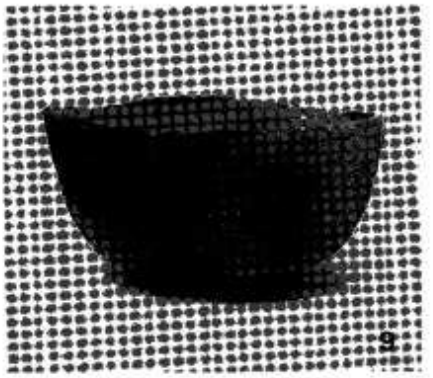


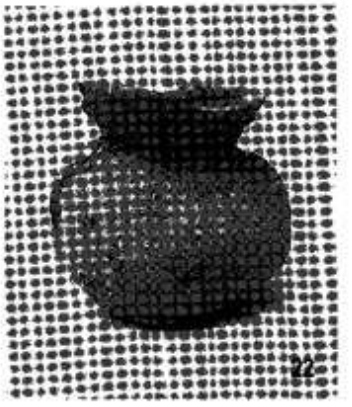


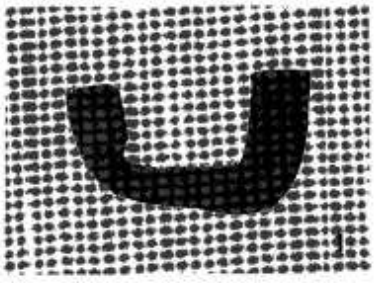


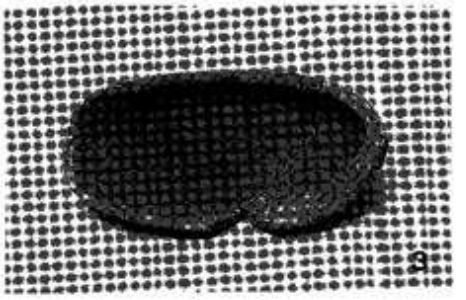




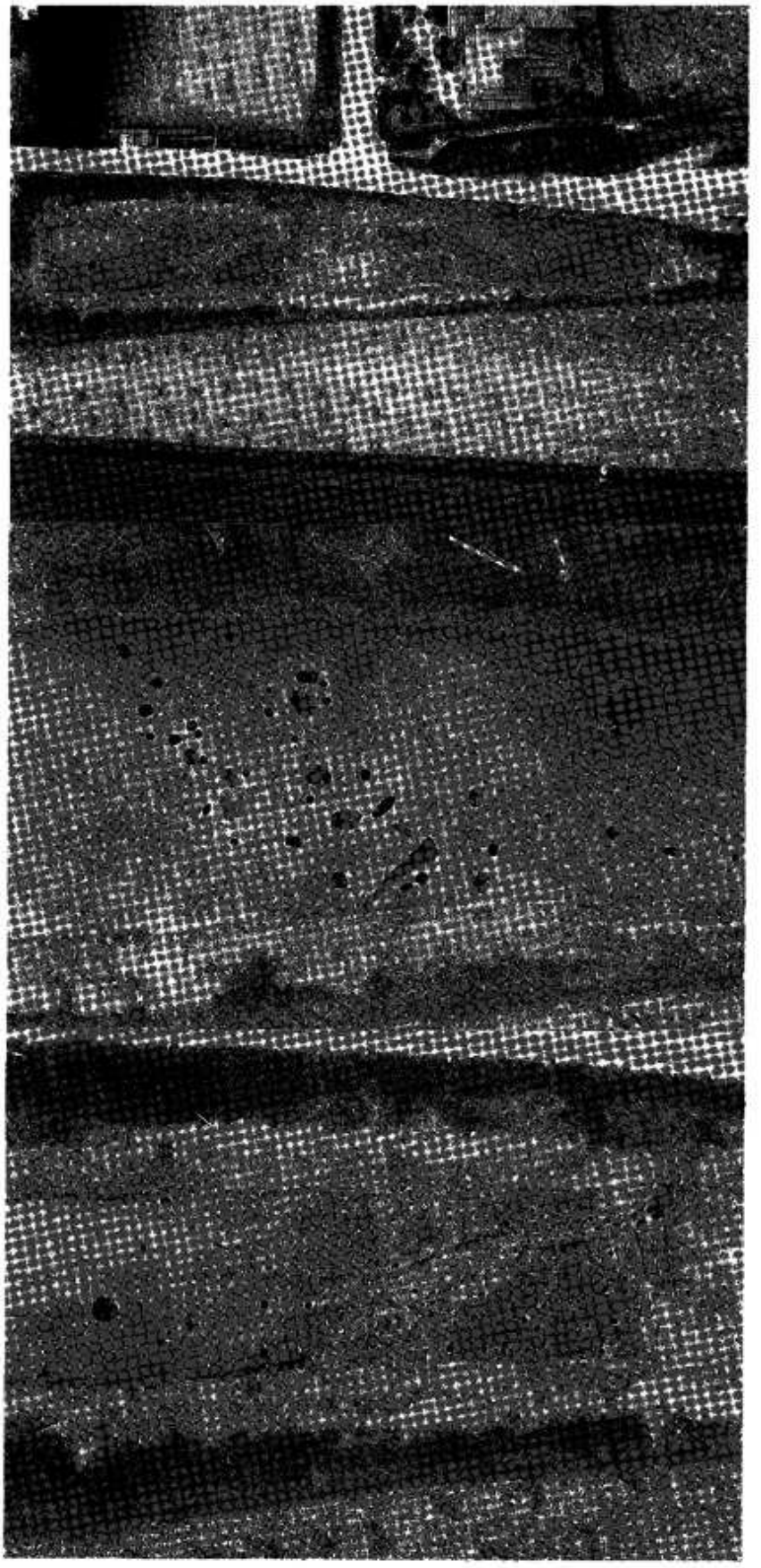








出土遺物X（第1層他出土）



a．東スス町遺跡全景
（上から）

b．北部遺構検出状況
（上から）

c．南部遺構検出状況
（上から）

本田孝田遺跡・東スス町遺跡

前原市文化財調査報告書 第49集

平成5年3月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印　刷　株式会社 津村愛文堂
福岡市早良区室見2丁目16番8号